

高瀨花陵著

北清見聞錄

東京

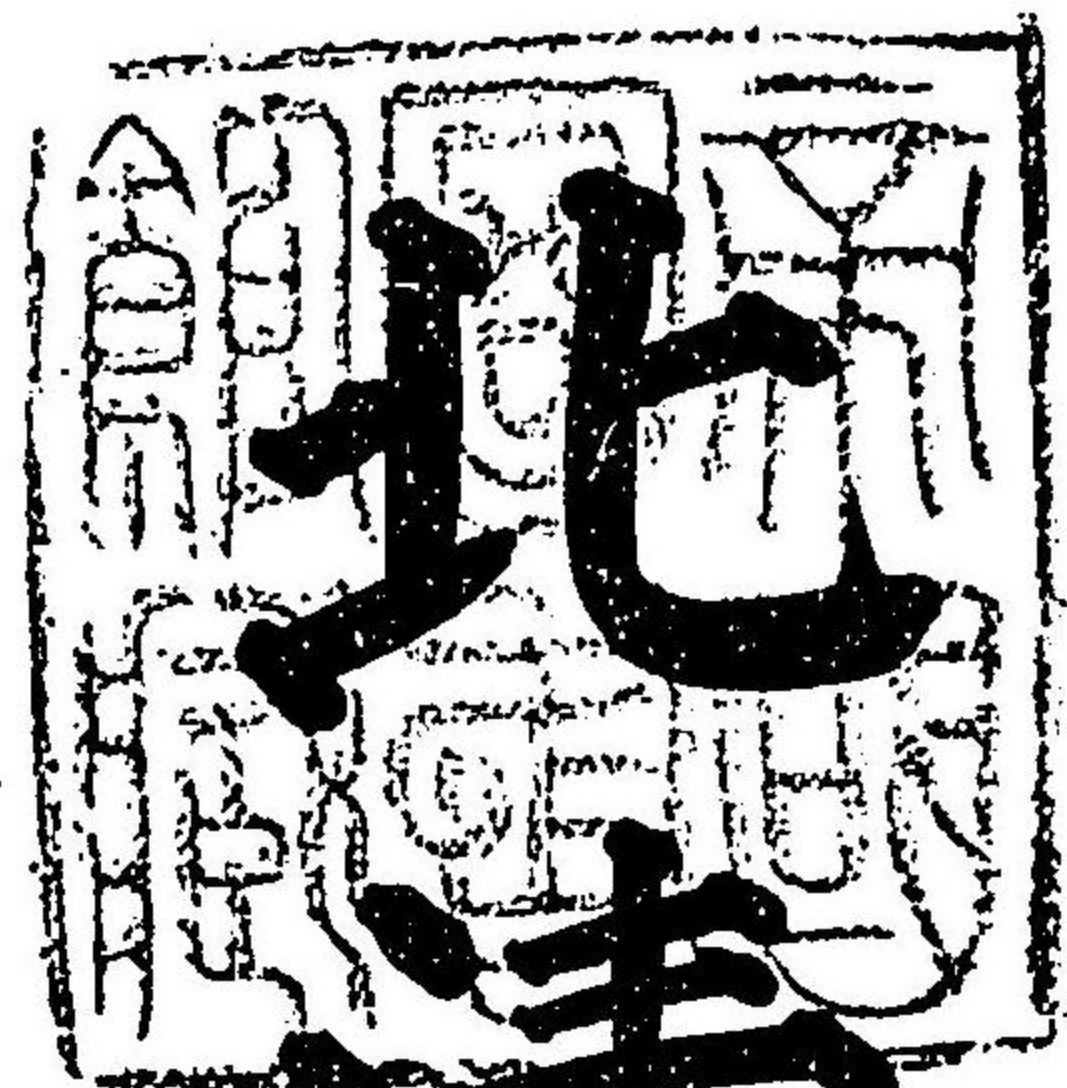
金港堂書籍株式會社

明治  
37 年 1 月  
丙寅



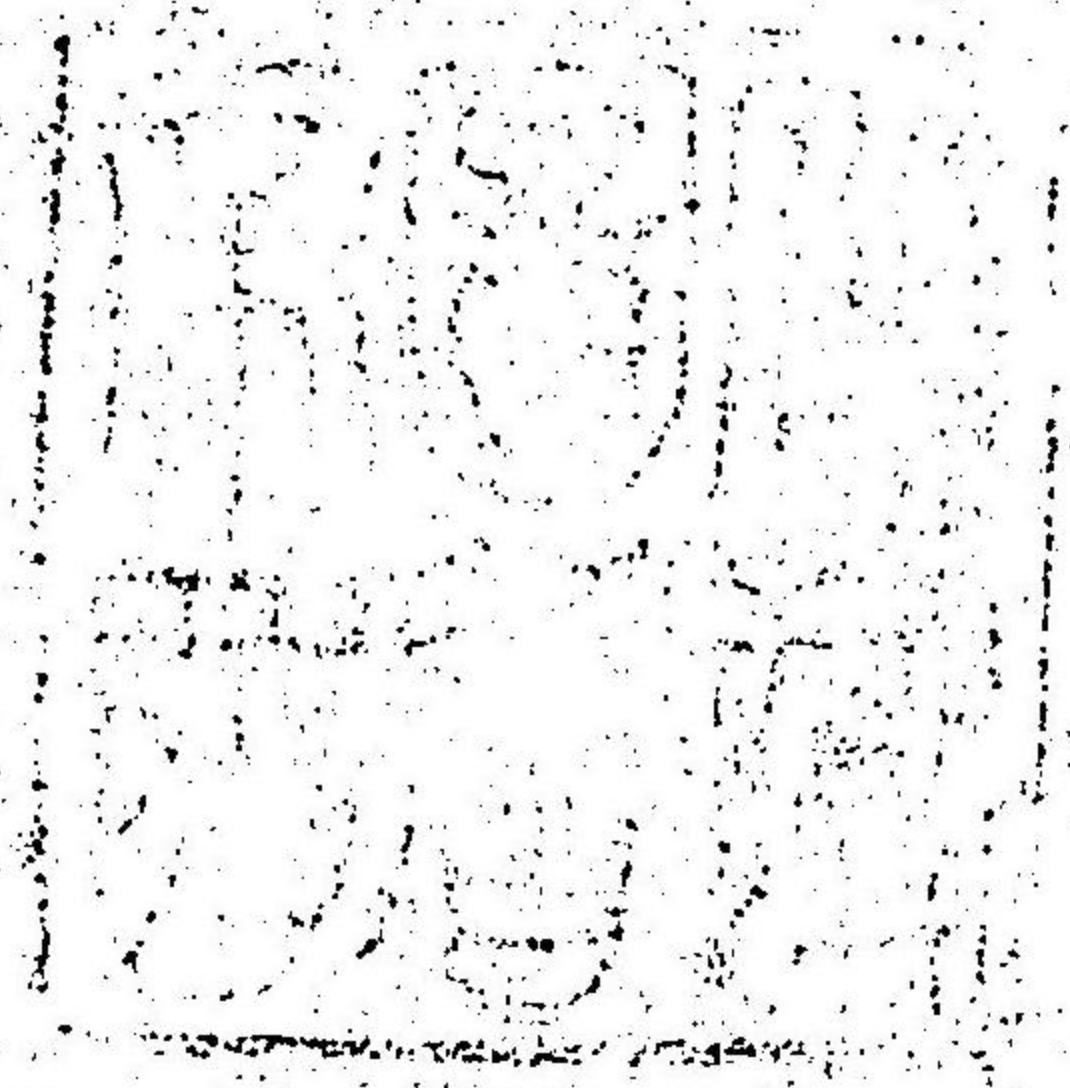
高瀬花陵著

北清見聞録



東京 金港堂書籍株式會社

明治  
37 7 1  
内交





北清見聞錄序

高瀨花陵君。示所著北清見聞錄。徵序于予。顧君年少立志。遊京都同志社。講歐米日進之學。後遊清國。聘北京東文學社教官。以薰陶人才爲務。暇則跋涉山河之險。堯吊興廢之迹。遊蹤遍北清。聞古見今。而成此書。其存志于文筆。可謂勉矣。北京者古幽燕之地。稱多慷慨悲歌之士。自春秋代有因革。金元而後。帝王所都。及順治帝一統天下。奠鼎北平。降至雍乾。邦畿千里。四萬餘州之文物。菁華薈萃于此。宮殿苑囿。輪奐宏壯。前古無比。一旦會陽九之運。庚申之難。爲熱河之播遷。庚子之變。爲西安之蒙塵。國勢漸弱。今也舉祖宗發祥之地。日受侵迫。束手無策。老大國之末路。可勝歎哉。雖然。國家盛衰。固有因。夫人才之缺乏。與否。卽國家盛衰之所繫。所以致清國今日之衰運者。主在人才之缺乏。故欲再見順康隆治。不可不以日進文明之學。陶冶人才。不然則亡國。



之恨入商女之歌亦不可知也。抑清國盛衰興亡。實繫我邦之利害休戚。是以我國民深察彼情形。須臾不可怠也。君在東文學社。從人才陶冶之業。復有此著。知其命意所在。一以救清國於既衰之後。一以使彼情形知悉我國民。功豈尠少哉。予與君同鄉閭。又共學窓。誼不可辭。乃書所感爲序。

明治癸卯仲夏

蘇峰學人

北京の天然は單調にして風趣乏しく、北京の社會は複雜にして興味饒し、邦人の北京に遊ぶもの殺風景なる生活に倦みて、却て面白き人事の研究を忽にし、不潔の都會、虚偽の人民なる概括的評語を以て一切を斷定し了るもの多し、是れ豈に眞個に北京を知るものならんや。北京は戰國の世既に堂々たる王國の都會たりき、隋唐の時強大なる北方の雄鎮たりき。金元以來は則ち禹域四百州の國都となり、廢興存亡幾多の變遷を閱盡して、遂に未だ首善の區たるを失はざるなり。是を以て其の城内と郊坰に存する城垣、殿堂、樓閣、寺觀、古碑、廢墟より某の山某の水に至る迄、皆懷古の史料にあらざるはなし。同時に又其の社會、住民、風俗、習慣、言語、禮法より衣服、飲食の料に至る迄、一として歴史的色彩を帯びざるはあらず。人若し數時間を偷みて北京城内を南北に一貫せりとせよ、彼は纏足せる漢種の婦人にも逢着すれば、纏足せざる滿洲婦人にも逢着すべく、駱駝に乗れる蒙古人にも遭遇すれば、黃衣を着せる西藏僧にも遭遇すべく、伊犁産の駿馬に鞭つ滿洲の貴公子にも行逢へば、支那化する露國教徒の子孫にも行逢ふべくして、直ちに其の種類の如何に雜多なるかを感ずるならむ。彼は又重なる牌樓、殿門、寶碑に刻せる文



四  
字の滿漢兩様なるを見、多くの市民の着せる衣服は南北兩地の産を折衷調和せるものなるを見、到る處の建築物が大概北部の石材と南方の木材とによりて結構せられ居るを見るべし。彼は城内の一飯店に入りて、暫時其の食卓に就けり。せよ、彼は直ちに其の卓上に陳列せらるゝ柑橘龍眼肉は江南の産たり、梨、葡萄は山東の産たり、燕巢、海參は南洋東海の産たり、羊肉、猪肉は滿洲蒙古の産たり、其の吸む所の酒は浙江の産たり、其の坐する所の椅子は雲貴の産たるを感せむ。而して彼は更に飯店の食卓珍羞、佳肴を選擇せるが故に然るにあらずして、彼が日常其居に於て食する米、肉、其物も遙遠なる江南と滿洲とより轉輸せられたるものたることを感するならむ。是れ實に北京に於て何人も感知する事實にして、而して此の事實は如何に北京が大國の首都として多方面の物貨を吸集し、各地の人種を混同し、社會の狀態、住民の性情が其の勢力影響によりて、複雑なる變化を來たせるかを證する者也。曾て余の北京に在るや、時に正陽門邊の城垣に登臨し、遠くは一沫の青黛透々として西南より東北に走るを望み、近く黃瓦を戴ける殿閣樓臺の巍乎たるを視、又俯して門外の大街、汚穢滿目、黃塵空に漲り、惡臭鼻を衝く

の處、車聲、馬聲、人聲相呼び相應して喧囂雜沓殆んど一幅の不潔世界を現するを見て、其の對照の餘りに奇なるを思ひ、北京の天然と歴史と人事とを一貫したる社會的研究の趣味多きを想へることありき。頃者、郷友高瀬君敏徳、北京東文學社に教鞭を執るの餘暇を以て、北清見聞録の著あり、文章平易にして觀察奇警、北清に遊へる者の何人も目撃せる所にして、而も又何人も輕々に看過する所の事實を捉らへて、能く其の言ひ難き所を言ふ。蓋し近時の良著述たるのみならず、或は以て北京社會研究の陳勝、吳廣たるべし。茲に君の余が文を徵せらるゝに會し、暫く余の北京觀を言ふて以て、君の著述の首途に饒す

駒込蓬萊の里に於て

癸卯七月卅一日

鞆鞆 上野岩太郎



## 北清見聞録序

六

日本は支那と同文の國とは誰も口にする所なれど、支那の人情風俗に通曉する日本人は極めて稀である。蓋し日本人の熟讀玩味する言語文章が支那の古文字であるからである。又日本人の手にする書籍は、多くは支那聖賢の希望し、修養したる事等を記載したもので、普通常人の風俗習慣とは全く趣味を異にしたものである。封建時代の儒者多くは聖賢の經典を讀んで、支那は聖人の國と無止に稱譽したのも全く空想なので、實情とは全く違つて居つた。されば彼我の儒者が互に交際する時、或は同文の邦人たる心地がするかも知れない。而かも普通常人の交際は、日本人と西洋人とのそれと何も異なる事はないのである。一衣帶水の隣國でありながら、彼れの人情風俗に通せざる此の如くなるは、鎖國の結果とはいへ餘りになさけないのではあるまいか。英國人が歐洲大陸の事情に通ずるに比すれば、日本人の支那に於ける知識は天地も音ならぬのである。かくも無識で、支那人に向つて何が出来るのであらうか。

昔時は弟子として支那を學んだのであつたが、近時は彼を教ふる爲めに學ばねばならない。昔時は彼の物品を輸入する爲に我の知識を磨いたのであつたが、近時は我の物品を彼に輸出する爲に深く學ばねばならない。昔時は彼の襲撃を防ぐ爲めに學んだのであつたが、近時は彼の經營を補助する爲に學ばねばならない。昔時の學問は消極的で足つたのであるが、近時の學問は積極的でなければならぬ。昔時の智識は受動的で十分であつたが、近時の知識は能動的でなければならぬ。昔時であるから、其の學ぶや中々精細でなければならぬ。而かも昔時は學者社會の知識で事は足つたが、近時は普通一般の知識とならないでは、其目的が達せられないのである。

余は日本人が支那人の嗜好に通せざるが爲に種々の滑稽を演じつつあるを聞く。譬へば日本の商人が、支那人の嗜好に投じない物品を輸出して少からぬ損失を招くといふが如き、なほ彼の舊士族が、自己の嗜好に叶ふ物品を頻りに塵頭に陳列して、大失敗の商賣をしたといふのと全く同一轍である。或は又支那の風土を識らないので、乾燥の空氣に曝せば、幾何の時日も立たずして忽ち破壊する物



品を輸入しつゝあるかをも聞くが、斯くの如きは全く北清の風土氣候に通曉しないからである。余は東北人が九州人を見るが如く、關東人が關西人を知るが如く、日本人が支那人を識るの日は一日も早からんことを願ふのである。されば余は日本人が一人にても多く支那の内地に入りて、生活の道を立てんことを望んでゐる。分けて高等教育ある人々が支那の内地に入り、支那教化の大任を負はんことを希ふのであるが、若し彼地に入りて其の風土人情に通じ、東洋の情勢に達することを得ば、豈啻支那人の爲のみならんや。亦日本人の利たること枚擧すべからずであらう。今や一百万の日本人が支那の内地に入つたとて、日本國には毫も寂寞を感じない。蓋し日本人は年々歳々殆んど五十萬人づゝ繁殖しつゝあれば、百萬人は愚か二百萬または三百萬の日本人が支那内地に雜居したとて、何れ日本に人口の不足を感じることはなからう。さらば彼に取つてはどうであらうか。日本人の支那人に於ける猶ほパンダネの麥粉に於けるが如きものであらう。斯く多くの日本人が支那人と雜居するに至つて始めて始めて、日本人が東洋問題の解釋に一大責任を負ふて奮起することの出来るのであらう。余は日本政府が奮發

一番更に大膽となつて、海外渡航者の爲めに便利を與ふことを希望せざるを得ない。固より愚夫愚婦の渡航には政府も困ることがあるかも知れない。然かし餘りに小心なれば、延いて人民をも小膽ならしむるので、余は當局の大膽を希望するのである。兎も角も支那の大問題は、數百萬の日本人が支那に雜居して始めて帝國の利益の爲めに解釋せられるのであらう。余は高瀬氏の著述が、聊かにも此大問題を解決せしむるの足場となるならば、實に同氏の勞の空しからぬことを認めざるを得ない。

高瀬敏徳氏は余の親友、渡清以來支那の事情に注目し、其の人情風俗を同邦の日本人に紹介せんと務められたのである。氏は支那人の現今の實情を研究せられたるのみならず、更に土地の風景より名所舊跡をも紹介せられたので、吾人をして宛から北清の風土人情を目撃するの感を起さしむるのである。高瀬氏は流暢優雅の文に巧妙なので、讀者に興味森々の感想を起さしめ、識らず知らずの間に北清の風土人情を知らしむるの技能がある。氏が紹介せられたる方面は支那普通人の人情であれば、從來の漢文讀書家にも少からぬ裨益を與ふるのみでなく、



一般普通の人々をして隣國人の氣象に付いて一驚を喫せしむるもの甚だ多かるべしと思はれる。若し夫れ一人にても此書の紹介に由つて隣國の經營に志す人あらば、余が此書の出版を祝するの意もまた空ならざるべし。

明治三十六年八月三日

海老名 彈正

從來世界は交通不便の爲め隔絶して互に相知り互に相交はること稀にして第十九世紀後半期以前は殆んど空名に存し、其實世界と名づく可き人間の活動は未だ實現せざりき。然るに、第十九世紀に於ける物質的文明の進歩は單に距離を縮小したるのみならず、始めて世界の各部をして交通感應せしめ、今や世界は恰かも大なる有機體の如く一種の統一的組織を爲さんとするに至れり。現今世界の各國は單に一國の經營の爲めに苦心しつゝあるのみならず、同時に一般人類の進歩の爲めに活動しつゝありと云ふも誣言に非ず。各國の人民は所謂世界共同の文明の潮流に進入しつゝありて一國民の動靜は必ず凡て他の列國民に影響を及ぼし、世界の一隅に於ける事件は亦た他の一隅に於ける事件に波動を感せしめざるはなし。故に、凡そ一國民としての問題を正當に解釋せんとするには世界の形勢を詳かにせざる可からず。列國は恰かも世界といふ有機體の一部となり、各國は他國と分離孤立しては自國の問題をも正當に解釋すること能はざるに至れり。

東洋の一國たる日本が將來如何なる發展を爲し得べきかは最早や其の内部の



一三  
議會若くは政黨問題にあるに在らずして議會も政黨も果して第二十世紀に於ける極東支那帝國の運命に關して正當なる解釋を爲し智慮ある政策を斷行し得るや否やに在て存す。從來政治家といへば單に國內の政黨を率ゐて能く内政上の改革を爲し得たる人物を言ひたりしが自今日本の政治家も歐洲大陸の政治家と同じく其の偉大なる者は必ず外交政治家たるを要するの時代となれり。而して日本の亞細亞に於ける位置及び其の天職を言へば日本人は亞細亞の改革者たり、亞細亞の教育者たり又た亞細亞の救濟者たらざる可からず。されば今後日本人は世界萬國の形勢に聰明ならざる可からざると同時に別して東洋の事情に精通するを要す。吾人は支那、朝鮮、暹羅、印度等に就て研究せんと欲せば西洋諸國の學者よりも能く之を理解するの能力を有する者なり。吾人が從來西洋を學びたるは其の文明を受けんが爲めなりき。吾人が自今東洋を知るの要あるは文明を彼等に與へんが爲めなりとす。一は教へられんが爲めに學び、一は教へんが爲めに學ぶの差異あれども之によりて日本人の能力を開發し、其の文明的天職を爲すに至ては則ち一なり。知友高瀬敏徳君此頃支那より、歸朝せられて一

書を著はされたり。吾人は今後大に此種類の著書續出せんことを希望するものなり。人を教へんと欲せば先づ其人を知らざる可からざると一般にして若し支那を啓發し之を改革せんと欲せば先づ支那人の風俗、習慣、政治、典刑及び其の精神的特色の如何なるかを知らざる可からず。之を爲さずして支那人を誘導し、若くは其の國家を改革せんとするは恰かも生理解剖を知らずして投藥する藪醫に異ならざる可し。焉んぞ其の成功を望む可けんや。彼等は支那人を化せんと欲して却て支那化せらるゝか然らずんば支那人度し難しとして匕を投ぐるの外なからん。日本人にして深く支那人を知り大に支那人を知るに非ずんば支那の改革は得て望むべからず。而して東洋の運命亦た救ふ可からざるに至らんも亦た未だ知る可からず。吾人は東洋諸國に對しては半死の病人を治療せんとする良醫の覺悟なかる可からず。故に吾人は此際最も深思熟慮して其の診斷を誤まら随つて其の處方に間違なからんことを希望せざる可からず。而して急劇の處方は容易に永久の良果を收むること能はざる可し。支那を改革し支那を啓發するの道唯だ一あるのみ。曰く教育是なり。



八月十一日記

浮田和民

一四

自序

戦機秘微の間に隠れて未だ現はれざるか、平和の曙光洩れんとして東方なほ夜に包まれたるか、兎にも角にも、極東の天地怪雲漠々として其の遂に如何に成行くかを知らず。此の時に於て、余が小著『北清見聞録』成る。敢て彼の難問題を解決せんが爲めの著作に非ずと雖も、今や争ふて清國に向ふわが國民の眼目を、此の小冊子の上にも假して讀過一番したらんには、また多少の裨益なきに非ざるべし。

明治三十六年八月四日

花陵 高瀬 敏徳



# 北清見聞録

## 目録

### 一、入清記

- ◎世界が解釋すべき大問題◎世界外交の中心◎世界の大市場◎新文明の父母◎微志◎男兒の意氣◎武士どもの夢の跡◎北清の要港◎舳板◎支那街◎支那料理◎天然の味◎萊陽梨◎葡萄◎野菜菓物の栽培◎山東農民の横嚮◎乞食のやうな労働者◎別世界◎芝罘港◎通商上の位置◎百鬼を白晝に見る◎港内風荒る◎太沽の港◎天津の門口◎太沽港の將來◎水平線上の一線◎殘破の砲臺◎砲臺の上の旭旗◎日本ホテル◎塘沽◎荒涼の感◎停車場◎客車◎直隸の平原◎天津停車場◎群れ來る賣子◎銀貨交換◎一帶の連山◎前門車站



## 二、雜觀雜聞

◎北京城◎紫禁城◎市街◎交通機關◎運搬機關◎道路◎下等社會◎中  
以上の社會◎三年間十五萬兩の利益◎北京の婦人◎早婚◎蓄妾◎支那  
人の體格◎家内の生活◎交際術◎迷信その一◎迷信その二◎迷信その  
三◎迷信その四◎迷信その五◎迷信その六◎將軍文字なし◎陸路日本  
にゆくことが出来るか◎北京の教育◎北京の四季◎交民巷◎旭旗

一五

## 三、北京の冬

◎初氷◎秋田と同緯度◎世界至る處に日本町◎常に氷點以下◎雪は極  
めて稀なり◎冬が却て愉快◎鼻下に白き霜◎蒙古來の寒風◎自然と戰  
鬪◎氷滑り◎氷の上に尻餅◎氷船◎防寒の用意◎皮衣◎防寒頭巾◎耳  
袋◎冬帽子◎冬靴◎炕◎爐子◎煤◎多く衣て暖を取る◎感心なる下等  
社會◎惻れなる非人乞食◎北京の冬の夜、

四九

## 四、觀劇の宴

◎邸内の觀劇◎長子出生の祝ひ◎欠伸の百遍◎舞臺◎設けの席◎お客  
様◎婦人席◎媒姆◎宴會に婦人なし◎劇場に婦人なし◎奇怪なる演劇  
◎半ばは日本の能◎劇の面白味◎立廻り◎支那料理◎酒◎乾杯◎宴席  
に酔漢なし◎水煙管◎長煙管◎煙草好き◎婦人席の御馳走◎怪しの一  
室◎幕なしの演劇◎時代物◎世話物◎空氣洋燈◎夜寒◎亡國の臭ひの  
する料理◎午前二時

五七

## 五、蘆溝橋

◎始めて驢背◎一直線の大道◎北京の三大工事◎初春の野の眺め◎石  
門◎一小城壁◎人形のやうな支那婦人◎壯大な石橋◎永定河◎永定河  
小學堂◎一旅店◎六十歳の給事◎上等の一室◎晝飯◎お祝儀の催促◎  
露學堂◎歸路◎外人共同の競馬場◎競驢◎善果寺◎一回の不手際

六八



## 六、長城と十三陵

七六

◎大陸の光景◎大國的の事業◎端午の節句◎同行者◎一行の頭領◎N氏夫人◎一行の旅装◎一種の乗物◎大陸性の驕陽◎見物の群集◎一縷の大道◎田野◎元代の皇城◎清泉◎赤大根◎雞卵◎旅行中の食物◎餅◎水飯◎石花菜◎饅頭◎餛飩◎京河◎沙河◎石橋◎また見物の支那人◎また石橋◎一隊疲憊困勞◎馬市口の旅館◎夜食◎草鞋脚絆のまゝに熟睡◎屋外に露宿◎早晨行◎山近し◎龍虎臺◎南口驛◎騾橋◎日本語◎回々の少年◎騎驢◎峽間の風色◎奇峰秀嶺◎居庸關の城壁◎樓門◎居庸關驛◎居庸關の旅館◎盪金局◎上關◎彈琴峽◎八達嶺◎北門鎖鑰◎廣潤なる平原◎要害◎思ふ昔し◎城壁◎壁上行◎峰頭の眺め◎旅店内の有様◎騎兵と歩兵◎晚飯◎弦月◎駱駝隊◎山陵に向ふ◎一村を擧げて見物◎利には機敏なる支那人◎菓樹林◎禮金を目的◎小田原評議◎大明十三代の皇陵◎野中の巨人怪物◎水なき河◎文廟◎碑亭◎樓

門◎享殿◎山陵◎樓閣◎石碑◎涼風何の心か◎壊れた石橋◎一面の平地◎石門◎文臣の石像◎武臣の石像◎馬◎麒麟◎象◎駱駝◎獅子◎豹◎一大碑亭◎石柱◎大紅門◎巨大の牌樓◎昌平州城◎回々客店◎敗軍の弱卒◎馬車◎破れたる道路

## 七、支那

一一八

◎一個の疑問◎幽霊と見たる枯尾花◎支那亡國論◎支那に國家なし◎利得の念盛なり◎金錢なる思想の深く浸染せる實證◎金錢の爲めに苦痛を忍ぶ◎農民の儉吝◎賄賂を貪り租税を私す◎所有者不定の土地◎大官小官みな同じ貪慾の心◎更に一例◎支那官吏社會の痼疾◎一種の受負仕事◎有利の官吏◎學問に熱心なる讀書人◎受験者一萬人◎利は支那人理想の神◎及第は利に進むの門◎泥棒根性◎利を好むものには隣人なし◎國民の中堅腐る◎亡國の哀音◎支那人の頑夢◎神經遲鈍◎意氣地なき柔順◎靈的神經の萎靡◎街上の酷刑◎街上の屠殺◎憐憫の



情なし◎外國の打撃◎暢氣なる改革◎文明の海嘯に覆されん◎遊惰逸  
 樂◎男女間の腐敗◎不品行なる病人◎支那人もまた人間なり◎清國訓  
 化の最好期◎清國經營の急務

# 北清見聞録

## 入清記

高瀬花陵著

世界が解釋  
すべき大問  
題

世界外交の  
中心

世界の都市  
場

第二十世紀に於て世界が當さに解釋すべき大問題は皆に一のみではあるま  
 而かも所謂支那問題なるものは其の最も大なるものに相違あるまい。  
 今や北京は殆んど世界外交の中心であるかの觀がある。少くとも日本外交  
 の中心點は北京である。若しもわが日本が北京外交の舞臺に於て敗を取るこ  
 とがあるならば大日本の理想は遂に一個の空想に過ぎない。小日本とても其  
 の自個獨立の氣鋭を挫折せられて保守退嬰の極遂に滅亡に了るであらう。  
 今や世界は清國を公開して世界の大市場となさんとしてゐる。英國はいふ  
 までもなく露國のメルニーに於ける獨逸の膠洲灣に於ける佛蘭西の廣州灣に  
 於ける支那の富を吐吞して其の利を占めんが爲めには經營是れ日も足らざる

北清見聞録



が如き有様である。わが日本は幸にして今日支那との貿易に於て英國の次に位してゐるが、永く此の地位を保つことが出来るであらうか。獨逸の雜貨は今日に於て既に續々輸入せられて、殆んど日本品を驅逐せん勢である。兎にも角にも支那市場に於ける世界の競争は將來益々劇甚を加へて、其の勝敗は國家の消長に大影響を及ぼすに相違ない。

支那に四億の人民あり、人道の大義を以てすれば共にわが同胞。特にわが日本國民に取つては其の舊文明の父である母である。

翻つてわが日本は清國人民の爲めに新文明の父母たることが出来るであらうか。

之を要するに國家問題、實業問題、宗教問題、教育問題、社會問題は、清國の爲めに世界が之を解釋すべく、第二十世紀といふ時間が與へられたのである。中に就て日本は此の問題の解釋に最も直接の關係を有するものである。われもし能ふべくんば此の事業の爲めに萬分の一を盡すことを得んかな。即ち支那に入らんと徴志を定めたのである。

もし夫れ世界外交の活舞臺に於て、絶えず活劇の演せらるゝを觀るたとひ身は看客の地位に在りて、其の局に當らずと雖も、其の快正さに、團扇の劇を見るよりも大なるべく、男兒の意氣常に豪壯なるものあらん。即ち足おのづから北京に向つたのである。

神戸港で郵船會社の相模丸に搭乘したのが、八月二十八日の午前十一時黃海の渺茫たる波の上に、遙かに山東の一角を認め、同三十一日の日も暮るゝに近き頃であつた。榮城灣や威海衛や、摩天嶺や、將た彼方の旗順口や、大連灣や、わが勇武なる武士どもの夢の跡は、夕暗の影より夢の中に思ひ送つて、夜半眼覺むれば、船は芝罘の港に碇下すとて、水夫等の機械を運轉する音が、疊々として耳を驚かした。デッキに上つて試みに一瞥して見ると、紅燈綠燈港内に輝き渡つて、流石は北清の要港と先づ眺められた。

夜明けて更にデッキに上つて見ると、不潔な水主等が舳板を船近く漕ぎ寄せ、上陸の客を誘ふもの、菓物などを齎るもの、早や船を取圍んでゐた。舳板は支那流の小舟で、厚さ二寸以上もあらうといふ板を以て、極めて頑固に製造したるもの



である。

同行六人と共に舳板を情ふて上陸し、先づ領事館に行きて、領事水野氏を訪ひ、日本郵便局に行きて、故郷に郵便を送り、更に支那街に入りて、行く／＼市店の有様を見、人民の行動を見た。流石は開港場で、市店の稍大なるものもあり、往來も賑合ふては、ぬれど、街路の不潔なる、一般人民の不潔なる、潔癖のわれ／＼、日本人に取つては、如何にも不快の感に勝へない。

支那に入るものは、先づ支那料理を食ふことに慣れねばならぬといふので、唯ある料理店に入つて、午食を命じた。最初戸を入ると、其處が直ちに厨房で、肉野菜などの汚なき器物に盛られたる厨子等が、膚も見はに汚なき手して料理せる、先づ視感を悪くし、加之異臭紛々として、鼻感を悪くした爲めに、いとさへ油、濃い支那料理が、わが最初の味感に、少なからぬ悪感を與へた。

人の味つけた料理は、國により、處に依つて、異なる處があるから、他國に入ると、自然口になはぬ處もあるが、天然の味は何處に行つても、人の口に適ふといふのは、實に不思議である。街上に賣つてゐる菓物の中で、梨子、林檎、葡萄などは、な

支那街

支那料理

天然の味

菜

葡萄

野菜菓物の栽培

山東農民の模範

乞食のやうな労働者

かく見事なものである。中には梨子の一種萊陽梨と稱するものは、名物中の名物、口に含めば、自然に溶け去つて、些しも滓を留めず、恰かもアイスクリームを啜るがやうで、其の味、極めて美にして、極めて妙である。葡萄には二種類あつて、一つは圓く、一つは楕圓である。そして楕圓なのが山東固有のもので、圓いのは舶來種であるさうな。獨逸人某氏芝罘の附近に葡萄酒醸造所を設置して、既に醸造に着手してゐるといふ話である。

聞く所に據ると、山東省一帯の地味野菜、菓物の栽培に、適し、年々南北支那に輸出するもの巨額に上るといふことである。そして彼等農民の厘毛の利をも、敢て見逃さざる、十斤五錢の手作の野菜を食するよりも、一斤二錢の外國來の昆布を食する方、諸種の點に於て利益があるといふので、わが田畠に産する處のものは、みな之を市場に輸送するといふことである。支那農民は一般に勤儉であるといふことは、平常聞いてゐる處であつたが、山東農民の模範なる、愛すべくもまた憫むべきである。之れ一つは人口の繁殖夥多にして、土地の生産之に伴はず、人民の生計困難なるにも依るであらう。見よ、芝罘港内至る處に、乞食のやうな

北清見聞録

五

四



労働者の絡繹たるを。不潔を物ともせず汚穢を意とせず最劣等の粗衣惡食に甘んじて種々の勞役に服したるわが輩始めて見る物の目を驚かすばかりである。されば遼東の野を開拓して多大の農産物を出し營口の港をして今日の繁榮をなさしめたるも山東より移住せる此の勤儉なる農民の力であるが今や彼等はまずく其歩を進めて中部滿洲より北方滿洲をかけて次第に侵蝕し行くといふことである。露西亞が彼が如く速かに滿洲鐵道を成就せしめたるもまた山東出稼の労働者の力其の多きに在るといはねばならぬ。

汚ない町を出で行いて日本人俱樂部に暫く休憩し更に各國領事館の在る高臺に上ると別世界に入つたやうな心地がする。自然は人間に依つて汚されまた人間に依つて裝飾されてゐるといふ感が忽然として胸に湧いて來た。煙臺即ち外人の所謂芝罘は北清に於て比較的空氣清爽氣候温和海水清澄といふので外人は夏日避暑の爲めに來遊するものが多いといふことである。高臺の背面なる濱邊には洋風の建築が數多見渡される。

凡そ黃海の波の洗ふ處直隸灣渤海灣の浪の寄する處清國は唯だ僅かに芝罘

天津營口の三港を有するのみである。芝罘はその地形から見ると後に山を負ひ前に半島灣曲して港を抱き先づ可なり之地勢で水も大船を泊するに足る深さはあるがあまり濶きに失して強風一たび至れば港内波高く之を凌ぐに甚だ困難を感ずるのである。且つ又その通商上の位置よりいふて見ても今日は兎もあれ將來に於ては決して有望の港といふことは出來ない。蓋し山東の地たる山岳重疊して交通不便居民一般に貧窶にして購買力に乏しく今日芝罘が毎年一千數百萬兩の貨物を吐吞してゐるといふのも畢竟するに港に集り來る貨物を遼東地方に轉輸するといふに過ぎない。されば牛莊開港以來大にその貿易地區を縮少せられたといふではないか。まして大連灣の經營成り秦王島の築港竣功の時となつたならば今日の繁榮だも持續せんことはいかにも覺束ない話である。

船に歸つて見ると係の船員は數多の苦力等を指揮監督してなほ荷卸に多忙であつた。見よ彼の暢氣に働いてゐる苦力等を。船に入つて先づ彼等の形相を一見した時には實に驚かざるを得なかつた。顔面の垢に任かせて黑人の如



百鬼を白晝に見る

く。なる。もの。衣物の汚れ破れて塵埃を身に纏ふてゐるか。塵溜の中から顔や手足を出してゐるか。何れとも分別し難きもの。裸體のもの。目の爛れたるもの。鼻の落ちたるもの。正さに百鬼を白晝に見るか。心地がした。蓋し思ふに彼等は殆んど動物と並行してゐる。否。寧ろ動物よりも以下ではあるまいか。少くもその汚穢なる點に於ては確かに眞理である。もし夫れ此の動物的勤儉と動物的忍耐力とを以て世界を横行せば何れの處の國民か之に及ぶものがあるらう。但し其の智力は暗愚従つて其の舉動も極めて遲鈍にして日本の仲仕等が一日にて爲し得べき仕事も彼等は二日以上を要するであらうと思はれた。

港内風荒る

翌日はなほ残れる荷物を揚卸すべき筈であつたが風吹起つて波次第に荒く午後になると風浪雨を交へて天地陰慘船體の動搖甚しくして港内にありながら船に悉ふもの多く吐瀉の聲さへあちこちに聞かるゝのであつた。此の風浪を避けて向岸半島の影に逃れた汽船も其の數極めて多かつた。港口に碇泊せる各國軍艦を眺めて見ると其の艦體の小なる二三のものは動搖特に甚しく今に轉覆しはすまいかと思はるゝ程であつた。その翌朝になつて風は漸く収ま

大沽の港

つたのであつたが餘波なほ高くして空しく一日を送り更に明けての日午後六時頃までにやうく荷揚を了つたのであつた。

日暮れて港内に燈火の點々たる頃船出して一夜の楫枕直隸灣内に夢覺めて九月五日の朝日の影を見渡せば渺茫として其の極まる處を知らず。波を切つて船の進めば下午二點にして遙かに帆影の來往漸く繁きを見海水の漸く黃濁せるを見て始めて大沽の港の近きを知つた。船は次第に進みて遂に海水の濃き味噌汁の如く濁れるが中に碇泊した。近きあたりには七八隻の汽船が碇泊してゐる。支那ジャンクも數多漂ふてゐる。でやうく大沽の沖に到着したといふことは知るのであるが直隸の大平原は何れの處ぞ大沽の市街は何の處にあるか遙かに西の方を見放くれど大小の船の外何物をも見ることが出来ない。蓋し船は大沽港外十里の處に碇泊するのである。

天津の門口

大沽は天津の門口である。白河の流れ泥砂を齎して濱海を埋め艦船の近づき難きところ清國の防備上よりいへば要害無双と稱すべきであらう。而かも天津の商業上よりいへば不便此上もなき港である。天津が北清貿易の中樞に

北清貿易の中樞

北清見聞録



大沽港の將  
來

して前途益々多望であることは今更にいふまでもない。その貨物の供給の及ぶ所近くは直隸、山西の全部及び山東、河南の一部を領有し、遠くは蒙古、陝西、甘肅に達してゐる。絲及び茶と並立して支那に於ける重要貿易品の一たる蒙古、陝西、甘肅の羊毛、駝毛の如きも又みな天津に集つて然る後に外國に輸出するのである。然るにその門口たる大沽の港は此の如く不便を極めてゐる。たとひ白河を浚渫すとも瞬時を怠ることなく土沙を流下する自然の力を壓服する人工と金力とが持續するであらうか甚だ疑はしい。詰まる所天津貿易出入の大路は京漢鐵道、京榆鐵道並に津鎮鐵道等の專有する所となつてその海上の門口は大沽を去つて秦皇島に移るに至るかも知れない。

水平線の上の  
一線

お迎ひに來たライターに乗移つて白河河口に向つて進んで行くと水平線の上の一線を畫して次第に現はれて來るのが直隸の大平原である。そして彼方此方にジャンクが來往してゐるなど始めて見る目にはまた一種の趣味がある。更に進んで行くと殘破の砲臺が白河を中に挟んで拳匪亂の紀念碑のやうに立つてゐるのが見えて來る。近づいて見ると其の左岸の砲臺の上に旭旗が國威

殘破の砲臺  
旭旗の上の

日本ホテル

を示して翻つてゐるので何となく愉快である。然かも砲臺全く破壊せられて一つも完全なるものなく更に白河の河岸に外國兵の來往するを見るに及んでは清國の爲めに悵然として嘆息せざるを得なかつた。幾度か左に曲り幾度か右に曲つて白河を遡り塘沽に上陸すると天津への汽車は今しがた出發の後止むことを得ずして日本ホテルに投宿。名は大なる旅店なれど其實は支那人の家屋を假りの宿室内狹苦しくてまだ裝飾も整はず器具寢具に至るまで不完全なものである。

塘沽

白河に入つて直ぐその右岸が大沽次にまたその右岸に連なるのが西沽、西沽の次が塘沽である。塘沽は白河の左岸で西沽と斜めに向ひ合つた一小市街ではあるが停車場があり各國軍隊がまだ少しづつ駐屯してゐるものもあるといふので市店稍々賑かである。

荒涼の感

散歩がてら町の外に出て見ると各國軍隊に壞された人家がまだその儘に残つてゐるのもあつて戰役の當時が思ひ出され恰かも此の時廣漠たる野の未地平線の上遙かに夕陽の影の漸く淡く成り行くを見た時には荒涼の感坐る胸を



衝いて起つて来た。

還つて町に入ると、あちこちのピヤホールなどで、各國の兵士等が酒呑んで歌つてゐる。音樂の音の陽氣なるに連れては、踊つてゐるものもある。此の聲音、此の喧噪が、清國人民に向つて、如何の感想を與へるであらうか、傍で見ても、實に氣毒の感に堪へないのであるが、彼等一般の人民は寧ろ無感覺であるらしいのである。物を賣り、勞力を賣つて、そして多少の利益さへ得れば、それで彼等は満足するのではあるまいか。彼の苦力を見よ、彼の市人を見よ、彼の巡捕を見よ、清國の元氣を見るべき顔は何處に隠れてゐるであらうか。

明けて八月六日の朝、白河の濁水を砂漉しにしたといふ水で顔を洗ひ、口を嗽いで朝飯もソコソコに喰つて了つて、停車場に行つて見ると、唯だ切符を賣り出す小さい事務室と、廣いプラットフォームがあるばかりで、待合室も何もない。上の汽車が一日三回、一番と二番が北京に達するので、三番は天津まである。二等の切符を買つて、七時發の一番汽車に乗つた。客車は二等といつても、正に日本の三等の資格しかない。無論廣軌のレールであるので、車内が少し廣い。

寧ろ無感覺

停車場

客車

直隸の平原

といふばかりである。三等客車はと見ると、之は支那人專有のもので、屋根も何にもない。乗客はみな青い天井を仰いで、荷物と同居してゐるのである。

汽車は出發した。始めて見る直隸の平原を、珍らしと汽車の窓から眺めて見ると、茫として極まる所を知らず、氣宇おのづから濶大なるかの思ひがする。白河の流の通ずる處であらう、楊樹の處々點在する間から、橋が二つ、三つ、四つ眺められる。塘沽附近は鹽田が多いが、少し進んで行くと、多くは高粱島で、ところどころ粟、胡麻、落花生、大豆などの畠も見られる。行く道々の停車場は、みな極めて粗末なもので、上下の旅客もまた極めて少ない。

段々進んで行くと、前面鐵道の左方に當つて、洋風の煉瓦の建築の、幾を列ねてゐるのが眺められ、今正さに建築中なものも數多眼に入つてくる。即ち天津なる各國居留地である。列車はやがて天津停車場に着いた。北清第一の貿易市場でもあり、現今の總督府でもあるといふので、流石に昇降の客も多い。大きくはないが、事務室と休憩室とを有する建物もある。レールを横ぎるブリッジが天井はなけれど、虹の如く空に聳えてゐる。

天津停車場



群れ来る賣子

天津以北の停車場は、みな例の粗末な小停車場で、見るべきものは一つもない。沿路の村落、田野も、また別に變つたこともない。唯だ、一つ初旅のわれぐの耳目に珍らしと聞かれ、見られたのは、列車の停車場に着する毎に、物賣る男の兒等のうるさく群れ集めて觸れあるくのであつた。それは日本の各停車場に於ける賣子のやうにプラットフォームを往來して賣り歩くのではなくて、其反對の側なるレールの上を往來して物を賣るのである。多分昇降の旅客の妨害になるからであらう。上り下りの列車があまり頻繁でないので、左程危険なこともないのであらうが、高い列車の中と低いレールの上と、品物や金錢を授受するに就ては不便至極である。夏なればか、賣物は林檎、梨子、葡萄などの菓物最も多く、加之麵包其他の支那菓子、卵の湯でたの、ビール其他の酒類もあつた。代價は不定で、直切れば負ける。一瞬を争ふ汽車に對しての賣買に、さりとては吞氣至極の話と思へど、彼等が客を争ふて賣付けずんば止まざるの商賣氣質は、實に熱心なるものであるといはねばならぬ。それから又、十錢銀貨や二十錢銀貨を持つて來て、一圓銀貨みな清國通用の銀貨で、一圓は日本の八十錢内外の相場である、と

銀貨交換

交換を乞ふものがある。一つは小錢なき旅客の爲め、一つは差金を自から利せん爲めであるが、うつかりすると劣惡の小銀貨を摺かませられることがあるといふことである。一圓銀貨は通常十錢銀貨十一枚と交換されるのであるが、之も知つてをらぬと直ちに誤魔化される。

一帶の連山

汽車の進むに従つて、東北より北西の方に當つて、前面遙かに一帶の連山が見えて來る。山海關より八達嶺かけて、遠く口外に連亘する群山であらう。列車の左方に最も近く眺めらるるのは西山である。午後二時前門車站北京停車場に着いた。正陽門の直ぐ左傍である。京漢鐵道の起點たる北京停車場は、同じく正陽門の右傍である。

前門車站

### 雜觀雜聞

#### ◎北京城

旅行者が初めて北京に入つて、先づ驚き仰ぐのはその城壁であらう。其の周

北清見聞録



外城

圍凡そ六里の見上ぐるばかりに高うして且つ厚き城壁はみな灰色の煉瓦を以て築き上げられてある。其の形は殆んど正方形で、南に三門、北に二門、東西にまた各々二門が設けられてある。南面の中央なるが正門で、正陽門と稱へられてある。正陽門外を外城と呼んで、其の周圍に更に城壁が築かれ、東西南の三面に各々一門を設けられてある。そこで外城を合せて見ると、北京城の周圍は十里以上に達してゐる。最初此の外城の設計せらるるや、内城の凡ての周りに築かるゝ筈であつたが、其のあまりに廣大にして巨大の費用と時日を要するので、唯だその南面一方を築いて、其の工事を中止したとのことである。但し、北京城の城壁は明初の築造に係るもので、今の清朝はその儘に之を假用してゐるのである。北京は一に燕京又は順天府と稱へて、北宗以來遼金元明歴朝の首都であつたが、其の地位には多少の差違があつて、明朝以來が、即ち今の北京城である。

歴朝の首都

◎紫禁城

紫禁城即ち皇居は、内城の中央に、更に廣大の地域を占め、朱壁に金色の瓦したる塀に圍まれた長方形の一廓が即ちそれ。東西南北の四門があつて、東西北の

景山

三門は通常人の往來に任かせ、中には四民雜居の市店もあれば邸宅もある。更に進んで行くと、其の中央にまた南北に横斷したる一區畫がある。それが即ち禁裏で、北清戰役の當時は、殆んど外國兵の土足に蹂躪されたのであつたが、皇帝還御の後には、固より通常人の入門は禁せられてある。試みに、正陽門上の城壁に上つて、宮城を眺めて見ると、門内數百歩の彼方は正さに、皇居の正門なる大清門、門内遙かに見渡せば、幾多の樓門、幾多の殿堂、長く南北に連つて、黃琉璃の屋瓦、天日の光と相映じて輝光燦然、其下に石炭を埋藏すと稱せらるゝ景山は、其の背面に聳えて、綠樹林を爲し、樓閣亭榭處々に散點して、皇帝の行幸を待つかの如く、流石は四百餘州の帝城、いかにも壯麗な大建築である。

◎市街

北京に於ける商賣の中心點は外城の中にある。で、大柵欄を中心として、正陽門外の大街を東西に横ぎれる市街は、正さにわが東京に於ける銀座通で、近來は此處に、北京の市店には珍らしき、二階建の勸商場さへ設けられたのである。されば此附近一帶の市街は、一般に殷賑にして、人の往來も絶えず雜踏を極めてゐる。

北清見聞録



る。彼の相公(男)嬖(嬖)子歌妓などを蓄へてゐる韓家兒胡同驛馬市は、即ち此の繁華の市街に圍まれた裏小路で、なほ銀座に近く新橋あるが如きものであらう。内城に於ては崇文門内の大街、單牌樓四牌樓の附近、及び紫禁城の北、得勝門内の大街之に次では宣武門内の大街などが、先づ繁榮の市街である。

◎交通機關

いふまでもなく北京の市街は尙ほ舊時代のものに屬する。汽車だけは南より、西より、その門前に達して、毎朝毎夕北京人の耳の根に汽笛を鳴らしてゐるけれど、北京人はまだ各種文明の利器を利用することが出来ない。電燈もなければ、電話もない。蒸氣電氣の力を應用する製造所もまだ見ることが出来ない。されば市街交通の機關として用ゐられたるものも、人力車、馬車、馬、驢、馬、驢、馬等に過ぎない。一張を四人乃至八人にて昇り、轎子までもまだ用ゐてゐる。伸は、一張に大概二人附いてゐて、一人は棍棒を取つて引く、一人は後を推すのである。さて伸を走らして、沙塵雲の如く沸いてゐる街に入ると、街路至る所不完全極まるものである。その動搖が甚だしい。その破壊せられて凸凹の甚だしい處

になると、お客様自身、が注意して、重心を失はないやうにして居らぬと、忽ち伸から揺り出され、若くは伸と共に轉墜して、大變な目に遭はれるのである。北京在留の日本人に聞いて見ると、一二度づつ、轉落の厄運に遭遇しないものは、殆んどないといふ話である。余自身また曾て、最も甚しい厄運に陥つて左腕の關節を擦り曲げ、爲めに一ヶ月餘不便不自由を忍んだことがある。車夫は皆支那人、體格偉大にして強壯なる壯夫もあるが、中には可憫相なる十五六歳の少年もある。一體に例の不潔な服装をして、顔も手も汚れ腐つてゐる。暑い日などは、襪子を穿いたのみ、腰より上は赤裸で、伸を引いて走つてゐるものもある。もし愚圖々々して急がない車夫があると、一鞭を加へる、急駛すること馬の如しである。

馬車は極めて頑固に出来たものである。その兩輪の厚きこと、その轆の大きなこと、能く支那の特性をあらはしてゐる。そして其の天井は半圓形をなして彎曲し、後面は全く塞がり、左右兩側に、紗もしくは玻璃を以て、尺四方位の小窓が設けられ、唯だ僅かに前一方が開いて、其處より車内に入るやうになつてゐる。



車上には二人乃至三人までは乗られるが、車内が丸で穴のやうに狭苦しいので、三人となると、一人はその穴の外なる右傍に腰かけて、横に足を揺下げておねばならぬ。馬車屋はその左傍に腰掛けて馬を御してゐるが、道路の險悪なる處に出會すと、下りて馬を導くのである。形式に拘泥することを好む支那人は、歩行を以て下等社會のごとくして之を卑み、中以上の社會には盛んに此の馬車を用ゐてゐる。

轎子は貴顯の乗物で、官帽を冠つた底下人之を昇き、その様恰かも日本の祭禮に見る御輿である。そして之には必ず騎馬の前驅後驅がお伴をしてゐる。馬車にても高位高官のものになると、必ず此前驅後驅があまた附隨してゐる。轎子はまた、新婚の花嫁の乗物にも用ゐ、及第進士の祝ひの行列の時に、進士が此れに乗つてゐるのも見受けける。轎子には左右兩側及び前面に小窓の開いてゐるものもあるが、四面全く閉塞せられて、中を見ることが出来ないやうになつてゐるものもある。新婦の乗つてゐるのは、其の四方の全く塞がつてゐるのである。驢馬乗は實に雅致を兼有する一種の滑稽畫である。鞍に跨ると、殆んど足の

轎子

騎馬

地に著かんとする程低いが、随分元氣もので、追へば駈ける、鞭打てば走る、走ると首に纏着けてある鈴がちやらくと鳴る、驢馬丁は後から追ふて走つて来る、遠きに走らしても中々に勞れたらしい様子も見えない。北京街上に於ては驢馬乗もまた一奇觀である。

凡て以上乗物の段等高下をいふて見るならば、北京人は轎子を以て第一とし、次は馬車次は人力車、馬、驢馬としてゐるのである。但し驢馬は馬と驢との間に産したる間の兒で、その大なること殆んど馬を凌ぎ、力もまた強きを以て、北京に於ては馬よりも多く之を用ゐ、特に馬車用のものは、大抵此の驢馬である。

◎運搬機關

北京及びその附近に於ける運搬機關は、鐵路に依るもの尙ほ僅少で、今日一般に用ゐられたるものは、駱駝、馬、驢馬、驢馬、荷馬車、獨輪車等である。駱駝、馬、驢馬、驢馬及び荷馬車は、石炭、木炭、穀類、菓物、其の他諸般の貨物を、各地より北京の市場に運搬し來るもので、獨輪車は多く北京の市内に用ゐられてゐるのを見る。

乗物の段等  
驢馬



荷馬車

獨輪車

水屋  
採糞夫

二三

荷馬車の構造は日本の大同小異であるが、そのより大なると、道路の不完全なるが故であらう、一頭の馬又は騾馬を轅に付け、二頭乃至三頭の馬騾馬もしくは驢馬をその前方に付けて之を牽かしむるのである。

獨輪車は一種特別の構造で、之は引くのではなく、推すのである。中央に車が一輪、それが車上に突起してゐるので、荷物はその左右に置かれ、車夫は二本の長柄を左右の手に握り、長柄に結び着けられた紐を肩に掛けて、重心を失はないやうに桿を取つて、巧みに推して行くのである。休むときには、二本の長柄に足が附いてゐるので、車輪と共に三本足となつて、優に車體を支持することが出来るやうになつてゐる。最も多く之を用ゐるのは水屋で、大きな楕圓形の水桶を二個並べ載せて、得意の家々を賣り廻つてゐる。次は採糞夫に之を用ゐるものが多い。馬や駱駝の糞を運んで行くのは、まだしもであるが、人糞を一種の籠に盛つて蓋もせず、紛々たる臭氣を前に控へながら推して行く様體は實に見られたものでない。其の他種々の運搬に利用されてゐるのであるが、北京の如く、道路の傾斜甚しい處に於ては、此の獨輪車が横さまに轉倒するの憂がなく、却て便利で

あるかも知れない。

### ◎道路

前にも一寸云つた通り、北京の道路は極めて不完全なものである。凡そ支那内地の旅行者がみな、道路の不備不完なことをいつて不平を鳴らしてゐるが、北京の街路はその標本とも稱すべきものであらう。正陽門外の大街には、花岡石の板石を敷詰めてあるけれど、それも壞れた儘で處々に缺陷があり、其他の大街にては、車道人道を分けた思ひ切つて、廣い街路があるけれど、一般に粉見たやうな泥土であるので、破れた壁に泥を塗るやうな時折の修繕も、忽ちにして馬車や俥に壞されて、何の用をも爲さない。されば、天もし雨ふつて一日に及べば、街上忽然として泥濘の海を現出し、兎ても歩行されたものでない。もし夫れ、夏天霖雨の節、天霽れざること旬日に至れば、泥濘の海深うして、車馬も水先案内を要する。然らざれば、忽ち其の深處に陥つて、人馬共に泥の中に溺れるのである。

黃塵萬丈

泥濘の海

雨止み、空晴れて、街路が乾いて來ると、今度はまた名物の塵埃。東京の埃も名高いものであるが、北京のに比べると、兎ても話にならない。黃塵萬丈といふの

北清見聞録

二三



白日燈火を  
點す

は、唯だ支那流の形容詞とのみ思つておたのであつたが、此處に来て見ると、全くの實景でもつと甚しいかと思はれる位である。で、街の上に立つて見渡して見ると、恰かも濃い霧が掛けてゐるかのやうである。それが一層甚だしく、蒙古來の天風胡沙を捲いて來ることあれば、天地晦冥日の光を仰ぐことが出來なかつて、白日なほ燈火を點することもある。かういつて見ると、兎ても人間の住むに堪へないやうな心地もするであらうが、それでも住めば都で、北京百萬の人民は、平氣で此の塵埃の中に住んでゐるのである。

別世界

交民巷に入ると、全で別世界に入つたやうな心地がする。それは第一道路が清潔であるからである。此の清潔の道路を蹂躪させまじと、その四方の入口には、各國兵や、各國に雇はれた支那巡捕が立番をしてゐて、不潔な人民の亂入を防止してゐる。けれど、名物の塵埃ばかりは、如何にも防止の方法がないものと見えて、此の巷にもなほ亂入して來るのである。

### ◎ 下等社會

不潔な下等社會の生活を鳥渡述べて見やう。正確な戸籍のない支那の事

豚以下

あるから、確かなことは兎ても分らないが、苦力や、車夫や、馬夫や、其他百般の勞役に従事してゐる下等社會は、殆んど北京人口の半數以上を占めてゐるかと思はれる程多數である。そして、其の不潔なことは、彼等が好んで食する所の豚と同等もしくは以下であらう。正陽門前に廣い石橋がある。東京は神田の萬世橋よりもなほ交通の頻繁な處であるが、其橋の上に數多の表賣屋があつて、大聲喧しく客を呼んでゐる。塵埃雲の如き中に在つても、焼くもの、煮るもの、蓋も何んにも爲ないで平氣である。それを美そうに食つてゐるお客様は、大抵下等社會であるが、之もまた平氣である。昔に正陽門前のみでなく、至る處みな斯くの通である。彼等の中には、我家を有たないものも數多あるさうで、夜は到る處に寢食事は食いたい時、到る處に食つてゐるのである。よし家を有するものにして、毎日毎度わが家で料理をして食つてゐるものは極めて少ない。で、食物を手籠に入れ、又は例の獨輪車に載せて、觸聲高く町々を賣つて行くものが極めて多いのである。その代りに青物屋の賣り歩くのは割合に少ない。

### ◎ 中以上の社會

北清見聞録



奢侈な生活

下等社會が彼の如く獸類と同様の生活をしてゐるにも係らず中以上の社會は極めて奢侈な生活をしてゐる。居るに大厦あり、妻妾あり、食ふに美味あり、衣るに美衣あり、出るに轎子あり、馬車あり、從者あり、花街に遊び、宴飲を事とし、蒐ても日本の中上等社會などの企て及ぶ所でない。彼等は大概文武の官吏若くはその子孫であるが、以て官吏の收入の大なることが想像せられる。固よりその俸給は少額のものであるが、賄賂その他の雜入が非常なものであるといふことである。されば清國學生が官吏たらんことを欲して終生役々たるも、また無理ならぬ次第である。上に斯の如き殿様のの中上等社會あり、下に彼が如き獸的下等社會あり、今日支那に於て健全なる中等社會の缺乏は、即ち支那の不健全なる所以ではあるまいか。今の處支那に於て健全なる中等社會を求めば、先づ指を商人に屈するであらうが、彼等は唯だ拜金の徒、利の中心點より割り出した利己的道德を守るに過ぎざれば、國家の富を作るに於てこそ益はあれ、國家の元氣を振作するに於ては寧ろ損となるのみである。

### ◎三年間十五萬兩の利益

健全なる中等社會の缺乏

商人

一種の受負事業

駐日清國公使が公使館一切の費用として——無論公使自身の年俸も其中に含めて——北京政府より領收する所の金額は二十萬兩であるが、之に依つて毎年公使が利する所は、凡そ七萬兩以上に上るといふことである。で、三年間の任期をどうか斯うか勤め了ると都合二十一萬兩以上の利益となるので、五萬もしくは六萬の賄賂を遣つて、公使の任命を得たとするも、差引十五萬兩少くもその懐に入るといふ譯だ。かういふ譯合であるからして、商人の財産家などが、官人の爲めに資本主となつて、買官の金を出して呉れるものもあるさうな。總體駐日公使のみでなく、支那の官吏は一種の受負事業で、而かも格外に利得の多い事業であるさうな。かの知縣郡長位の地位の如きにしても、年に一萬以上の収益はあるさうである。一たい外國公使の中では、合衆國が一番利得の多い地位であるさうだが、それは保護を名として移民より人頭税の如きものを徴收するので、それが大したものであるさうな。

### ◎北京の婦人

北京は、滿洲人、漢人、蒙古人、西藏人、回族及び外國人の混住であるが、其内最も多



不生産的動物

數で最も勢力を有してゐるものは、云ふまでもなく漢人及び滿洲人である。婦人にも滿種と漢種との差別はあるが、一般にいふて見ると、不生産的動物の甚しいものである。終日家内に蟄居して、第一の務がお化粧で、子供の守、裁縫、刺繍などが第二の仕事である。煙草を吸ひ、鴉片を喫み、博奕を事として、第二の務も他人任せにしてゐるのも多いことである。わが某氏北京に女學校を創設せんとして、先づ北京の有志者を歴訪して其の規則を示した。すると、彼等有志者は、學校の授業は午後開始するが善いといつた。何故かと聞くと、北京人は一體に朝寢の癖がある上に、婦人は特にそのお化粧の爲めに殆んど午前を費すからと云つた。されば、今日支那四百州の帝都北京に於て、なほ一個の女學校の設立を見ないといふのも、また決して理由なき話ではない。尤も婦人宣教師などが五人乃至十人ぐらゐの女生徒を集めて、教育をしてゐるのも一二ないではないが、それは未だ學校といふべき程のものでない。學問教育に熱心な家庭にては、自から教育するか、或は家庭教師を聘して其の女兒を教育してゐるものもあるが、之は極めて寥々たるものである。

一個の女學校なし

戸外の勞役  
持は男兒の受

下等社會の婦人にして、からが、その戸外の仕事は洗濯位で、戸外百般の勞役は、凡て男兒の受持となつてゐる。時としては紙屑拾ひの婦人、物賣ある婦人を見ることがあるが、其れは極めて稀である。戸内の仕事にしても、日本ならば婦人のすべきを男兒のしてゐるものが幾種もある。其の一例を舉げて見ると、料理店又は旅店の給事は一切男兒に限られてゐる。人の家を訪ふて見ても、取次をしたり、お茶を侷めたりするものは、みな男兒の下人である。女中や乳母がある家にしても、彼等はみな奥様のお側に附いてゐて、奥様の御用を勤めてゐるのである。彼の所謂嫖子なるものにして、その宴席に侍べるや、杯盤の間に周旋するといふことはなく、其の花のやうな顔面と服装とを見せて、歌の一つ二つも歌へば、それでお務めは済むのである。試みに彼の奥様や嬢様達のお化粧を御覽なさい。地を白粉の鍍塗にして、臉より双頬のあたりを桃色に紅さし、白と紅との相交はる所、白雲と紅雲と相接して、搖曳するが如く、如何にも巧みにほかしてゐる。彼等は居常此の通りであるから、その夫さへも、或は妻の素顔の白いか、黒いかを知らぬかも知れぬ。頭髮は

給事は男兒

お化粧

頭髮



花のやうな  
衣裳  
耳飾

花簪

指環、腕環

金属製の爪

種々の結様があるが、中には極めて念の入つた洒落た結び方もある。處女は多くはお下げであるが、漢人の少女の中には、束髪様に結ぶてゐるものもある。中には、満洲婦人の特色を有して奇抜である。日本でいふならば、丸髷的のものであるが、長方形の幅が狭くして横に甚だ長い。これに花簪の巨大にして派手やかなのをいくつも挿して、耳飾をゆらくと垂らし。それに赤き、紫青、緑、黄、様々の色をこき交せて、金糸で刺繍をした花のやうな衣裳を着てゐる處は、初見のものに、日本芝居のお姫様が化けて北京に現はれたのではないかと思はしむるのである。耳飾は老幼を論せず、漢滿を分たず、貧富を問はず一般に飾つてゐる。唯だその貧富に應じて、貴金属なると否らざると寶石なると擬物なると、高價なると安物なるとの差があるばかりである。花簪は日本と全く反對で、處女以下幼少のものは、之を用ゐること寧ろ少ない方で、新婦以上白髪の老女に至るまで、みな大事のお飾りとしてゐる。婆様の白髪頭に花髪挿之も、北京の見物である。それから指環、腕環之も婦人の裝飾品として大事なものである。時としては金属製へた長い爪を、琴爪のやうに指に穿めてゐるのを見ることがある。之も

纏足

婦人の裝飾品の一つ。

纏足は實に支那婦人の奇習で、われ／＼外人から見ると、實に氣毒な感じがするのであるが、支那人から見ると、彼の小さき足もて、蓮歩蹣跚として歩むに堪へぬかの姿態が如何にも優美に眺められるさうである。但し、満洲婦人は此の奇習を學ばぬので、舉止活潑また能く外出して街上来往し、訪問の男子客にも面會して能く會談するものもある。

◎早婚

支那人は一般に早婚である。二十歳内外の書生で、夫たり父たらぬものは寧ろ少ない方である。男子二十歳にして妻を迎ふることの出来ないものは、貧乏人としてその社會に對する體面があまり善くない方である。男子十五六歳、女子十三四歳にして結婚の式を擧げるのも、さ程珍らしくないといふやうな習慣であるから、わが輩日本人などが、齡の三十も過ぎて、まだ無妻であるといふことを話して聞かせると、彼等は不思議に思つてゐる。何程その理由を説明して聞かしても、彼等にはその解釋が出来かぬのである。その面上に現はれてゐる



怪訝の色を讀んで見ると、日本人は貧乏であらう、と心には思つてゐるらしい。

◎蓄妾

支那人の富有なるものにして、妾を蓄へてゐないものは殆んどない。少きは二名より五六乃至十有餘名の多きを有つてゐるものもある。而かも成るべく、その多きを得意として誇つてゐるのである。わが輩の友人嘗て英語を教授しつゝあつた時、その學生の一人に向ひ、會話の序々に試みに、"How many wives have you?"と尋ねて見たら、"I have three wives," 寧ろ得意氣に答ふるのであつた。而かもその學生たるや、齡三十に達するまでには、尙ほ三四年を有する學生であつたといふことである。此の奇妙なる感念を憐むべきか。わが輩は寧ろ、その三人の妻を有しながら、なほ日本語や英語を勉強する勇氣を賞めて置かう。

なほ奇とすべきは、兄弟互に其の妾を贈與することである。又兄死すれば、その弟たるもの當然兄の妾を占有することを得、弟死すれば、兄は當然弟の妾を取得するといふことである。故の北京大學堂總教習某氏の妾は、その兄氏の遺愛の女であつたといふことは、その一例である。

妾を贈與す

妻妾相愛す

聞く所に據ると、妻妾等は、閨門内に室を並べて同棲し、その交互の交りは極めて親密であるといふことである。日本に於て、妻妾相反目して一家破滅の基となり、紳士紳商などが、密かに妾宅を構へて、妻君の胸に嫉妬の焰をもやさしむるに比すると、大に優る處があるといはねばならぬ。

◎支那人の體格

支那人の體格は、一般に長大で、我々日本人が仰ぐやうなのが、澤山ある。之を相撲に養成したならば、大砲や常陸山は、計るほど澤山出来るであらうと思はれるのである。之を能く訓練せば、見事な軍隊が出来るであらうと思はれるのである。畢竟するに、その家内の生活法が西洋的で、多く肉食をするからであらうと思はれる。之に依つて考ふるも、日本の生活法は、衣食住ともに早晚改革せねばならぬこと、思はれる。

◎家内の生活

日本人も家内の生活を好む人民であるが、支那人は更にその甚しいものである。之も畢竟四圍の自然が彼が如く殺風景にして、彼等をしておのづと家内に



贅居せしむるに至つたのであらう。されば家内に於て、彼等が肉慾情慾を満足せしむるの具は殆んど完全に具備してゐる。支那料理の世界に比ひなきまで發達してゐるのも之が爲めである。支那人の他に比してより多く内を樂むのも之が爲めである。賭博を樂むのも之が爲めである。阿片煙を嗜むのも之が爲めである。とわが輩は考ふるのである。

鴉片の流行は随分盛んで、支那人の客間には必ず鴉片吸煙臺が設けられてゐる。料理店に行つて見ると、一室毎に必ずまた鴉片吸煙臺があつて、吸煙器が之に添へてゐる。

圍碁將棋も行るが、之は彼等が大に好む處ではない。蓋し脳髓を勞することが多いからであらう。それ故彼等の中には上手は余程少ないものらしい。初段に星目を置くといふやうな余のへボ碁も、彼等の中には威張つてよい程である。碁の打方は少しも異なる處はないが、終局の計算方が全く異つてゐる。日本の碁のやうに双方の地面を計算せずして、白か黒か唯だ一方を計ふるのみであるが、詰まる處は同一である。將棋は其の駒からが異つてゐるが、駒の行く道

も餘程かはつてゐる。そして日本の將棋の方が餘程進歩してゐるかと思はれる。

四季その折々の花は咲けども、之を野外に賞するでもなく、之を庭前に眺むるでもなく、鉢に植ゑて室内に愛づるのである。されば秋は菊、北京の冬の極寒にも、室咲の梅、椿、牡丹、芍薬、海棠などの花が、その室内を飾つてゐるのである。

◎交際術

支那人の交際術に長たることは實に驚くべき程である。支那流の虚禮虚儀は七面倒で、あまり感心もしないが、一旦相會して見ると、その應對の様から、一舉一動の微に至るまで、客を反らさず款待する所、如何にも巧妙で、そして快辯、そして世辭愛嬌を振撒くところ、我々木強の日本人は殆んどその掌中に翻弄せられてゐるかの心地がする時もある。交際術は支那人の天性と見えて、日本人ならばまだ腕白盛りの十二三歳の少年にしても、茶を侷め、菓子を侷めなどして客を款待す様實に大人も及ばぬ程である。

◎迷信 その一



清曆十二月二十三日の夜、殆んど夜を徹して、爆竹の響が丁度小銃を亂發するやうに、北京の市街至る處に聞えて、義和團の匪徒がまた北京城内に押寄せて來たのではないかと疑はれる程であつた。で、支那人に聞いて見ると、之は拳匪の騒動でもなんでもない、竈の神様が今夜天に歸らるので、それを御送り申す爲めの爆竹の聲だ、といふことであつた。そして其夜は各家此の竈の神様に飴を供へる。之は何を意味するかと聞くと、神様が天に昇られた時に、各家各人の惡事を天に告ぐることの出來ないやうに、飴を澤山喰はして、其の口をねばらすのだ、といふことであつた。かなじ月の大晦日には、神様がまた地上に歸つておいでになると云ふので、其の夜はまた盛んに爆竹を鳴らして、之を歡迎するのであつた。

◎迷 信 その二

ことし三月二十九日は日蝕であつたが、支那人はまた日蝕に對して、奇妙な迷信を有つてゐる。凡そ日の蝕せらるゝことあるや、朝廷に於ては天子親から有司百官を率ゐて天を拜したまひ、各署には僧道を集め、鉦鑼を鳴して太陽の蝕せ

らるゝを救護せしめ、なほ民間に於ても、各戸に鐘を鳴らすの例なるが、二十九日の日蝕には、處々に此の儀式が執行せられ、地方に於ても知府、知州、知縣などは、豫め各僧道に其の旨を訓令して、其の儀を行はしめたといふことである。蓋し、日蝕は天の怒に依つて、太陽が暫し其の影を隠すのだと、子供のやうな考を、今もなほ抱いてゐるのである。苟も府縣知事といはれる人達が、令を發し、僧道をして太陽の蝕せらるゝを救護せしむるといふ、一つは從來の慣習止むなきに依るべしと雖も、滑稽も此處に至つて其の極に達してゐる。早天連旬雨降らざることあれば、天子自から天壇に幸して、雨を天に祈りたまふことも、また數々である。

◎迷 信 その三

曾て知州候補某氏を訪ふたことがある。某氏は、その珍として大事に所藏してゐる鹿の角を持出して余に示した。それは唯だ一つの枝があつて、角の全面黄色の短い毛を以て蔽はれてゐた。但し晴明時節以前に探つた鹿の角は、黄毛を以て蔽はれてゐて、之を鹿茸と稱へ、その以後に探つたものは、枝がいくつもあるつて、黄毛はなく、之を鹿角といつてあるさうな。そして此の鹿角の方はあまり



珍重しないが鹿茸の方は支那人が非常に大事にして所蔵するところ、其の價も非常に貴く、某氏の話に依ると、一個の價百兩以上、二百兩に及ぶものもあるといふことだ。そんなに高いものを買つて何にするかと聞く、その鹿茸を頭に戴くと、大に氣力を増し、勇氣を生ずるといつてゐる。鱈の頭も信心からといふこともあるから、多少その効力が無いでもあるまいが、大枚百や二百の金を投じてこんなつまらないものを有難がつてゐるとは、誠に以て氣毒な話である。北京の街には、この鹿茸を賣つてゐる店舗もあるのである。

◎迷信その四

李爺歿して後、北京に於て飛ぶ鳥も落つる程の勢力を有つてゐたものは、故榮祿その人であらう。かくも權勢と榮爵と富とを一身に集めて、願ふ事何ひとつ叶はぬことのないといふ身も、病には勝ち難きものと見え、去冬以來數度の臥病に打腦みて、遂に再び起つこと能はざる事となつたのであつたが、其の臥病中のことを聞くに、矢張支那傳來の醫術と醫藥とに信頼し、甚しきは加治祈禱のやうなことまでも、その大切の身命を繋ぎ留めんと、頼みの綱であつたといふこと

である。口悪ろき北京童は、榮相の病は、花柳社會に流行するそれと同じものだといつてゐたのであつたが、それは或は虚言であらう。丁度わが侯爵と同じやうに、高名尊爵は、兎角に人の妬心を惹起し、易いものであるから。

◎迷信その五

之も一種の迷信といはねばならぬ。駐英清國公使羅豐祿は、清人としては先づ物の道理の分つた側の人だといふ評判のある人である。その羅君が曾て胃病の爲めに腦まされて、倫敦知名の醫師の診察を乞ひ、種々の薬も吞んで見たが、とうしても癒らない。で、何うかして自國の漢法醫師に診て貰ひたいと思つたが、生憎自國の公使館にもゐない。日本の公使館に尋ねたならば、或はゐるかも知れぬといふので、使を日本公使館に遣して、時の代理公使某氏に其の旨を問ひ合したが、その本國日本に於てさへも、今や漢法醫師を求むることは中々容易でないといふ程であるから、某氏は殆んど答ふる所を知らぬばかりに驚いて了つた。中華國人士の自國を信することの厚き實に斯の如きものである。われわれ日本人が兎てもその信仰を了解することは能はざるものである。こは彼の



代理公使某氏が今は北京に轉動して、余に語り聞かせた珍談である。

◎迷信 その六

姜桂題といふと、我國ならば先づ師團長位の資格で、曾て日清戦役の時には、一軍の將として旅順口に在り、土城子に於てわが斥候隊を盡殺し、無殘至極の振舞を爲したるを以て有名なる將軍なるが、今や北京に於ては外國人との交際廣く、身長六尺有、何寸體量三十貫もあらうといふ大男、一見常陸山を思ひ起すやうな體格である。然るに本年三月の頃齒痛の爲めに惱まされ、流石の老將軍も苦悶に堪へ兼ね、某國軍醫を招いて其の治療を乞ふことにした。軍醫一診して將軍に向ひ、之は何でも御座りませぬ、此の齒齧の腫れた處を切開してその膿を取り去るならば、その痛みも直ぐに癒えるで御座ります。といつて、直ちに小刀を取つて、手術に取掛らうとした處が、將軍は之を押し止めて、軍醫殿しばし待たれよ、すこし思ふ處がありませれば、手術はどうか見合せて下され。それは又何故で御座りますかと軍醫が尋ねると、返事は祖宗の教訓に負くといふのであつた。軍醫は笑つて、將軍もし戰陣に立ちたまはゞ、敵彈に身を貫きても敢て悔いさる

齒痛

孝の始の教訓

處で御座りませぬ、然るをすにも足らぬ腫物を破るとして、何の不可が御座りませぬ。と一本切込んで見たけれど、將軍は毫も軍醫のいふ處を聞かず、身體髪膚之を父母に受け、敢て毀傷せざるて、孝の始の教訓を固く守り、戰場にては兎もあれ、角もあれ、平時に於ては、宗祖の教を破る譯には参りませぬ、といつて、遂に軍醫の治療を受けず、苦痛を忍びながら、あやしげな藥の力に任かせて、その儘にしてゐたとの話である。

◎將軍文字なし

余が友人某々子等、通州に將軍馬玉昆を訪問しての歸途、同じ列車の中に將軍姜桂題が乗り合はしてゐたので、刺を通じて會談を試みた。將軍は例の愛嬌を振撒いて、快活に四方八方の話をしたのは好かつたが、最初某々子等の名刺を受け取つて、之を倒さに眺めてゐたのは頗る滑稽で、やうく笑を忍んでゐたとは、友の歸つて後の話であつた。苟も師團長ともいはれる人が文字に疎遠だといつたならば、諸君或は奇異の感を爲すかも知れないが、支那從來の武官中には、こんな人が敢て珍らしいといふ譯でない。十人力の弓を引張つたり、百斤の偃月

名刺を倒すに見る



刀を振舞はしたり、二百斤乃至三百斤の石を擧げたり、乗馬や騎射の技を試みたりして、そして、文字といへば僅かに武經の一冊、而かも之にはあまり重きを置かぬ試験に及第して、そして武官となつた連中であるからして、文字に親まぬもの多いのも尤もな話である。聞く所に依ると、日清戦争以來有名の馬將軍も讀書は寧ろその不得意とする處であるさうな。

◎陸路日本に行く事が出来るか

曾て支那人某氏の寓を尋ねて、會談時餘に及んだ。某氏は戸部の官吏で、その兄は陸軍士官、その父は曾て清佛戦争の當時、一軍の統領であつたので、その部下を率ゐて交趾に在り、佛軍と鋒を交へて、大に之を破つたことがあるといつて、父の名譽をその兒等が、今なほ自慢話にしてゐるのである。さて會談の中頃某氏は余に向つて一個の奇問を發した。貴國に行くには陸路を取るのであらうか、貴國と弊邦とは境を接してゐるのであらうか。あまりに人の意表に出たので、最初は余に職るゝのではあるまいかと思つたが、氏は眞面目に問ふてゐるのであつた。但し氏は當時わが大阪に於て開會中の博覽會見物を兼ねて、日本に遊

ばうといふ希望を持つてゐるのであつた。一寸略圖を畫いて、此の通り日本は海を隔てゝ東方に雄視せる帝國である、そこでもし君が日本に行かうと思はれるならば、かやうくゝに爲られよ、すると四五日乃至七八日にして、大阪でも東京でも、君の意の向ふ處に行くことが出来る。と委細に話して聞かせた處が、某氏は解せぬかの如く、不思議な顔をして聞いてをった。わが國では小學校の生徒でさへも知つてゐることが、彼等には時々難問であるのがある。無用の學問に腦筋を絞る盡して、有用の學問に心を傾くるものゝ、今になほ少きは、此の一事を以てしても知ることが出来る。

◎北京の教育

昨冬始めて京師大學堂が創設せられて、先づ仕學館と師範科とを置き、嚴谷博士、服部博士、其の他二三の學士等が日本より招聘せられて、主として之が教育の任に當つてはゐれど、上は帝都より、下地方に至るまで、小學中學の設立せられたるもの尙ほ極めて少なく、適々新式の小中學校の設立せられたるものもあるも、それは極めて近來のことにして、其の設備といひ其教育といひ不完全たることを免



れ能はざる次第であれば、大學入學の學生としても、其の豫備教育の不完全なる、推して想像せらるゝのである。されば大學の教育としても、その困難であり、不完全であることが、略ぼ想像し得らるゝであらう。

北京に於ける新式の小學堂、中學堂の如きも、また此の一兩年の間に於て漸く創設せられたものであつて、其數さへも未だ五指を屈するに足らず、官立の中學は唯だ僅かに一個の八旗中學堂があるばかりである。八旗中學堂には二名の日本人が雇聘せられて、主として子弟蒸育の任に當つてゐるのである。なほ別に私立の中學小學が、二三設立されてゐるが、一つも見るに足るべきものはない。外人の支那人教育の爲めに設立したるものも三四見るのであるが、米人の滙文書院、佛人の法文學堂などは、其の設立年月の久しき丈に、其の設備も比較的を整ふてゐる。けれど、其の教育の目的が、信者を作り、傳道師を養成するに在るを以て、其の教育上の効果は、いまだ著しからず、却て無資勉學の便を目的とする學生を誘致して、偽善者を製造する機關となるの憂がないでもない。日本人の設立に係る東文學社に於ても、また百有餘名の支那學生を教育してゐる。

舊來の寺小屋流の教育は、北京街上、到る處になほ流行してゐる。鬚髭灰白の老先生、寺小屋の教師多くは老人であるが、七八歳乃至十三四歳の少年を、十人乃至二十人づゝ集めて、讀書と習字とを教へてゐる。讀書は百家姓、三字經、千字文、四書、五經といふやうな順序で、一と通り、其の素讀がすんで、然る後に講義に移るといふのであるが、かゝる寺小屋にては、素讀が重なる教科で、朝から晩まで殆んど時間の制限もなく、喧然囂然と書を讀んでゐるのである。

◎北京の四季

北京の塵の巷にも、春は流石に桃花、梨花、海棠など、くさくさの花も見え、楊柳の新衣、萌黄に霞めるなど、心ゆくばかりの眺めはあり。もし夫れ晴天、風なきの日、馬を郊外に走らせて、玉泉山のあたりに春を尋ねれば、直隸の原野には珍らしき水田の畔に、まだ淺緑の柳枝、手弱女の裳を引けるが如く、山の根には、玉の泉さへ混々として湧いて、盡きず。山に登つて、萬壽山に朱欄、黄屋の燦爛たるを眺め、昆明池の激澗、漾々たるを俯瞰し、遠く田野の茫々たるを望み、近く西山の蜿蜒たるを仰ぐも、また一興である。



されど、春は一般に風多くして、折角の花も煙の如き埃に掩はれ、魔の如き風に誘はれて忽として散つて了うのである。さなきだに短かき北京の春の名残を芍薬の花藤の花などに惜む暇もなく、初夏の緑は忽ち北京の市街を蔽ひ盡すのである。

新緑の北京は枯朽せる古帝都が忽ちにして清新なる新天地に生れ出でたるかの觀がある。滿都唯だ青々凡て蒼々人の心も何となく暢びるかの思ひがする。然かも五月の初になると暑熱次第に襲ひ來り、もしかすると寒暖計の九十度にも昇ることがある。されど五月、六月は先づ凌ぎ難き暑さではないとして、七月、八月の盛暑には最高百二十度にも上るといふ次第であれば、その暑熱の劇しいことも略ぼ察しられるであらう。で、氷塊を納れた箱を室内に安置して冷氣を取り、天棚といふ日遮を架設して、庭前、庭後の日光を遮り、壁を厚うしては、外熱の室内に侵入するを防いでゐる。而かも夜間は熱度大に減退するを以て、清涼の氣を納れ、以て晝間の苦熱を一新することが出来るのである。秋の北京こそ落莫たるものなれ。いと、いとさへ古びた北京が、一層に枯朽し盡

して殆んど見るべき影もない衰れた有様である。寒氣の襲ひ來ること急速なれば、木葉も紅出る暇もなく枯れ果て、唯だ見すばらしき形骸を殘存するのみである。高遠幽深の趣を何れの處にか尋ねべき。

冬の北京は別に委細の記事あれば、此處には省いて置く。

◎交民巷

交民巷とは各國居留地のことである。正陽門より東崇文門に至るまで、城壁の内側に傍ふて一區劃を爲し、此處に各國公使館、兵營及びその練兵場、銀行、香港上海銀行、露清銀行、中國通商銀行、橫濱正金銀行等郵便局、教會堂、病院並びに二三の商店もある。家屋は在來の支那人家を假用したるもあり、目下なほ建築中のものもあれど、其の多數は洋館の巍然たるものにして、道路清潔、秩序整然たるものあれば、支那街より此處に入り來れば、實に別天地に在るの思ひがするのである。

廣くもあらぬ地域を、日本、英吉利、獨逸、佛蘭西、伊太利、奧太利、露西亞、合衆國、西班牙其他の諸國が分割して、各々其の公用の建物を築造したれば、居留外人の大多



數は支那街に入り支那人の家屋を賃借して各々其の業務に従事してゐるのである。蓋し交民巷以外には外國人居住の權利なけれど今は黙許の姿である。北京在留の日本人は、二中隊の軍隊を外にして男女合計五百名各國居留民中の最多數で、毎月増加の勢である。

◎旭旗

身一たび日本帝國の領土を離れ日本の家日本の人のなほ寒々たる異域に入つて旭旗を仰ぎ見よ。敷島の大和心は忽然として胸中に躍動するのである。曾てはわが心にさ程の感動を與へざりし旭旗が今更に何ぞわが心を躍らすのであらうか。父母の膝下を去つて親の恩を知るが如く太平の御代遠く距つて始めて國旗の恩恵を覺るのであらうか。日本人の胸に潜んだ愛國の至情が外圍の刺撃に驚いて目覺むるのであらうか。兎にも角にも國外に在つて國旗を見るのはまこと嬉しきものである。北京市上來往の折々旭旗の店頭に翻翻たるを見る。そはみな日本人の商店旅館料理屋其の他諸般の業務に従事するものである。其の業務の何たるを論せず旭

旗に對すると、一種怡愉の情を感ずる。旭旗よ、旭旗よ。願くは世界到る處に翻翻たれ。

北京の冬

北京の冬！日本にゐて、人の話に聞いた時は、それは大したものであると思つた。去年九月始めて北京に来て、十一月の十四日池の面に初氷の薄く張つたのを見て次第に寒氣の増し加はるのを身に覺えた時は、氷點下十數度に下るといふ嚴寒の時の事が思ひやられて、唯だ防寒の用意に心を勞してゐたのであつた。けれど十二月を去年の夢の中に葬り、今年の正月も今四五日で過ぎて了うといふ今日、北京の冬の半ば以上を過ぎ果て、顧みて見ると、國にゐて思つた程の事もなく、防寒具などい餘計に騒いだ程の事もなかつた。北部滿洲や蒙古や西比利亞あたりになると、それは實際寒いかも知れない。大陸性の氣候とはいへ、その緯度からいつて見ても、北海道よりはもつと南の秋田あたりと殆んど同緯度であるから、大概是知れたものである。熱帯であれ、寒帯であれ、世界の至る處に



世町界至る所に日本町

住家を求めて日本町を日本村を建設せねばならぬ運命を有つてゐる日本國民の一人でありながら、これ位の寒さに避易して堪まるものかと思へば前の心から恥かしくも思はれるのである。

常に氷點以下に氷點以下に稀なり

とはいへ、日本内地一般の氣候に比較して見ると、寒いことは寒いに相違ない。十二月初日以降目今に至るまでの寒暖計を調べて見ると、最高三十三度で、最下が十三度、その平均温度が二十三度。尤も之は華氏のであるから先づ常に氷點以下に在るのである。でも雪は極めて稀で、十二月の二日一度、一寸ほど降つて、それが消えて了うと、同じく四日にまた降つた。今度は約一尺許りも降り積つて、兼て汚穢の北京も、その時ばかりは銀世界であつた。それが凡そ三週間もかかつてやう／＼解けて了つた限り、今日に至るまで更に一度も降らない。時々雪でも降つて、北京の町を潔めて、街上の往來に心地よからしめて呉れば善いかと思つても願つても一向に降らない。でも雪解けのした後の街路の不潔なには閉口するが、それは初雪の頃の事で、寒氣の段々強くなるに従ひ、街上に垂れ流す汚穢までが、氷詰めて了つて、靴を汚す氣遣ひもなく、紛々たる汚臭を感ず

冬が却て愉快

鼻下に白き霜 蒙古來の寒風

自然と闘闘

る愛もなく、街上の歩行も割合に心地よくなるのである。北京の町は、此の點に於ては、冬が却て愉快である。

寒氣凛冽たる朝また夜、寒を侵して外出すると、吐く息白く霧をなし、それが忽ち鬚鬚に觸れては、鼻下に白き霜乃至氷柱を見るのである。若し夫れ北の方長城を越えて、蒙古來の寒風、樹枝を振撼し、窓戸を打つて、戶外に悲鳴を爲す時、寒氣の如何に烈しきことよ、耳を剪り、面を刺すが如くなるが上に、街上の沙埃を飛ばして、千萬丈、一天際々として霧立籠めたるが如く、目も口も開いたものに非ず。

固より斯んなことは、あまり澤山あるといふ譯ではない。寧ろ稀な方で、一週間に一度か、二週間に一度といふ位であるが、かかる時に遭逢する毎に、わが輩は不快を感ずると同時に、又壯快の思ひをするのである。恰かも勇士が戰場に立つて苦戰奮闘するが如く、自然に對して、戰闘するのである。自然の思寵人間に優渥なる時、人は自然に慣れて却て怠惰に陥るの傾向がある。されど斯る境遇に在つては、人は常に戰闘準備をして、自然と戰ふの覺悟がなければならぬ。思ふ之れ、天がわが輩を警醒して、活潑々地に活動せしめたまふのではあるまいかと。



氷滑り

意氣豪壯、英靈天地に奔騰するかの思ひがする。

氷の上に尻餅

北京の城の廻りに壕がある。初雪の頃より氷りそめ冬を通じて厚き氷の氷滑りに宜しく、氷船を走らすに宜しい。見よ、辮髪後ろに垂れ下げた小兒等の、日毎に氷の上を滑り廻つて面白そうに遊んでゐるのを、そして如何に巧みなるかを。或は右の片足にて、或は左の片足にて、飛ぶが如く、射るが如く、或は滑り行く様、如何にも得意らしく、また愉快氣である。わが輩も曾て、試みに滑つて見たのであつたが、中々に滑らない。半間も滑り行くことが出来ない。遂には後さまに倒れて、氷の上に餅尻を搗き、頭を打つた。もし滑稽畫の先生でも見てゐたものであつたならば、直ちに取つて以てその材料に供したかも知れない。兎に角に氷滑りといふのは、寒國に於ける一種の愉快なる遊びである。それから氷船。之は氷の上を走らす船である。船といつてもその形は全で異つてゐる。丁度卓子の足の短かいそれで、前に引繩を着け、客の二人もしくは三四人を乗せ、氷の上を引いて走るやうになつてゐる。引手が一町程も引いて走つて行くと、後はその惰力で以て、一町位は引かずとも、船が自分で走つて行くのである。城の

氷船

防寒の用意  
皮衣

耳袋  
冬帽子  
冬靴

東、東便門から通州まで五里堀川が通じてゐて、その氷の上を氷船が通ふてゐることである。そして二時間餘にして通州に達するといふことである。流石に寒國の事として、防寒の用意は十分に備つてゐる。第一は衣服、厚い綿の入つたのは固より種々の皮衣を衣て、暖かそうに膨れてゐる。毛皮は羊皮が最も多く、之には上等より中等下等と種類が多いのであるが、それは大抵衣裳の裏に用ゐてゐる。狐や獺や貂や、其他上等の毛皮になると、之を表にして上衣に裝ふてゐる。その價下等にして五六十金、中等上等の品になると百金乃至千金以上であつて、いふまでもなく、中以上の社會に用ゐらるゝのである。それから防寒頭巾。之は外出の時に用ゐるもので、日本衣の袂を斷つて頭に被つたやうなもの。稀には異つた色のもあるが、多くは裏が淺黄で、表が赤い布や羅紗の類である。耳より双頬を裏んで頭に結び、そして後ろに尺あまり垂れ下げたてゐる。なほ耳袋もあれば、毛皮を裏にし、又は表にした帽子もある。が、之は多くは下等社會の被り者となつてゐる。次は靴。之も殊更に冬用のものがあつて、通例のよりは大きく、襪子を厚く穿くことの出来るやうになつてゐる。それから又、寝るには



炕といふものがある。煉瓦を積むこと高さ二尺ばかり、下に穴を穿ち煤を燃いて之を暖め、其の上に寝るといふのである。此の炕の上に臥ると、煎餅蒲團も尙以て快眠を齎るに足るのである。けれども、之は至る處皆然りといふ譯ではない。貧乏にして出来ないものもあれば、富有のものにして殊更に用ゐないものもある。それから居常室内を暖むるには如何なるものを用ゐてゐるかといふと、之は爐子といふものを用ゐてゐる。日本でいふて見ると、火鉢といふ處であるが、餘程異つてゐる。鐵製のもの、黄銅製のもの、土製のものなど種々あるが、その形状と用法は大同小異である。上に徑二寸位の丸い穴が開いてゐて、中に火を作り、下の方横に灰を取り、且つ空氣を入るゝ穴を開けてある。燃料は煤といつて、石炭を粉末にし、黄土を混じて丸い團子形に拵へ、日に乾かした、いはゞ炭團の小さいものである。能く燃えて、長く火を保つので、普通物の衰焼をするにも多くは之を用ゐてゐる。但し此の爐子は、室内を暖むるには、ストーヴの半允程の効能もない。其の温熱が皆な上の方へ飛んで了つて、四方に發射しないからである。で、彼等もストーヴを利用したら善からうと思ふのであるが、彼等は之

を用ゐない。全く用ゐないではない、時には支那人の家でストーヴを見ることがあるが、それは極めて稀である。蓋し彼等は多く衣て暖を取るので、火氣に依つて暖を取ることは、あまり好まぬ様である。殆んど身も動けぬかと思ふ程澤山衣てゐても、労働などしない中等以上の社會に取つては、それで宜しいのである。併しわが輩外人は、支那人のやうに澤山衣てゐては、仕事が出来ぬ窮屈でたまらぬ。で、ストーヴを用ゐて暖を取る。すると室内は春で、自由に愉快に仕事も出来る、勉強も出来る。零下二十度の北京の冬も、何でもない。

感心なのは下等社會である。労働者である。中等社會のその様にあまり澤山衣てゐないのであるが、それで如何なる寒天にも平氣で働いてゐる。車夫や苦力などは、身體を激動するので、自然と内より身體が暖まるであらうが、彼の路傍の露店に物賣る小商人等が、寒風に吹き曝されてなほ勇ましく客を呼んでゐるのは、中々越大いものである。西山より石炭を駱駝の背に負はして、北京の都に運び来る駱駝引などが、汚れた綿入の一枚を裸身に衣て、荷なき歸りの駱駝の背に跨り、石炭に汚れて、眞黒き胸を見はに、寒風に吹かれて悠々たるを見ると、其



憫れなるは  
非人乞食

北京の冬の  
夜

の體力の豪健なるに驚かざるを得ない。濁聲高く夜更けて物賣りあるく男の如何に酷寒の夜と雖も絶ゆることなきもまた壯とせざるを得ない。夜深うして街をわが宿に急ぐことある時銀爐又は銀號などの戸前に夜番として雇はれたる兵卒の銃を枕に羊の皮を打被つたまゝ夢も長閑に高野かきつい睡つてゐるのを見るとあれで能く睡れたものと唯だ感心の外はない。

憫れなるは非人乞食單衣の破れて海松のやうなのを被てゐるのは先づ上等なので破れた布を唯だ肩より胴の邊りに纏ふて腰より下は全く素裸なものもある。僅かに人の情の露を吸つて食ふものも不十分なればか瘦せてけて寒氣と争ふ勇氣もないらしく戦々とうそ震ふて殆んど人間の生色が無い。聞く所に依ると毎年北京の街上に飢え凍えて行倒るゝ乞食の數が百人以上に上るとのことである。

夜深けて一夜天上を仰げば數萬の星斗銀光燦爛として輝き英氣凛々として人の心を射るが如き思ひがある。風荒れて木枯れ煙塵天を捲いて雲の如く慘憺として風物の見る物なき北京の冬も唯だ夜のみは心を清うすることが出来

るのである。星の光月の光。二月二十四日

### 觀劇の宴

邸内の觀劇

一月某日學生某に招かれて其の邸内に催せる觀劇の宴に臨んだ。某の父は吏部の大官であつて支那の官吏に貧乏人はないといふ方であるからその富裕なることは先づ察せらるゝが彼等が平生如何程奢侈に耽つてゐるか其の一例として此に此の記事を諸君の御目に懸けるも亦た全く無用のことでもあるまい。

某は數多ある兄弟の一番末の弟で年は二十を越ゆる僅に二歳まだ一個獨立の仕事をするといふ譯でもなく唯だ學生である。けれども彼は早や妻君が有つてそれが今度長子を生んだ。その御祝ひとして觀劇の宴を催すから某日午後第四時來駕を賜はりたしと余れもその案内を受けたのであつた。そも此の觀劇の宴を一家の祝節に於て開くことは上下を通じて富めるものゝ執行する處である。されば西太后の如き毎年その萬壽節に於て皇族大官を招き宴を

長子出生の  
祝ひ



開いて、劇を観させたまふこと、一週日乃至十日にも及ぶといふ話である。そして其の劇場は必ず家の内の廣庭に於て新設せられたものである。聞く所に依ると、宮中には名優を選んで、官位を與へ、平生保護をあたへたまふのである。

さて其日の午後四時となつた。兼て支那人の宴會に招かれて、其の時間通りに行つて見ると、何時でも一時間位待たせられないことはない。時に依ると、三時間も待たせられて、欠伸の百遍も吐き出すことがある。日本でいふと、大口開いて欠伸を吐き出すのは、宴會の席上などでは、ちと無禮の方であるが、此方では一向構はないのである。少くとも余が見た處ではそうである。で、わが輩は敢て欠伸を噛み殺すことを要しなかつた。自由に吐き出して待つてゐるのであつた。といふやうな次第であつたので、けふは少し時間の割引をして遣らうと思つて、五時に往つて見ると、珍らしや、今日は既にお客様が満堂で、芝居も始まつてゐた。

舞臺は門に沿ふた長屋様の一棟と、それと向ひ合つた宴會室とでもいふべき

欠伸の百遍

舞臺

一棟との中庭に設けられて、普通の支那劇場のそれと、殆んど同じ様に出來てゐる。そして、それを會堂の方から見物するといふやうに建てられてあつた。固より支那劇には、花道といふものがない。樂屋に通ずる左右の暖簾の中より、役者が出入するといふ仕組で、左右の側には馬丁や、下男や、又はその家族などが、主人のお恵みに預りまするといふ様な見えで、澤山入込んで立見をしてゐる。舞臺と云つても、その規模、小さく、丁度わが國の能舞臺でも見るやうで、舞臺を飾る道具とても、極めて簡單なものである。此の狭い舞臺の後面に、囃方が椅子に腰かけたり、立つたりして、亂雑に居並んでゐる。之は一般に支那の劇場がこんな有様であるので、此の透か出來の劇場にのみ限るといふ譯ではない。

さて御鄭重な御挨拶を蒙り、導かれて設けの席に着いた。卓子がすぐ舞臺の下から、一段高い會堂の廊下まで、凡そ十脚も並べられてあつて、それにお客様が、四人もしくは五人六人と、卓子を圍んで茶を喫みつゝ、煙草の煙長閑かに吹きつゝ、芝居を見物してお出でなさる。お客様といふのは、その親類や、知己や、朋友で、皆な富裕の方々らしく、深紅色の紋繻紗の上衣の花やかなるもあれば、價貴き毛

設けの席

お客様



皮の上衣の暖かそうなものもある。之は男子席を見渡した、ザット大體の眺めである。

六〇

婦人席

一寸振返つて見ると、男子席の後面一帯會堂の室内に婦人席が設けられてある。奥様や令嬢や中には愛妾達もゐられるであらう、綺羅花よりも艶かな服装に雪の上に牡丹の花片でも點じたかの御顔のお化粧。金の耳飾りが燦然と輝いて、花の簪はゆらくと春風に靡くかのやう。男子席と同じやうに卓子を圍んで、低語喃々、水煙管を手にせる、長煙管を口にせる、共に楽しそうに芝居を見てゐられる。婦人席の中にはまた幼き男の兒や、女の兒が數多交つてゐるが、其れには娼婦もしくは女中といふやうな者であらう、或は老いたる、或は若き女が、一々附いてゐて守をしてゐる。わが輩は之まで數回支那人の宴會に招かれて、宴席に列したとがあるが、未だ曾て一回も斯く一堂に會する婦人を見たことはなかつた。蓋し今宵は觀劇の宴會であるので、特更に婦人の爲に、別に劇場を設けるといふ譯にも行かないので、かくは一堂に會してゐるのであらう。わが輩曾て某某劇場に於て、支那演劇を見たことがあるが、婦人の觀客としては、唯だ僅かに

娼婦

宴會に婦人

劇場に婦人

十一二歳の娘の子を二三人見たばかりであつた。聞く所に依れば、婦人は通常公ける劇場に於ては、演劇を見ないのである。見ないのではない、見ることが許されないのだからといふことである。されば今夜の如きは、婦人客に取りては、最も愉快なる一夜と云はねばなるまい。だからであらう、皆な怡愉然たる面持である。

此の會場の有様が既に自分には一種奇妙なる演劇を見るかの思ひがしたのであるが、舞臺の上を眺めては、更にその演劇の奇怪なるに驚かざるを得なかつた。銅鑼を鳴らし、板を叩き、竹片を叩き、鼓、弓、月琴、笛、三味線などを吹彈合奏する、囃の騒々しさ、耳も聾せんばかりで、美感も何もあつたものでない。加之俳優の扮装が實に奇々怪々で、金銀珠玉を鏤めた衣裳や、孔雀の尾毛を立て、白き狐の尾のやうなものを後ろに垂れた帽子や、黒き白き、或は灰白の一尺乃至二尺も長き鬚の口邊を蔽ひ隠せる。眞黒く顔を塗抹して、眼のみばちつかせたる。鼻のあたりを無作法に眞白く塗りたる。わが輩の眼には、唯だ怪物の集合とより外には見えない。そして劇は多く唱歌を以て演奏さるゝので、臺詞や舞踏といふ

奇怪なる演

北清見聞録

六一



半ば日本の能に似てゐる

劇の面白味

立廻り

やうなことは極めて少ない。此の點に於ては、半ば日本の能に似てゐるかと思はれるのである。そして唱歌の時は騒がしき囃の鳴りを静めて、唯だ鼓弓もしくは笛の調べが聞かれる。その調べに合せて、異様の人物が代々演ずるのである。その節奏迫りて急なるときは、恰かも日本の阿房陀羅を聞く様である。で、劇の面白味といふものは、その唱歌の巧なる所にあるらしく、その妙に至る時であらう、好いと云つて頻りに賞讃の聲を發するのである。時には又、偃月刀や槍を以て立廻りを演ずることがあるが、之も日本の演劇に比べると、餘程簡單であるかのやうに見られる。その劇の仕組に至つては、何等の事件を演じてゐるか、われには全く分らない。支那人と雖も、その唱歌に至つては、その節奏を聞くのみで、その意味を了解することは、劇通に非ざる限りは出来難いとのことである。

分らぬながら、あまり感服も出来ぬながら、唯だ珍らしいと思つて、茶を啜り、煙を吹きながら見物してゐると、やがて御馳走が卓子の上に持ち運ばれた。婦人席にはまだ、

支那料理

酒

乾杯

宴席に酔漢なし

御馳走はいふまでもなく、支那料理、支那人の御挨拶のそれの如く、實に油ッ濃いものではあるが、之も食ひ慣れて見ると、中々に美しいものである。その實質の豊富なる、その種類の多き、免ても日本の料理の及ぶ處ではない。そして個々に膳を供へて、割據するのではなくして、一卓子のもものは共同して、各々箸を取つて同じ鉢の中なるものをつゝき合ふ處、また面白しといはねばならぬ。酒は黃酒、日本酒程に強くはない。そして日本の宴會の如く、献酬もしなければ、無理強いも仕ない。唯だ乾杯といふことを遣るが、之は祝ひの心を表すとか、或は此の後どうかお近づきを願ひまするといふ様な場合に、共に杯を舉げて同時に之を傾け盡し、飲み了つて互に杯の内面を示し合ひ、その飲み乾したることを告ぐることがある。されば酔ひ頼れて、管を巻き、又は亂暴を爲すといふが如きは殆んどない。此の點に於ては、日本人の宴會よりは優つてはゐまいか。少くもわが見たる四五回の宴席に於ては、未だ一回も所謂酔漢なるものを見たことがない。

通常の宴會では二時間でも三時間でも、或は四時間五時間と長くゆるくと、



水煙管

長煙管

煙草好き

飲んだり、食つたりするのであるが、けふは觀劇が主であるからであらう、一時間位で切り上げて、最後に飯、それが濟むと、杯盤は取り片附けられて、給事が熱い湯に浸した手拭を持つて来る。それで手を拭き顔を洗つて、さてまたお茶。お客様方には、銘々に引連れて来ておいでになる家來共が、各々その主人に、水煙管を捧げ持つて来る。水煙管は水を通して煙草を吸ふ一種の煙管である。必ずしも之ばかりではない、日本の長煙管に似て、更にそれよりも長く、且つ雁八と吹口との極めて大きな煙管もある。馬尼刺の葉卷や、村井のピーコックを吹かしてゐる方もある。元來支那人は、餘程煙草好きと見えて、婦人小兒に至るまで、みな煙草を吹いてゐる。

婦人席の御馳走の怪しの一室

男子席は既に御馳走もすんで、煙を吹き、茶を喫みつゝ、演劇を見てゐると、今度は婦人席に山海の珍味が持ち運ばれて、皆なお美そうに食つてゐられる。酒も呑してお出でなさる。此處に怪しと思つたのは、婦人席の右に隣れる一室である。それは間の建物に仕切られて、此方より窺くことが出来ぬやうになつてゐるから、何物がゐるとも敢て容易に知ることが出来ない。特にわが輩外人が窺

幕なしの演

時代物

世話物

ひ知ることが出来ないものであるが、推察する所人がゐるに相違ない。その前面舞臺に對する所だけは僅かに開かれて、何人か演劇を見てゐるらしい。そして婦人席の饗應が始まると同時に、その一室の内にも、食事が始つたらしく、給事が御馳走を持ち運んでゐるのが見られる。して見ると、矢張り婦人客に相違はないのである。が、それは高貴の婦人達でもあらうか、わが輩の察する所は、正にその反對であつた。兼て男子様方が、交際を頻繁にしてお出なさる歌ひ女の君達、今宵は奥様や、愛妾方が、數多からせらるるので、室を異にして斯くは物せらるるのではあるまいか。

婦人席のお食事も一時間位にして濟んだ。男子席に於て、或は婦人席に於て、かく饗應がある間も、演劇は絶えず演せられてゐる。通常支那の演劇は幕なしで、始より終まで、演りつ通しである。でも其の間には段落があつて、一段々異なる劇である。日本の劇のやうに數段に連なつた長い劇は一つもない。そして時代物、世話物と一段毎に代るゝ演ずる。時代物は例の奇々怪々、夢幻劇とやらの最も甚しいものであらう。世話物には例の怪的扮粧は比較的少ない。



特に婦人の如きは全く現今の風俗で、頭髮の飾り、衣服、纏足の風まで、巧みに装ふてゐる。世話物といつても、人情の極致を描き出して、波瀾曲折の微を穿ち、遂に大團圓に至るといふが如き大規模のものはない。時代物と同じく、一時間餘りの短時間に、唯だ一段を以て演じ終るので、もし時代物を以て能とすれば、世話物は狂言である。即ち一場の滑稽劇である、即ち一個の茶番狂言に過ぎない。而かも多くは猥褻極まるものである。分らぬながら、演者の舉動に依りて見るも、略ぼ察せられるのである。

十時も過ぎ、十一時となつても、演劇は容易に止みそうでない。北京の都も、まだ電氣燈の光輝くとまでは洒落てゐないが、空氣洋燈の大なるものが七つ八つ、舞臺を照らして、晝を欺く明るさに、お客様は皆な興に入つて、或は喝采の聲を放ち、或は技藝の巧拙を批評し、歡語笑談、見物してゐる。然かもわれには左程の興味を感得することは出来ないのであるが、演劇よりも寧ろ、お客様方の談笑動作の様が面白く、出来る限りはそれを觀察しやうと思つて、退屈を忍んで、舞臺の方よりは寧ろ餘計に、紳士貴婦人方の舉止の上に眼を注いでゐた。固よ

空氣洋燈

夜寒

り芝居を見るやうに、顔を擧げ、眸を凝らして注視するのは無禮でもあらうし、また頓馬な話でもあるし、特に婦人席の如きはわが後ろにあるから、表面は熱心に劇を見るかの風をして、時々眼を反らして窺み見るのであつた。

もう止みそうなものであると思つて待つてゐると、十二時もやがて過ぎて了つて、演劇は中々に止みそうでない。出来る丈はと我慢してゐると、夜寒身に逼つて、暖かに衣たる身も足のあたりより冷えて来る。此の北京の冬の寒いのに、場内ストーヴの設けもなければ、爐子も入れてない。元來支那人は寒いとて、火氣に依つて暖を取ることは仕ないで、多く衣て暖を取るのである。されば見よ、彼等は皆な常陸山や梅が谷を見るやうに、暖衣を重ねて太つてゐる。であるからして、彼等は場内に火の氣がないとて左程寒さを感じぬであらう、夜の深く、のも寒いのも知らぬかのやうに、談笑自若として、觀劇益々興に入つてゐる。そはわが鞆もかねて知つてゐる處であるから、餘計に衣を重ねて來てはゐるもの、しかく夜更けては、次第に寒冷を覺ゆるのである。

此の時幸にして、また御馳走が供へられて、暖かな黃酒を傾け、熱い羹を味はつ



て暖を取ることが出来た。前回に比べると引換へく出て来る馳走の品々は、  
 少々少ないやうであつたが、更に佳肴珍味の前に異なるものがあつて、燕窩、海鼠、  
 など、亡國の臭ひのする料理もあつた。諸君彼等が此の如く奇態なるものを珍  
 重して、或は南洋より、或は日本よりの輸入を仰ぎ、その高價なるをも厭はざる所  
 以を知りたまふか。支那國民の淫靡なるは、此の一事を以てしても證據立つ  
 ことが出来るではあるまいか。

男子席の馳走了つて、更に婦人席の會食もすみ、時は午前の二時に近くなつた。  
 適々二三の客の辭し去るものあるを見た。機失ふべからずと、われもまた辭し  
 て外に出た。場内のピーピー、ドンジャンは尙ほ街上に聞えてゐる。

### 蘆溝橋

三月二十九日友人三五相語らひ、共に驢馬行を蘆溝橋に試みた。春寒漸く減  
 退して桃花次第に綻び初めた折柄、郊外の春色を驢背に眺むるもまた一興であ  
 らうと、此の日曜を選んだのであつた。

朝六時に起きて、急ぎ出立の用意をなし、朝飯のかはりに焼餅トウモロコシを嚙つて待つて  
 ゐると、やがて五人の汚ない驢馬屋が、五頭の驢馬を牽いて來た。前夜命じて置  
 いたからである。

同行はK氏、I氏、T氏、M氏及び余を併せて五人。他四氏は皆既に三四もしく  
 は五六回の經驗があるのであるが、余は始めて驢背に跨るのである。けれど、落  
 つこちた處で、小さい驢馬の事、何程の事があらうかと、ゆらりと——寧ろちよつ  
 ぽりと驢背に跨つた。そして共に門を出たのが、午前の七時に近い頃であつた。

驢馬はちよくと走り出す。驢馬屋も後から走つてくる。十町ばかり裏  
 小路を走らして、外城の西門廣寧門を出た。一直線の大道西に向つて、縷の如く  
 長く引いてゐる。道は幅四間ばかり、城門より殆んど二里が程、大理石やうの堅  
 牢な石を以て敷きつめてある。石は大小一様ではないが、長さ三四尺より幅二  
 三尺に至り、厚さはその兩側に露出してゐる處を見ると、殆んど一尺もあらうか  
 と思はれる程である。但し此の大工事は、北京の城壁と共に明時代に出來たの  
 で、以來一度も修繕したことはないらしく、その表面は不平等に磨り耗らされて、



凹凸一様ならず、兎ても車や馬車を驅ることは出来ない。絡繹として西山の石炭や、地方の貨物を北京城内へ運び来る駱駝馬、驢馬、騾馬でさへも成るべく此の石路を避けて、兩側に自然に出来た道路を通行してゐるので、折角の大道も今は殆んど不用に歸してゐるのである。此の石路は北京城門外の奇觀にして、なほ此の外にも四つ五つあるのであるが、その規模の大なる實に驚くべきもので、城壁と、下水工事と、此の石路と、併せて北京の三大工事といはねばならぬ。北京城内の下水工事は、實に驚くべき大仕懸のものであるが、今は殆んど其の用をなしてをらぬ。

北京の三大工事

初春の野の眺め

さて陸續として荷物を運び来る駱駝や騾馬や驢馬を避けつゝ進んで行くと、城外の人家次第に疎らになつて、野の眺めが廣漠として眼に入つて来る。今やう／＼芽ざし、初めた柳樹が所々に青く霞んで見るからに心も暢びるかのやう。西山は近く右手に連なつて、淡霧に蔽はれてゐる。麥畠には今やう／＼一寸程延びた麥が春を待ち得てのび／＼と次第に成長してゐる。空は稍曇つてはゐるが、流石に春の日の薄雲を透して照らしても、寒いといふことはなく、風が吹か

ねば名物の塵埃も飛んでは來ず、城内の塵埃堆裏に住みなれた身の實に生き返つたやうな心地がする。驢背ながら共に快談しつゝ、急ぎ進めば、二里の石路を忽ちにして行き盡した。

石門

道幅數十間

石路の盡きた處に石門がある。數百年の風雨にや曝されたる、古色蒼然として、明代以來、歴世興敗の跡を語り顔である。石門を通りぬくれば、道幅は數十間、一面の河原を通るが如く、砂礫圍石の爲めに、驢馬も歩行に艱むばかりである。但し永定河氾濫の爲めに荒された幾その洪水の紀念と思はれた。此の河原のやうな、而かも百間もあらうと思はれる馬鹿に廣い道を進んで行くと、前に蜿蜒として長蛇のやうな長堤がある。それは京漢鐵道が蘆溝橋より分岐して、直ちに豐臺に行きて、京津鐵道に連絡せる枝線である。鐵路の下道を抜出ると、前に一小城壁が見えて來た。即ち永定河畔の一小鎮である。そして其の永定河に架せられてあるのが、即ち蘆溝橋子なのである。共に勇んで驢馬に鞭打つと、砂煙を蹴立て、ま／＼しぐらに駈け出した。忽ちにして城門に入った。

一小城壁

東の方の城門を這入つて見ると、城内の戸數は三百戸ばかりかと思はれる。



人形のやうな支那婦人

其の中央を東西に、一直線の大道が通じてゐる。それを五六町走せ通ると直ちに西門に達する。打見た處、町は餘程寂寞たるもので、中に二三の富豪らしき家を見るばかりである。散歩でもしてゐるかのやうに往來してゐる人民、白粉紅粉で彩色した面貌、花簪、ゆらめく頭髮、それを小さい足で運んで行く支那婦人の例の、人形のやうなものも、三五あちこちに見られた。

壯大な石橋

西門を出ると、路の左右に色々の商店が並んでゐて、此處は却て城内よりも賑かである。そして百歩の彼方には、蘆溝橋が見えてゐる。其方に驢馬を走らせて、橋を一見すると、實に壯大な石橋である。幅四間あまり、驢馬を下りて試みに長さを測つて見ると、優に百五十間以上の長橋である。北京城外の石路と同じやうに、一面に板石を敷詰めてあるが、之も數百年の年代を経たものらしく、餘程磨り耗らされてはあるが、極めて堅固な築造である。兩側の欄干もまた石造で、高さ凡そ四尺ばかりの石柱の上には、みな象が彫刻されてある。橋下は即ち永定河で、濁流滔々として漲り流れてゐる。上の方五六町の處には、京漢鐵道の鐵橋が架かつてゐる。京漢鐵道がもと蘆漢鐵道と稱してゐたのは、列車直ちに北

永定河

京城内に入ることを許されず、此處をその起點としてゐたからである。更に、畔を放つて、下流を眺め見渡すと、河流奔放、廣漠たる平野の中に流れ入つて、未遂に烟霞の中に隠れ、心も其方に引込まれるやうな壯大な景色である。

永定河小學堂

橋を渡り盡すと、其處にもまた二十戸ばかりの人家がある。その中に一寸綺麗な新築の建物がある。正門に『永定河小學堂』と記した額が掛かつてゐる。參觀して見やうと、共に門内に這入つて見ると、小使が一人ゐた。それが出て来て、右手を額にかざし、佇立して兵式的の敬禮をなし、予等を案内して呉れたが、目下休業中との事で、教室は皆鏡前が下りてゐて、中を見ることは出来なかつた。が、玻璃窓越しに窺いて見た處、机、腰掛など、一寸整つてゐた。小使の語り聞かせた處に依ると、教室が凡べて十個、教師五名に、生徒が百人ばかりあるとのことである。

一旅店

六十歳の給

引返して、橋の畔に、石橋築造の紀念碑など見てゐると、外國人珍らしそうに、子供大人をこきまかせて、群集して予等を眺めてゐる。橋を渡り、返つて橋畔の一旅店に入つた。時午に近いので、晝飯を食はんが爲めである。六十何歳といふ老

北清見聞録



人の給事が愛嬌振撒いて上等の一室に案内した。上等といつてもそれは實に汚ないものである。八疊位の一室の、一方に炕があつて、それが即ち寢臺。一方は支那流の灰色の煉瓦を敷いた土間で、テーブルが一脚椅子が二三脚置かれてある。そして窓の紙も壁も煤つてゐる。裝飾品としては拙い人物畫の一軸が壁上に懸つてある外には何にもない。やがて詔への支那料理を持つて來た。何がなしに汚なくて、嫌な氣持がするのであるが、餓しい腹にはそれも美ましく食つて、餘つたのは驢馬屋に與へた處が、彼等は大喜びで、汁も餘さず喫つて了つた。食事が濟んで勘定を聞くと、凡て一弗六十錢といふ。それを拂つてやると、老給事、先生お祝儀を呉れとの御催促であつた。で、二十錢を進呈すると、先生大喜びで、多謝々々と追従笑ひを皺ぐちの顔、一ぱいに漲らした。

旅亭を出て更に城門に入り、城内の大道を還つて行くと、『西路學堂』といふ額をかけた一軒の家がある。序でに參觀して行かうといふので、共に門内に入つて見ると、更に學堂らしくはなくて、正面の一堂内に關帝の廟がある。番人らしい男に聞いて見ると、學堂は廟の後ろにあるといふことである。で、後ろに廻つて

見ると、果して其處に古びた校舎があつた。此處もまた休業中で、教師もゐなければ生徒もゐない。何を教へるか、と聞くと、漢文と英文を教へると云ふ。英文は外國人が教へるのかと聞くと、矢張り中國の教師だといふことである。それから城の東門を出て歸路に就いた。共に驢を走らすると、わが驢は動もすると殿たらんとする。往路には常に二番三番を争ふてゐたのが、勞れたのであらう、鞭を加へても元氣が一向に奮はない。中にI氏の驢は元氣中々盛んで往復共に先鋒と爲つてゐる。殿は常にK氏、蓋しK氏が遅れたのではない驢の進まなかつたからである。

北京城に近きところ、道の左方に外人共同の競馬場がある。序でに見て行かうといふので、畠中の小路を横ぎつて、行いて之を見た。随分立派に出來てゐて、周圍には柳が植ゑられ、一隅には洋風の建物が一つ立つてゐて、それが即ち俱樂部である。試みに競驢をやつて見やうぢやないかといふので、共に場内に入つて相並んで驢を走らした。そして余は遂に最後におくれた。

再び本の道に返り、城門を入つて、途次善果寺といふ廢寺の跡を訪ふた。城内



廣大幾宇の佛堂壯大な建物はなほ残されてあるが佛像佛具等はみな取り去られ、もしくは破壊せられて見るもいと惜しき心地がする。深く奥まりたる方へ進んで行くと、其處に一堂を修繕して、番僧小僧などの、此の廢寺を守つてゐるのがあつた。お茶の饗應を受ひつゝ、色々尋ね問ふて見ると、之は北清戰役の折に獨逸兵に荒されたのださうで、今なほ復舊の方法が立かねてゐることである。そしてわが輩日本人には余程好意を表してゐるらしい。

善果寺を辭して驢を走らすれば、十分時ならずしてわれ等の寓に歸つた。時に午後三時。余は幸にして落驢の不面目を免れたのであつた。が、I氏とM氏とは、寓に近き處に於て、共に一回の不手際を遣つた。そしてM氏は、膝坊主を磨剝いたといつてゐた。一つはその騎驢の巧を弄したからであらう。

### 長城と十三陵

われ始めて塘沽に上陸して直隸の平原を見た時、唯だ一直線の地平線、唯だの達する所、丘陵の見るものさへもなく、所謂大陸の光景、茫漠として、美感の心情を撫

大陸の光景

一回の不手際

大國的事業

づるが如き思ひはなけれど、悠遠の想ひ坐る胸に湧きて轉た雄大の感に堪へなかつた。さて北京城に近づいて城壁の偉大なるを見た時、更に支那人の事業の大國なるを思はざるを得なかつた。そして心は更に長城の彼方に馳せ、十三陵の畔にさまよふて、支那人の大なる事業の跡訪はんと思ふてゐたのであつたが、今や幸にして其の志を達するの時が來た。

端午の祝節

端午の節句は中秋十五夜の祝節と共に支那人の大に祝する處で、學校などにも三日間の休業がある。わが東文學社に於ても、此の端午の祝節に際し、三日の休暇を得たので、此の時を以て長城の遊びを爲さんと兼て同志を語らふて其の準備が爲されてあつた。

五月二十九日(清曆五月三日)午前の授業を終り、さて午食を済まして直ちに出發することゝなつた。但し往復六十里に近き路程を脚力に任せんには、到底三日を以て此の行を全ふする能はざるの憂があるので、此處に半日の行程を急ぐことゝしたのである。同行者は學社の學監N氏を一行の頭領として、N氏夫人、K氏、M氏、A氏、Y氏、E氏、I氏、S、M氏、T氏及び余を併せて凡て十一人である。

同行者

北清見聞録



一行の頭領

N氏夫人

日本婦人の  
先登者  
一行の旅装

一種の乗物

N氏は支那に在ること既に十年を超え、長城行を爲すこと今回を合せて凡て四回、内地の地理に明かに、人情に委しきを以て、一行の頭領且つ案内者である。他はみな始めて此の行を爲すもの、支那内地旅行の苦味如何、快味如何を想像して、活潑なる青年の元氣、早や長城のあたりに飛んでゐるらしい。N氏夫人は今年、の始め、其の良人と共に、漢口より河南に出で、正定、保定を経て、北京に入り、備に苦難を嘗め、日本婦人として、内地旅行の先登をなしたる人、今また此の行あり、恐らくは、萬里長城を見ん、日本婦人の先登者であらう。

一行みな洋服に草鞋、脚絆、草鞋は買ふことが出来なかつたので、遽かに襪襪切を買つて、N氏が重もに其の任に當つての手製のそれである。N氏所有の馬に毛布、其の他の携帶品を負はして、之を學社のポニーに牽かせた。但し毛布は夜間之を寝具に用ゐるのである。支那の旅店は、何處に行つても寝具がないので、旅客は必ず各自之を携帶するのである。N氏夫人は女性の身の到底歩行に耐へらるべき筈がない。で、平生乗用の乗物に乗つて出發せらるゝことゝなつた。その乗物といふのは、支那の貴人が乗用する轎子と、其の趣を異にして、藤製の椅

大陸性の際

見物の群集

子を二本の長き棒に結び付けて、之を二人の苦力に擔がせるのである。但し今回は遠路なればとて、更に二人を益して四人にて擔ぐことゝなつた。こは北京に於ては見ることに稀であるが、南清地方に於ては能く用ゐることである。余は曾て芝罘に於て西洋婦人が此の乗物を用ゐてゐるのを見たことがある。さて其の旅装は、日本服に海老茶の袴、乗物に日蔽ひなければ、洋傘さして、

一隊装ひ全く整ふて、零時三十分に學社の門を出た。夏なほ淺けれど大陸性の驕陽、蒸すが如く、日中は殆んど南方日本の盛夏と異なる所がない。宣武門より城内に入つて、大街を北に進めば、街上に來往の支那人、店頭に物を商なう、番頭、小僧等、共に我一隊の異様の服装に目を側て、見る。一里半餘の街路の塵埃雲の如き中を、汗を絞つ、つゝやうく、徳勝門を出た。城外に連なる町を二三町が程進んで、其の盡くる所の一茶店に憩ふた。汗を拭ひ、茶を呑んで、暫く休んでゐると、近きあたりの支那人が群集して、わが一隊を見物に來る。うるさゝに追ひ拂へども、また直ぐに集つて來る。夏の蠅のそののやう。N氏夫人は特に、彼等の眼の集注する所、外國婦人の彼等の眼に觸るゝこと、珍らしければ、



茶店を出で、更に歩を進む。一縷の大道幅極めて廣し、雖も土砂脛を没するばかり、加之所々敗壞して行歩甚だ難く、馬車或は驢馬などの過ぐるに逢へば塵煙忽ち雲の如しである。さればか歩行のものは兩岸の間乃至二間高き所を通行すべく其所に小路が出来てゐる。或は畑の中、もし大道を夾んで村落のある時は、人家の前を通るのである。で岸上の小徑から大道を眺め見渡して見ると、恰かも水なき河の中を馬車荷車などが砂煙を蹴立て、行くかのやうである。野には緑の麥の穂、大豆のまだ花も見えぬが、一面に眺めらるれど、土地の瘠せたるが上に、耕作の法も不完全なるらしく、加之此の頃の旱天にも其の發達を妨げられたらしく、麥の穂僅かに數寸、一見實に憐むべき有様である。見渡せば楊柳槐榆の綠葉、今正さに蔭を爲せるあたり、村落の各所に點在せるあり、檜樹の林を爲せる所、貴紳の墳墓あり。近く西山を左に望み、遙かに煙霞の間、八達嶺も見えてゐる。

德勝門外より八清里路の傍に土壁がある。土人は之を稱して土城と曰つてゐる。蓋し元代皇城の遺物である。今は僅かに其の痕跡を存するばかりであ

るが、元の當時は其の廣さ今の北京城に倍してゐたといふことである。

更に行くこと十清里、老槐樹の下に茶店がある。燒餅などを賣つてゐる。また此處に憩ふて樹下に涼を納れ、清泉を掬して渴を止む。快いふ可からず。凡そ北清一帯清泉に乏しく、飲料の清水を得ること誠に困難である。されば夏日の旅行者に取つては、之も苦しく感ずる所の一つである。而かも此の水の如きは北清に於て稀に見る所みな食つて之を飲んだ。路を隔てて一個の陋屋がある。屋前路に向つて一婦人が鶏卵の賣たのと、生の赤大根とを賣つてゐる。大根は拇指の稍大なる程にて長さ五六寸、初夏の頃より北京市上に於ても能く見る所で、常に食膳にも上り、街上にては苦力などが喫りながら歩行してゐるのを見たのであつたが、今試みに之を買つて喫つて見ると、喝いた喉には之も美しと味はれる。一個二文。卵は一個五文である。

此の旅行中途上に於て晝食に用ゐたものは、燒餅支那人の常食として米飯と共に用ゐるもので至る所に求むることが出来る。水飯粥の冷へたもの、之も至る所に爺さんや婆様などが賣つてゐる。石花菜卵などであつたが、其の價は極



めて低廉で、饅餅は一個四五文、水飯、石花菜は大の飯椀に一杯四五文、卵は一個四文乃至八文、處に依つて其價が異なつてゐる。其れから日本の饅頭見たやうなものもある。小さいのは日本のと殆んど同じ大さで、大きなのは恰かも茶盆を見る程で、一度に一つは兎ても喰へない故か、庖丁で以て求めに應じて切つて賣るのである。共に餡を中に入れて焼いたのである。町に行くと、鶏肉、豚肉、羊肉などが食へないことはないが、此の行儉約を主とすると共に、成るべく支那人の寧ろ下等社會の常食とする所のものを食つて、支那内地の旅行に慣れたといふので、此の様なものを食つたのである。で、宿屋に着いても、饅頭位が美味として、味ふた處のものであつた。もし支那内地の旅行を貴族的に爲様と思ふ人があるならば、麵、麩、饅頭など日用の食品を携帯するの必要がある。

さて茶店を辭して行くこと二三町ばかり、其處に一個の饅店饅頭店小さき町がある。京河といふ處で、百二十三十戸の商店が街道を挟んで並んでゐる、北京城を距ると十八清里。

京河を後にして行くこと十二三清里、また小憩。傍路の茶店に就て、水飯と石

花菜とを食つた。飢ゑて渴ける口には、其の無味きを稱ふの暇もなく、寧ろ美いと舌鼓打つものが多かつた。

息を休めては又前途に向ふ。野は同じ眺めである。村に入り、村を出て行く二十清里ばかり、日やがて暮れんとして、前面に沙河の城壁を見る。滿兵の駐在する驛であるそうだが、處々敗類してゐるのが眺められる。城の北方の河に架けたる石橋は、明時代の工事だそうである、まこと巨大なものであるが、巨大なる登石數百年來の車輪馬蹄に蹂躪せられたまゝ、修繕といふことを爲さぬものらしく、其の磨滅甚しくして、高低一様でない。此の橋の上を今もなほ通行する馬車、荷車などの艱みは甚しいものであるが、支那人は之をしりあまり不便と思つてゐぬらしい。橋頭の茶店に憩ふて路を遅くした人々を待つて居ると、暑さに勞れたらしく、二三子はやがて驢馬に乗つて來た。一行を見物の支那人はまた五月蠅きまでに集つて來た。或は洋服に觸り、或は草鞋を凝視し、中には種々尋ね問ふものもある。婆様妻君、姑娘なども數多出て來て、之は専らN夫人に眼を注いでゐた。沙河は北京城を距ること五十清里といふ處である。



また石橋

息むこと稍々久うして茶店を出發した。日は全く暮れ果て、陰曆五月三日の月が朧ろに路を照らしてゐるばかりである。前路の都合あればとて、今宵馬市口まで更に二十五清里の路を進んで、其處に一泊すべく決したれば、一隊更に勇氣を奮つて前途に向つたのである。途で買ひ求めた提燈に火を點じて、險惡にして而かも沙深き路を歩行いた。沙河の驛を通り越して北に出づる處また石橋がある。南の方なるとその壯大なるは同一であるが、其の破壊は更に甚しい。月落ちて曇れる空の星の光だになき暗の夜に、燈火の案内なくば危くも陷穽に落込んで劇い負傷を爲す所であつた。

路は悪ろし、夜は暗らし、歩行なかく、に危険である。最初の程は詩を吟するやら、軍歌を歌ふやらして、勉めて虚勢を張つてゐたのであつたが、夜は次第に更けて来る、足は段々と痛んでくる、體力はやう／＼に弱つて来る、兎もするといとどさへ痛い足を石に躓いて痛めるものもある。後に殘されて前なるものを呼ぶものもある。不幸なるかな、此の時蠟燭も大概は燃え盡きて、殘す所唯だ一本とはなつた。ポーンと苦力とを合せて十六人の一隊に、唯だ一個の提燈にては

一隊疲憊困

馬市口の旅

足元甚だ覺束ない。路は極めて廣い處もあるが、例の惡路で時に唯だ一列の長き一隊とならねばならぬこともある。前列後列唯だ足探りに歩行いてゐる。一隊疲憊困勞してやう／＼馬市口に辿り着いたのは夜の十一時。早速旅館を尋ね探して見るけれど、人家多くは戸を閉ざして眠に就いてゐる。而かも一隊の多數は疲れきつて、土地に打坐つた儘早や旅館を尋ね求めん勇氣もない。

N氏其他二三の健脚子が途に出會した親爺のぶる／＼と震へ懼れてゐるのを引張つて、それに案内をさせ、やう／＼一個の旅館を尋ね出し、寝てゐるのを叩き起し、懇々と談判の末一同其處に入ることはなつた。

門を入ると、兩側に長き長屋のやうなのが二棟、共に厩と客室とが相隣してゐる。それから、すつと奥の正面に一棟、それには三個の客室がある。其の客室なるものが、みな破壊汚穢實に甚しいもので、何とも漠ともいやはや言語に絶したもので、戸を開いて一見したばかりで、どうも臥る氣にならない。壁は落ち、窓の障子は破れて、床の上には塵埃の積れること寸餘。勞れ果てたるが上に、斯んな汚さい臥床の上に眠らねばならぬかと思ふと、實に不快の感に堪えないが、夜風



夜食

に晒されて野宿するより、とやうく腹の蟲を挿へて我慢することはいした。さて兎も角も餓を醫したいと、室内には入らず、廣い中庭に憩ふて急ぎ湯を沸かさせ、茶を入れさせ携へて来た麵麩を分つて之を夜食に代へ、やゝ渴と餓とを醫することが出来た。

草鞋脚絆の儘に熟睡の

一隊二室に分れて、臥床に入るこゝとなつた。余等の室内には彼の積れる塵の上ながら一枚のアンペラを敷かして、更に其の上に毛布を敷き、半日半夜の旅に疲れて汗に滲み、塵にまみれた衣裳を脱ぎ、せす草鞋脚絆さへも其の儘にて、毛布を被つて、さるりと臥た。時は早や十二時を過ぎてゐた。疲れたればか、忽ちにして熟睡して了つた。翌朝起き出で、後に聞けば、別室に臥た人達はアンペラさへも敷くこと叶はず、塵の上に毛布に捲かれて臥したれば、寢心地あしきが上に南京蟲の攻撃にまで遭ひて、終夜眠られず、朝起き出で、見れば衣裳も何も土の中に葬られたかのやうに、塵に塗れてゐたこのことであつた。特に、N夫人が、女性の身を以て、斯かる旅館の一夜を明かされたかと思ふと、實に氣の毒の思に堪へないと同時に、其健氣な氣性に感心せざるを得なかつた。ポイーや苦

屋外に露宿

早晨行

力等はみな屋外に露宿するのである。着のみ被のまゝ、布團もなしに寝るのである。支那人の體力の强健なる、何時もながら實に感心せざるを得ない。彼等の體力は實に野性である、獸性である。

三十日朝四時半に出で、急ぎ出發の用意をして。早晨の涼氣肌に迫つて、心地よく、綠葉茂れる樹林には珍らしき鳥の聲喧しく聞かれて、勇氣も奮ひ起すべく、勤めてゐるかのやうである。昨夜の疲れは未だ全く癒えねど、今日は長城を見るといふ望みがあるので、一隊何となく勇んでゐる。朝の食事もなさず、五時二十分といふに旅館を出發した。

行くこと五六町路傍の樹林の下に、婆娑が茶店を出して水飯を賣つてゐる。それを各々一二碗宛啜つて胃袋を充たし、少時にしてまた前途を急いだ。

野の眺めは別に異なる所はない。彼方此方の畑の中には早や農夫が鋤取つて勤しんでゐる。前方には一帶の連山、峰頭山脊共に稜々として、次第に近く眺め見渡される。

やがてして小川の水の清める流れを渡り、流れに沿へる一村を通り抜けて、更

山近し



に一村に入り、再び野に出で、河原のやうな大道を通り盡すと、其處にまた一村がある。村を出ると、四望の廣濶な臺地がある。蓋し所謂龍虎臺なるものは、此の邊を稱したので、元時車駕上都に巡幸の駐蹕の所、明時代には成祖宣英北征の時に駐蹕の古蹟といふことである。高臺の上の野中の路を過ぎし昔のことなと思ひ浮べつゝ、獨り全隊を離れて、眞先に進んだ。顧みると、早やけふも疲れたのか、後ろに續いてゐた諸君の影だも見えな。われとても脚力が餘程鈍れて来た。やう／＼意氣に鞭つて進んで行くと、居庸關の南門南口驛は近く十町の内に見えて、岡の上には烽燧臺が昔の遺物と眺められてゐる。高臺を下り、早天に水も枯れ盡した廣い川の、團石磊々たる川原を渡り、南口の驛を通りぬけて、驛の北端、釐金税局の前面樹下石上に踞して、暫しと休憩したのは午前八時二十分であつた。馬市口より南口に至る路程二十五清里。

南口驛は戸數三百戸あまり、八達嶺を越え、張家口を経て蒙古地方に通ずる要路に當れば、貨物運搬の爲めに往復する駱駝、驢馬絡繹として、群を爲し、駱駝の如きは時に數百一隊を爲して、駝鈴數清里に相應することがある。時に或は又

三四頭の驛馬に率かせた荷車が、此の山間の峽路を行步甚だ艱みがちに通ふてゐるものもある。數百の羊群を追ふて、北方より此方に向ひ來るものもある。多分北京に行いて、肉舖に其の骨を曝すべき運命を荷負ふた羊共であらう。此の難路に馬車を驅り行く旅人もある。馬上の旅客もある。驢背に跨れる行人もある。最も安泰な乗物と思はるゝは驛驕といふものである。前後に驛馬を附けて、轎子を擔はしむるのである。一日三圓内外で雇ふことが出来るそうであるが、之も時々途上に逢着することがある。南口驛は順天府の昌平州に屬してゐる。

次第々々に來着せる諸氏と共に、税局に湯を求め、お客様御坐んなれと透かさず賣りに來た大饅頭や赤大根を買つて、渴と飢とを醫しつゝ、遅くれた四人の同行を待つてゐた。すると例の通り、一行を見物の支那人に取巻かれた。中に税局の小使もしくは小官吏らしい若い男が、少しばかり日本語を知つてゐるのがあつて、面白くも愉快に感じた。焼餅などを賣りに來てゐる少年の中には、回々教徒もあるが、彼等は必ず其の携帯の箱に回々といふことを書き記してゐる。



騎驢

南口驛より居庸關に至る二十清里、居庸關より八達嶺頭の長城に至る二十五清里、合せて四十五清里である。今日は尙ほ之より八達嶺に行いて長城を見、更に引返して居庸關に一泊するの豫定なるが、昨夜來の疲れた足に、更に七十清里を健歩せんこと、中々に覺束なげである。われも朝來瘠我慢をして先登はしてゐるものゝ、心潜かに驢馬にでも乗りたいたのである。中には抜け駆けして既に驢馬を雇ふてゐる人々もある。では一層長城まで驢を列ねて行くことに爲様と、一同驢を準備して、なほ遅くれた三四の人々を待つてゐるけれど、容易に其の姿が見えない。如何にしたのであらうと、殆んど一時間程待つてゐると、鈴の音彼方に聞えて、やう／＼四氏が驢を驅つて來た。われ等も共に驢馬に飛乗つて、一隊轡を並べ、足掻を早めて、さて出發。

峽間の風色

重嶺疊嶂の間を、一溪水が流れてゐる。山には僅かに尺にも足らぬ灌木の疎らに生じてゐるばかりで、一本の松樹さへも成長してゐない。されば溪の流も些々たるもので、奔湍石に激して白雪を飛ばすが如き美景を見るときも、なく峽間の山徑とても馬車も通ふといふやうな緩勾配であるから、急瀬矢を射るが如き

奇峰秀嶺

妙觀を數ふることなく、唯だ細流の潺湲として、さゝらぎ流るゝのみである。獨り楊柳や槐樹などの、溪の彼方此方に、今正さに翠色を滴らせるが、ありて、中人家の點々眺めらるゝが、一種の趣ありと云は、いひつべきである。

此の溪に沿ふて、時に沙深く、時に小石のころ／＼とせる路を、驢背相顧みて物語りしつゝ、行くと、左右皆巖巖より成れる嶺峰のいと／＼へ峻峻なるが、進むに従つて次第に秀峻、或は斧もて劈けるが如き、或は箭の矗立せるが如き、層出疊見して、一々送迎するに暇がない。惜ひらくは、赤裸々の岩石にして、奇骨稜々人に歴し、迫らんとする、幻怪の趣はあれど、幽妙の情人の心情に滲入するが如き、幽邃の景は、更にない。

馬車の路に難めるを追ひ越し、駱駝の歩みの遅々たるを、驅け抜けて、前程を急いで行くと、前面なる峻峰の上に、城壁が見えて來た。あれが所謂萬里の長城ではないかと、N氏に聞くと、這は居庸關の城壁であつた。漸く近づいて見ると、關門の左右に跨つて、蜿蜒たる城壁、溪を互り、峰を越え、峻絶にして、殆んど攀ぢ難き處さへも、壘壁を築き成し、高峰の上、巖巖の頂、烽臺の兀として聳えたるなど、支那

居庸關の城壁



人の事業の巨大なることよと、先づ目を驚かした。此の城壁の何の時代に建築せられたのであるかは、尙ほ不明に屬する所であるが、其の所々敗壞して餘程古りてゐる所を見ると、蓋し元末明初の築造に係るものなるべしとは、何人の説も一致してゐるやうである。

十時半にして城門に入つた。何れの處の城門に於ても見るが如く、門は二重になつてゐる。門を通りぬけて少し進んで行くと、其處に又樓門がある。門とはいへど扉はなく、高さ二間餘、上方は各地城門の築造法の凡て半圓形なるに似ず、多角形を半截した形を爲してゐる。石材は凡て堅緻にして瑩澤なるものを用ゐ、門の前額并に後額には種々異様の像を彫刻し、門内の左右兩面には四天王の像を彫り、左右各々二天像の間に、各種の國語を以て陀羅尼が彫刻されてゐる。聞く所に依ると、之は漢文、梵文、西藏文、蒙古文、畏吾兒文、女直文、即ち六個國の國語であるといふことである。仰いで見ると、傾斜せる天井の左右に、各々五體の佛像が彫刻されてあつて、其の像と像との間には、又無數の小佛像が彫られてゐる。彫刻はみな半肉彫であるが、其の緻密にして而かも雄偉なる、決して平凡の手腕

樓門

居庸關

でない。蓋し此は元代の製作で、元と高大な佛塔のあつたので、今は其の基趾のみを存じてゐるのであらうといふ説もある。樓門を北に出ると直ちに居庸關の町である。其の繁榮は南口に及ばぬもの如く、其の戸數もまた南口に及ばぬらしい。此處にもまた釐金稅局があつて、荷物運搬者を苦めてゐる。

居庸關の旅

今夜宿すべき旅館を求めて、其處に荷物と馬とを殘し、然る後に長城に向はんと定めて、兎ある旅館に這入つた。昨夜のみに比べると、上等である。門を入ると、左が掌櫃的支配人、其の他番頭等の居間で、右が厨子料理番のゐる一室である。其れに續いて左右に、二棟の長屋様の建物があつて、各々客室と馬小屋とが相隣してゐる。其の建築の體裁は昨夜のと殆んど同一であるが、其の客室の如きは昨夜のやうに汚穢甚しいものではない。併し又綺麗といふことは少しもない。日本の旅籠屋でいふて見ると、田舎の極めて粗末な木賃宿にも匹敵すべく、室内の粧飾といふものは全くなく、唯だ炕の上に一枚のアンペラが布いてあるばかりである。奥の一室と右側の馬小屋の隣の一室とを借りて、二組に分れて臥る



こととした。  
さて輕装して再び驢脊に跨り、更に入達嶺に向ふて出發した。時正さに午前十一時。

鐵金局

城の北門を出ると、門の額上に居庸關の三字が刻せられてある。溪橋を右に渡つた處に、また鐵金局がある。城内城外僅かに三四町を隔て、かくも請求せらるゝ支那人の苦困繁苛實に察しやられる。

上關

兩側の重峯嶺は進むに従つて、ますます險を加へて來る。而かも道路は殆んど前と異なる所はなく、相變らずの緩勾配である。行くこと八里にして、其處に又關門がある。稱して上關といふのがある。又居庸關の三字が刻せられてある。更に行くこと七清里、懸崖路の兩側より迫つて、將に壓下し來らんとするのがある。彈琴峽といふのが即ち之れ。左の方崖の表面に五貴頭彈琴峽といふ六字の大文字が刻せられ、巖上には小さき閣を建て、佛像を安置し、自然の石を截りて階となし、攀ぢて閣上に達するやうになつてゐる。之もまた明代の建築であるそうな。

彈琴峽

八達嶺

又七清里を行くと、青龍橋といふ石橋がある。橋を渡つて以往は、路羊腸として勾配やゝ急である。上ること三清里にして、遂に入達嶺頭に達した。其處に關門があつて、所謂北門の鎖鑰なるもの即ち之れ。長城は之より左右の連山を傳ふて、蜿蜒として遠く連なつてゐるのである。時は正さに午後の一時半であつた。驢を下りて、石上に腰打かけ、暫し息を休めて待つてゐると、驢て全隊がみな到着した。

北門鎖鑰

門壁は石を以て築かれ、其の額面には北門鎖鑰の四字が刻されてある。史に傳ふる所の秦始皇が蒙恬をして北の方胡を禦ぐ爲めに築がしめたといふ彼の長城は、北方なほ數百清里の處にあつて、此處なるは明時代に築造されたといふことである。而かも延びて遙かに東西に至れば、未遂に一に合するので、此の處長城が二重になつてゐるといふ譯なのである。地は宣化府の延慶州に屬して、南口に對する北口なるものは即ち是れ。

廣潤なる平原

關門を出で、北に下れば、路遂に廣潤なる平原に達してゐるが、遙かに望めば、一帶の連山遠く東西に連なつて、中に此の原野を包んでゐる。恰かも板谷峠を



越えて前方遙かに米澤原野を望むかのやうである。  
 いふまでもなく、其の要害の堅固なる一夫道に當れば萬夫も容易に進むこと  
 の出来がたい程であるが、國政上に亂れて百姓下に泣くとき、關門を守らん忠勇  
 の民もなく、幾度か胡馬に蹂躪せられて、要害も遂に其の用をなさなかつた。城  
 壁の側に一個の古砲の半ば土に埋もれて残つてゐるのがあるが、數百年の風雨  
 にや晒されたる赤く錆びたる色に、當年守備の名残を留めて哀れにもまた嘆か  
 はしくも思はれ、轉た懐古の情を禁ずることが出来ない。  
 思ふ昔し、朔北の雄將猛卒、沙煙を馬蹄に蹴立て、彼方の平原に現はれた時、守  
 門の兵卒前を望んで、其の勢に恐れ後ろを顧みては、後援の頼み難きに心安か  
 らず、遂に旌旗を棄て、守を撤して逃げ去つたのであらうか。彼の雄將猛卒、忽ち  
 にして關門に乗り入り、八荒を呑むの氣宇を以て、至る所席を捲くがやうに中原  
 に向ふた時、至る所の山川草木、また今日の通りの風色であつたであらうか。英  
 雄の事業夢の如くに空うして、自然の風色のみ、今古變ることないのであらうか。  
 もしくは、又疾風の如くに驟起して、驚天動地の大事業を爲せる英雄の彼の一時

は歴史の四季を飾る春の花の如きものであらうか。さらば此の寒風凜冽とし  
 て、四億萬の人の心を凍結せしめたる四百餘州の冬天に、再び春を齎すべき英雄  
 の花は、再びまた咲くこと能はざるか。  
 共に城壁に攀ぢ登つて眺望を恣にしやうといふので、左方なる城壁の内側に  
 沿ふて行くこと百歩、其處に壁上に上る段階がある。穴の中を這ふが如くにして、  
 鍊瓦の段階を右に折れて登ると、直ちに壁上に出る。此の如き段階は此處のみ  
 ならず、數百歩を隔て、處々に設けられてある。壁の高さ凡そ二丈餘、其の廣き  
 壁上に於て凡そ一丈位もあらうか。凡て煉瓦を以て築き建てられたものであ  
 るが、其の大なる點に於ては、北京の城壁に及ばないこと數等である。而かも海  
 面を抜くこと二千尺なる八達嶺頭より、左右に分れて嶺より峯に亘り、谷より谿  
 を越え、曲折迂廻して、長蛇の蜿蜒たるが如く、遙かに眺められる最高峯をも越え  
 行きて、遂に其の盡くる所を知らざるが如き、其の工事の困難を排し、險危を犯し  
 て、幾多の人を勞し、幾多の錢財を費したであらうか。賞めなば大國民的の大事  
 業と稱して善からう。されど又彼の險岳峻峯の上に何の必要あつての城壁ぞ



と却て馬鹿らしくも思はれるのである。

一峯の兀として彼方に聳えたる頂きまではと山脊を傳ふて築かれた城壁の上を辿つて行くと平坦砥の如き處もあれば傾斜甚しく這ふやうにして登る處もある。其の傾斜の急なる所には段階が設けられてあるので、それを拾ふて登つて行く。壁上は一面煉瓦を敷き詰めて、數百歩毎に樓閣様の譙樓がある。敷詰めた煉瓦の合目より生ひ出てる僅か數寸の灌木に小さき白き花の咲きたる。鬼薊の色も妙なるが藤紫に咲き出でたる。其の他名も知らぬ小さき草花の、おのが色々可愛ゆらしく匂へる。四望の壯大にして茫漠たるもしくは奇岩の突兀たるを相對比して、自然の不可思議なる心が更に幽妙の情致を添へて、何とはなしに人を人間以外に誘ふやうな心地がする。

登ること十數町にして漸く頂きに達した。譙樓の窓より眺望すると誠に壯大な眺めである。北面の平野は近く眼下より起つて、遠く北方の一山脈の麓に達し、遙かに東西に延びては其末、山と共に遂に雲に入り、近くは又村落の處々に點在するさへ眺められる。更に長城の後ろに連なる重峯、疊嶺、其の雄峻に

して、豪宕なる長城も此處に至つては殆んど兒戯に類してゐるやうな心地がする。人工遂に自然に及ばないのであらうか。

山風の涼しきに肌の汗を収めて休憩すること半時間、また壁上をぼつりくと歩行いて、最初上つた處の譙樓に歸り、また休憩すること少時、齎して來た水を飲み、饅頭を食つて、更に元氣を得、午後三時半にして徒歩歸路に就いた。驢馬屋には賃金を與へて、先きに既に歸したのであつた。凡そ此の邊の驢馬屋なるもの外人と見れば必ず不當の賃金を食ふ。で、此方にて相當と思ふ所のものを與ふれば、それで宜しいのである。

眺望の大懐古の感に打たれたればにや、歸路は勞れた足も勇ましく辿られ前きの彈琴峽にて小憩、六時二十分居庸關の旅店に歸り着いた。勇氣に任かせて歩行劇甚なりし爲めか、疲勞も甚しく、左の足裏をさへ踏み痛め、筋肉も痛みて、足を曲ぐるのが大儀であつた。

沙塵に塗れた衣裳を拂ひ汚ない給仕人が汲んで來た湯にて顔を洗ひ、廣庭の一隅に置かれた卓子を圍み、椅子に腰を息めて、けふの旅行の物語などしつゝ、店



内の様子を見つめて見ると、他にも五六の支那人のお客様がある。これは何れへか旅行のお役人様を送りの爲めに出来た御供廻であるらしい。中に二人の騎兵と一人の歩兵がある。騎兵は二人共に齡既に四十歳を過ぎたらしい、其の戸の前に腰かけて長煙管もて煙草を喫かしなどする風采からしてが物の用にも立ち難く見へる。兵卒は體格の逞しい大の男であるが、そしてまた若いのであるが、其の風采の下卑た點に於ては、騎兵と甲乙はないのである。夕食を炊かんとにや、囊の中より米と豆とを量り出して、厨子の方へ持つていつた。豆粥をつくるとのことである。凡そ支那の旅店に於ては旅店よりして食事を供するものと定まつてはをらす、みな客の依頼に應じて食物を料理するのである。そして間代を支拂ひ、給仕人即ち料理方にはお祝儀を與へるのである。日本の木賃宿と能く其の組織が似てゐる。

やがてすると命じてあつた晩飯の鍋が卓子の上に持ち運ばれた。見よ、腰より下に唯だ褲子を穿いて、上は赤裸々の給仕の男が細かく切つた大根の漬物を、手掴みにして小皿の上に分配し、呉れるのを。立派な料理店に於ても、もしく

は又貴人にして、手掴みながら食物を人に與へるのは支那人の習慣として敢て怪まない處であるが、此の色黒くて胸のあたり垢附いた男が手掴みは如何にして、有難くは思はれなかつた。鍋もまた其の味ひ寧ろ不味くて、唯だ餓を醫する爲めに、勤めて一杯を食つた。但し某氏の如きは美しい、と頻りに舌鼓を打つて、并大の茶碗もて三杯までも傾けつくした。

食事了つて不斗仰いで見ると、陰曆四日の弦月山の端に懸つて美人の眉を引けるが如く、纖麗愛すべき姿を見せて、しばし吾等が旅情を慰めて呉れた。

疲れたればとて、八時半おのく臥床に入つた。

三十一日午前四時に起き急ぎ出發の用意をして、四時半には早や、一隊旅館の門を出た。朝風の身に涼しくて心氣爽快ではあれど、きのふ左足を痛めたのが今朝なほ癒えず、足を地に踏みつくる度びに疼痛を覺えて、行步甚だ苦しく、兎もすれば一隊の殿とならんとす。山と水とは昨日に異ならねば、殊更に見んとせす。絡繹として行通ふ驢馬や駱駝の數をかぞへなどして、痛苦の感を殺がんと勤めた。駱駝は其の鼻の穴を貫ける小き繩もて、前なる駱駝の鞍に結び付け



られ、四五頭乃至七八頭一小隊を成し、一小隊をば一人の男が導いてゐる。其の首に着けた鐘の形をなせる大鈴はのさりと歩む足音に連れて、からんころんと一種の調子に鳴る。蒙古内地の沙漠を横ぎる時もまた斯うであらうかと、蒙古旅行の有様が稍々想像される。

朝飯は路傍の茶店にて豆粥を一椀。

山口驛よりは路を左に折れて、居庸に續く連山の裾野を横ぎつた。明の十三陵を見んが爲めである。

いとさへ勞れた身の足の痛みに堪へかねて、驢背に跨りたくはあれど、非常に疲れたらしき足振の某々二三子さへも勤めて歩行してゐるものをわれ獨り驢に騎らんやはと、齒を喰ひ縛つて歩行した。けれど心の思ふ如くに足は歩行かず、遂に一隊の前方に見えずなるまで遅くれて了つた。

左は山近く、攀へ、右は北京に至る平原の高臺の上の野中の小徑、廣くはなけれど塵は立たず、眺望廣濶にして、眸を放つに宜しく、足さへ痛まずば獨りてくくと歩行くに面白き路と思へど、思ふに任せぬは人の身。

山陵に向ふ

高臺の徑を行き盡すと、水はなくて唯だ沙石のみ白く廣く眺めらるゝ河を隔て、前面の木立の中に一村がある。あの森の木蔭に一憩しやうと思つて、河原を渡つて、勉つて急いで行くと、一隊も村の入口の樹蔭に憩ふて、おくれた余を待つてゐたのであつた。

一村を擧げて見物

若きもの若いたるもの女、小供に至るまで、殆んど一村を擧げて來たかと思ふ程群が一つ一行を取巻いてゐた。かゝる僻村には外人の珍らしとや。特に彼等の眼には始めてや眺むらん、一行の中に異彩を放てる、N夫人の服装は深く、彼等を驚かしたらしく、婆様妻君及び娘達の眼は最も多く夫人の上に注がれてあつた。

利には機敏なる支那人

利には機敏なる支那人のこと、て早くも例の赤大根や、焼餅などを賣りに來てゐる。一隊の中の或ものが鶏卵はないかと聞くと、今までは差控へて、少し離れて見物したゐた娘や妻君までが、急に家に歸つて行つて、忽ちにして五つ六つ乃至十二三個の鶏卵を手にして賣りに來た。一個の價小は四厘、大は五厘といふ廉い價であるので、瞬く間に賣れて仕舞つた。

北清見聞録



やがて出發村を出で、野中の徑みちを行く。柿、林、桃、林、林、檜、林、杏、林、なとか、徑に近く連つてゐる。夏より秋冬にかけて、北京の町に見る所の菓實の幾分は、蓋し此の地方より出るものと察せられる。麥、大豆の畑も能く耕耘されてあるが、麥はあまり善くは成長してゐない。一つは此頃の旱天の故でもあらうか。足の痛みは更に甚しく、忽ちにして又た一行におくれた。獨りとはぼくと歩んで行くと、某々四氏が一樹の蔭に休んでゐた。共に皆な余と感を同うするものらしい。一支那人を捕へて、此の邊に、十三陵まで吾等を運んでくれる驢馬を雇ふことは出来まいかと聞いてゐる所であつた。さらば余も共にと暫し休憩して更に出發、足引摺るやうにして、やう／＼兎ある一村に着いた。此處にて驢を雇ふこと、仕様やうではないかと、共にまた足を止めて休憩した。

忽ちにしてまた村人が、其處に群集して來た。若いたる若き、壯なる、少なる、男女見世物でも見るかのやう余等を取圍んだ。そして嬬や娘は少し差控へて見物してゐる。湯を吞まして呉れと頼むと、其内の一人が急いで行つて、例の汚ない器に汲んで、大きな茶碗と共に持つて來てくれた。蓋し、彼等が旅人を懇ろに

するといふ考より出たのではなく、禮金を目的の、彼等が拜金の思念を満足させたいと利己心からである。何處に行つても利には抜け目のない支那人ではある。

此處かう山陵まで何里あるかと聞くと、更に十五清里あるといふ。騎驢！驢！驢！驢に騎らずんば前途甚だ覺束なきかの思ひがする。即ち群集の支那人に向つて、驢を十三陵まで驅つて呉れと頼むと、或ものは承諾し、或ものは不承知で、或者は驢が沒有といひ、或ものは有といふ。何卒ど、か是非出すやうに仕てくれと頼むと、彼等の仲間の評議が區々として容易に定まらない。但し、賃金を受取るこゝが出来らるであらうか、もしくは又僅かの賃金で以て追拂おごはれは仕まいかとの憂があるのである。思ふに、外人にして此の非行をなしたものがあつたのであるまいか。説くにわが輩決して亂暴を働くものでないといふことを以てするけれど、彼等は容易に信じない。何時までも愚圖々々として、小田原評議をなしてゐる。そこで、彼等と談じて、預め山陵までの賃金を定め、望みとあるならば前金を與れるといつた。此に於てやう／＼安心したものらしく、家に歸つて驢



の用意をしてくると、三三のものが立去つた。待つこと久うして、やうく五頭の驢馬の準備が出来た。香氣な支那人を相手にして殆んど二時間の時間を費した。

さて共に驢背に跨ると、二人の驢馬追が附いて来た。一人の丈の高いのは雙であつた。人民は尙ほ其處に立つてゐて、吾等の一行をお見送りの様である。村中を通つて行くと、美しい娘さんも、三四の婦人と共に見送つて呉れたのであつた。

村を出ると、徑の右は麥畑や大豆畑で、左は菓樹が一帶の林を爲してゐる。菓樹林の彼方は、山嶺重疊して遠く連り、畑地の此方は饅頭のやうな小山が幾つとなく起伏してゐる。段々進んで行くと、其處に方一里餘の平地が、後ろに群山を控へ、左右に丘陵を並べ、前面僅かに活路を開いて、直隸の平原に連なつてゐる。大明十三代の皇陵は、其の後に連なる群山の麓の岡の上に安んぜられ、進むに従つて、彼方此方の山の根林の中より、朱壁金瓦が燦然として眺められるのである。皇陵は各處に散在して、其數凡て十三、十三陵と稱する所以である。参拜者は大

大明十三代の皇陵

野中の巨人怪物

水なき河

文廟

概、成祖文皇帝の山陵にのみ詣で、他の十二陵を見ない。但し總ての山陵を見盡すには、數日の日子を要し、而かも文皇帝の山陵は中に就て最も大之を見れば、他は略ぼ観察することが出来るからである。われ等もまた普通参拜者の如く、各山陵の中央なる成祖文皇帝の靈廟として進んだ。

少し進むと、右手の野中に、遙かに巨人怪物の立像のやうなもの、數多列を成してゐるのが眺められ、更に又巨大の樓門が幾つとなく眼に入つてくる。こは各山陵の正面より入る本道で、われ等は今その傍路より進んでゐるのである。更に進んで行くと、此の平原を横ぎつて、一道の河流が貫ぬいてゐる。打續く早天なればか、今は一滴の水も流れてゐない。廣い河原の歩むに、賑ひ沙の上、右の上の路なき路に驢を驅つて向岸に上ると、文廟は近く、彼方の岡の上に見えてゐる。野中の路を行き盡し、美しく大きな板石を敷き並べて、水なき谷川に架けた石橋のところ、く壊れてゐるのを渡り、そしてだらく坂を上つて行くと、徑の左岡の斜面は、見渡すばかり廣い菓樹園である。のぼりく、菓樹の盡くる所が、即ち山陵で、丹壁の高扉、廣く皇陵を圍み、正面の大門は、開かれて、傍らの小門が



開いてゐる。先着の諸氏はなほ門内には入らず此方の大樹の蔭に休憩して、余等の來着を待つてゐた。近きあたりには支那人の村落でもあるのか、その家は見えないが、例の通り老若壯幼諸氏を取圍んでゐた。

暫く休憩した後、山陵を觀んとて、本門の傍らなる小門を入つた。松や柏の古木の物ふりたる景色、何となく崇高の感がある。門を入つて右側に碑亭がある。亭内に入つて見ると、巨大の石碑が建てられて、碑の表面には、前朝の山陵を保護する旨を記せる順治十六年の上諭が刻せられてある。蓋し之は順治帝が漢人を懐柔せんが爲めの政策であつたと思はれる。裏面には又乾隆五十年帝親ら山陵に謁せられたる親筆の八韻詩が刻せられてあるが、詩句の意は、國家の誓を討じて、生民を吊ふといふのである。なほ又右方の側面には、嘉慶九年の天子謁陵の詩が刻せられてあるが、之は乾隆帝の韻に次せられたもので、同じく御筆である。

碑亭を出で前に進むと、大きな樓門がある。西洋人が五六、之も見物に出掛けて來たのであらう、樓門内に臥床を設け、蚊帳を引いて晝寢をしてゐる。傍らの

碑亭

樓門

卓子の上にはビール瓶や玻璃杯などが、御主人の眠を守つてゐるかのやう。樓門とはいへ、其建築は大にして麗而かも古りたる儘に修繕も行届かぬものらしく、處々敗壞の痕が認められ、屋上の黄琉璃の瓦の、彼方此方に破れ落ちたものもある。山陵内一面の庭の面も、草の生ずるに任かせて掃ふものもなく、陵内凡て荒涼たる有機、人生榮枯の理りを面あたり見るかの思ひがして、懐古の感泉の如くに湧き、坐る涙が催されるのである。聞く所に依ると守門の番人がゐるさうではあるが、唯だ徒らに參詣人より金を食ふことを勤めて、山陵は唯その荒るゝに任かせてゐるのである。清朝にしても、昔しは漢人の意を迎へて、山陵の保護を爲し、修繕を加へたこともあつたが、今はそれ等の考に思ひ及ぶ餘裕もなく、此の壯麗の山陵も、看すく敗壞に歸して了うのではあるまいか。

樓門を通つてすこし進むと、東本願寺の御堂を仰ぐがやうな巨大の建築がある。それが即ち享殿で、もと皇靈を迎へてお祭りをした處である。殿に上る石階并に殿を廻つてゐる欄干は純白の大理石を用ゐ、そして其の欄干は凡て三重になつて、その彫刻は美を盡し麗を極めてゐる。殿の間には、凡そ七十ヤード十

享殿



本の圓柱を列ね、奥行は凡そ三十ヤード、六本の圓柱を用ゐてある。圓柱總計六十本、試みに手を以て圓柱の大きさを計つて見ると、その周が二圍半、高さは凡そ五間半あるといふことである。そして此の圓柱は皆な木理堅緻、黒檀などに似たやうな木で、凡て一柱一木決して合成のものでないものである。其の材はみな雲南縮旬地方より運搬し來れるものであるさうな。

享殿の後ろの石階を下つて、石路を進んで行くと、左右の庭には松や榊などが密生して、皇陵の壯嚴を添へてゐる。前には又壁門があつて、門を通りぬけると、檜樹の密生せる山陵がすぐ前に現はれて來る。山陵の高さは百五十尺にして、其の周圍は半英里強あるとのこと。山陵を圍める壘壁の正面の一閣下より仰ぐと二層樓を爲して高く聳えてゐる。下層は煉瓦を以て築き建てられ、一道の通道丁字形をなして、左右より上層に上ることの出來るやうになつてゐる。上層には四面洞開せる樓閣がある。四望廣濶頗る風致がある。樓上の中央に巨大なる大理石の石碑がある。高さ凡そ三間幅五尺、表面に『大明成祖文皇帝元陵』と刻せられてある。大明は篆書、殘る七字は楷書。碑はもと朱を以て塗られて

あつたのであるが、今は剝落して僅かに其の痕跡を存するのみである。石碑の立てる此の一室の兩側の壁上には、紀念の心か、參拜者の姓名が、或は筆もて、或は鉛筆もて、或は小刀もて、殆んど隙間もなきまで記されてある。其の内殊に日本人の姓名が多いが、支那人、西洋人の中にも交つてゐる。樓上に暫し休憩して、過ぎし昔の事など物語してゐると、涼風何の心か、颯として樹枝を鳴らし、人の袂を拂ふて吹いて來る。此處に昔し吊ふ思を寄せつゝ、晝飯を喫することにしやうと、共に南口驛にて買つた茅卷、山陵の門内にて買つた落花生や蠶豆などを食つた。

さて樓を下つて、山陵の園内を徘徊し、紀念の爲めにとて、黃瑠璃屋瓦の破れ落ちたのを拾ひ、遂に前門を出で、出發の準備をなし、一隊徐々として昌平洲さして歸路に向ふた。驢馬は此處より歸したれば、また歩行のわが左足は踏み着くるたびに痛みを感じるが故に、傘を杖に跛引きつゝ、僅かに辿り行くので、遂にまた一行にかくれて了つた。野中の路をたどりたどつて、河原に差掛ると、河に架けた石橋の半ば以て壞れたのがある。但し往路に渡つた處よりも五六町の下



流である。水に破られないで、尙殘つてゐる橋の石材の、大にして且つ質の美なるを見ると、此處にも明人の事業の偉大であつたのが忍ばるゝ。先行の諸氏は壞れた橋の石柱の蔭に憩ふて余を待つてゐた。我は諸氏の好意を謝し、一足にても前へと休みもせず、そのまゝ、ぼつりくと前途を辿つた。されどまた忽ちにして遅れて了つた。

一面の平地

山をもて圍める此の一面の平地、河原を除くの外は能く開墾せられて、麥、高粱、大豆などの植付けられた畑地である。農夫は三々五々、彼方に此方に耕耘の業に勤しみ、野に放たれた驢馬の草を喰みつゝ、遊んでゐるのが、また興趣ある眺めである。

石門

山陵を距ること凡そ一里位と思はるゝ所に石門がある。其の門柱の彫刻佳にして麗。石門を距ること凡そ二十間にして、文臣の石像が三對六個路を夾んで相對して立つてゐる。一對より次の一對に至る交互の距離もまた凡そ二十間ばかりである。像は實物の凡そ三倍大、その彫刻もまた決して凡手でない。

文臣の石像

武臣の石像

次は武臣の石像、二對四個、その交互の距離、その大さ、みな前の文臣のと同じであ

馬 麒麟 象 獅 豹 獅子

る。更に十間ばかりを進んで行くと馬の石像が二個、また路を夾んで立つてゐる。實物に二倍以上の大さである。次は坐馬像、次は麒麟の立てる、おなじく坐せる、象の立てる、坐せる、駱駝の立てる、坐せる、獅子の立てる、坐せる、豹の立てる、坐せる、みな實物より二倍大以上の石像にして、その交互の距離も前と同じく、彫刻もまた各々見るべき處がある。野中の一直線の路に、巨像の幾百年の風雨にや晒されけん、象の牙など落ちたものもあるが、昔の形見、今に残りて、之も明代の盛時を忍ばする思の種子である。

一大碑亭

少し進むと、一大碑亭がある。亭の中央に大理石の一大石碑があつて、それを背に負へる龜の長さ一丈二尺、碑の高さ之に叶ふ。その大以て知るべきである。

石柱

こは洪熙帝が建てられた『成祖神功聖德之碑』なるものである。但し洪熙帝が明代の徳を頌し、末代に及び、遂に取つて代るの止むを得ざりしとを公告したものである。碑亭を圍んで六角の石柱二個、圓石柱四個、高く立つてゐる。共に大理石で巧みに龍紋などを彫刻してある。更に數百歩をすゝむと、一段高き所に樓門があるが、屋瓦の上に、老いたる樹木の三四株、葉も緑なのが自然に植わつてゐる。



る。その古朽せる状態の以て想像すべきにあらずや。稱して大紅門といふとぞ。

大紅門を過ぎ行くこと少時にして石橋を渡ると其處に巨大の牌樓がある。但し山陵へ參詣の本道に當る第一門である。幅九丈高さ五丈而して五架六柱唯だ之れ一個巨大の大理石を剛り抜いて刻み成したものである。遠く望んで見ると其の屋蓋柱楹みな個々の石より合構せられたかのやうであるが近づいて仔細に點檢すると全體唯だ一石より出來たものに相違ないのである。

其の如何にして此處まで持運ばれたかは殆んど想像の外で唯だ驚嘆の外はないのである。わが輩の觀る所を以てすると其の時間と努力とを費したる點に於ては此れ或は萬里の長城に及ばざるべし。而かも其の經營の苦心慘憺たりし點に於ては彼れ決して此れに優る所はない。歐米人の見るものも皆な舌を卷いて其の工巧偉大なるに驚くといふことである。今の清人にして此の工と此の大との半ばを有つてゐたならば外人の辱めを受くる斯の如く甚しくはなかつたらうものを。見よ清代の事業として見るべきもの何の處にあるか。其

の大事業として世界に誇示する所のものは皆な前代の借物である。われ思ふ支那の文明を退化せしめたもの未だ清朝より甚しいものはあるまい。清朝の大事業として見るべきものは唯だ辮髮を結ぶこと、鴉片を吸ふことを支那人民に教へたばかりである。

氣焔は吐けど足には元氣といふものが全くなくやうく荷を負ふたN氏の馬の荷の上に騎つて昌平州城の城門に入り、ポイと共に殿して同々の旅店の億徳店といふのに疲れた身を投じたのは午後の六時四十分であつた。

州城は随分大きなものではあるが外面より見た處處々破壊の點があつてもそれを修繕しやうともせぬものらしく城内また空地半ばを占めて城市甚だ寂寥たるものである。

旅店の様子は前のと大同小異異なる所は唯だ回々客店と白壁の上に記されてあること、決して豚肉を食ふべからざることである。回教徒は猶太教徒と同じく豚を汚れたものとして決して其の肉を食はない。聞く所に依ると北京以北回教徒にして旅店を営むもの極めて多いことである。今夜もまた



温飩を食つて腹を充たし、食後暫く共に快談し、一同寢に就いたのは九時過ぎる頃であつた。

敗軍の弱卒

明けて六月一日。午前四時半旅店を出發した。敗軍の弱卒は、諸氏と共に脚力の雄を争ふの勇氣もなく、驢を雇ふて一畝北京城に至らんと思ひを定め、將軍N氏の許容をも得た。蓋し五六子の中には大分疲れたものもあるらしく、中心騎驢を切望してゐるのであるが、未だ將軍の認許を得ないので、瘠我慢の駒に鞭打つて、その足取甚だ覺束なげに眺められ、われ獨り驢背に跨るのも、甚以て氣の毒な思ひもするのである。が、そんな心配をしてゐた日には、われは遂に、父母に受けた完全の足を不具かたわにせざる可からず、諸君希くは余をして不孝の身となることを免れしめたまへと、身勝手な理屈を心でいふて、驢を雇はうとするけれど、其處らあたりには一匹もゐない。そして遂に昌平州の城門を西へと出て仕舞つた。

馬車

忽ち一人の客を乗せた馬車が後方から馳つて來て、余に乗車を勧める。聞くと、人より頼まれて、北京まで客を迎へに行く馬車で、乗つてゐるお客様は、それに

破れたる道路

便乗してゐるのであつた。屈強のもの御座んなれ、天の與ふる所乗らすんばある可からずと、即ち直ちに飛び乗つて先のお客様が席を譲られるに任かせ、余は奥の方にと坐つた。片言交りの支那語を以て、色々と問ひ試みつゝ、進んで行くとき、破れたる道路よ、馬車の動揺といつたら、實に話すに言葉もない程甚しいのである。眼を放たず常に路の難易を見、左右の手を以て絶えず、双侧の横木を支ふるに非ずんば、忽ち横に頭を打撃さるゝの恐がある。而かも尙ほ高低凸凹の甚しき道路のこと、いて、身は常に車中に躍つてゐる。時に道横さまに傾斜して、車も爲めに殆んど四十五度の角度に傾き、あはや顛覆はしないかと、實に心を塞うすることがある。河流に橋なくありても、また破壊馬車を驅る能はざる所に至ると、ざんぶとばかり馬を水の中に追ひ込むのである。やがて水が車中に侵入せんとする。或は又畑の中の作物を踏躪つて、其處に大道が開かれてある。馬蹄に蹴立つる沙煙雲のやうである。沙河驛まで二十清里、やう／＼に我慢して、北京までもと車夫が勤むるを辭し、賃金を取らして遂に下車した。

橋畔の茶店に暫く休憩して、一隊の遅くれたものを待ち合はした。やがて殘



るものなく到着して、共に息を繼ぐこと時餘。今はとて更に前途に向ふ。余は獨り驢背に跨つて、わが學社まで六十餘清里急ぎに急いで駈け戻つた。學社に歸り着けば正さに午後一時。三時に近き頃、N夫人輿にて到着。一隊の凡て無事にて安着したのは、早や七時も過ぎてゐた頃であつた。

### 支那

一個の疑問

支那に國家の存在を認むることを得べきか。之れ一個の疑問なり。其の國土の大なるを見、その人民の衆多なるを見るときは、居然として一個の大國、彼の支那帝國なるものは、一個解釋すべからざるの怪物に似たり。而かも之れ外見のみ。もし夫れその中に入つて、その國を見、その社會を視、その人民を観るときは、此の支那問題なる疑問は、忽ちにして氷釋せん。而して其の枯尾花を見て、幽靈となしたるの愚を悟らずんばあらず。吾輩をして支那亡國論を作らしめよ。支那に國家なし、唯だ四億の個人あるのみ、唯だ四千年來の習慣あるのみ。よしや國家に似たる一個の團體、今その名を清といふものありと雖も、それは朽ちた

幽靈と見たる枯尾花  
支那亡國論  
支那に國家なし

る繩をもて束ねたる、一把の稻束の野に委棄せられたるに異ならず。その結合の力は極めて軟弱にして、その統一的の精神も亦極めて微薄なり。その繩を絶たんは、一指の力之を能くすべし、之を竊んでわが有となすも、また一擧手の勞のみ。而かも人の能く之を爲すなきは何ぞや。内にしては其の人なく、外にしては他の指彈を恐れて、涎を流しながらも、之を敢てするものなきのみ。請ふ、吾輩をして更に之を詳論せしめよ。

物先づ腐れて蟲之に生ず

物先づ腐れて蟲之に生ず。清國が今日の危機を成せるは、その内より腐朽せるに基きて、その外より來る打撃に依るに非るなり。その累卵の危き、他の一撃を待たずして、既に自から腐敗しつゝあるなり。東北西に手を擴げて、之を一握せんとする露國なきも、東方に立脚地を定めて、山東の大半島を割有せんとする獨逸なきも、中部以南の沃野千里、その富を竊取せんとする英佛なきも、清國は早晩亡滅を免れざるなり。然り、精密なる國家の定義を以てすれば、今日に於て既に清國なきなり。唯だ舊慣固結して、神經遲鈍、利己の念盛にして、腐敗壞亂せる四億の人民あるのみ。



利得の念盛なり

人は云ふ支那人は勤勉にして倦まず節慾にして飲食に耽らず堅忍にして能く事に耐へ商賈に敏にして信用を重んじ團結心に富みて能く共同の事業を爲すことを得と。言者の言はみな事實なり。而かも其の外皮を擯刺してその真相を見よ。その利得の念の盛にして其の思想の野鄙吝嗇なること廣き世界に於てまた支那人に及ぶものなからん。之れ皆に彼の商賈のみ然るに非ず彼の労働者のみ然るに非ず高位大官の者と雖もまた皆な然り。即ち支那全體を通ずる國民の性格なり氣風なり。わが輩は彼等が血液の何故に銅色ならざるかを怪む何故に銀色ならざるかを怪む而してまた何故に黄金色ならざるかを怪む。されば彼等が勤勉なるは利を得んが爲めなり彼等が堅忍なるも唯だ利慾の爲めなり彼等が節慾なるは金圓を浪費せんことを恐れてなり商賈に敏なるは利に忠なるが故なり信用を重んじ團結心に富めるもまた皆な算盤玉より割り出したる利益心の發展に外ならざるなり。

支那人と相對して試みに會談せよ。貴君が帽子の價幾何洋服の價何程靴の價如何曰く何曰く何と物の價格を問はるゝの五月蠅きに耐へざらん。吾が國

金錢なる思想の深く浸染せる實證

民の氣風よりすれば斯の如きはその失禮とし恥とする所なり。而かも支那に於ては然らず中等社會の紳士なほ然るに非ずや。之れ支那人の頭腦に金錢なる思想の深く浸染せる實證にあらずや。

金錢の爲め苦痛を忍ぶ

彼の苦力なるものを見よ彼の車夫なるものを見よまた彼の諸般の労働に従事するものを見よ。敝衣蓬髮惡食を喫し淤泥を被つて毫も意とする所なく能く苦艱を忍びて労働するは唯だ數個の銅錢を得んが爲めなり。彼等の錢を得んが爲めに非常の苦痛を忍ぶや實に驚くべきものあり。もし人あり彼等に向つて汝の頭を擲らしめよわれ數個の銅錢を與へんといはば彼等は喜んでその頭を差出すなり。更にまた俸を走らせて某處に行きその賃金を拂はんにその與ふる所の多少に係らず彼の車夫なるものは必ず不足を訴ふ。怒つてその頭に一鞭を加ふれば漸く唯々として退くのみ。彼の大工左官の類を雇ふて之に仕事を命せよ。嚴しく之を監督して指揮使役するに非ざれば彼等は毫も働かず一日の仕事を二日又は三日に延して唯だその賃金を食らんとはするなり。されば彼等の勤勉労働に耐ゆるはなほ牛馬の如し。之を督勵し之を鞭撻する



に非れば、毫も勤勉なる處なきなり、毫も働く處なきなり。  
 山東直隸盛京の農民は、露國及びわが國より輸入する昆布の得意者なり。而して比較的上等なる日本産のものよりも品質粗悪にして價格の低廉なる露國産の方、賣行最も宜しいといふは、彼等が如何に儉吝なるかを知るべきに非ずや。而して山東の農民の如きは、その最も甚しき者なり。聞く、山東は地味蔬菜の栽培に適して、年々地方に輸出するもの實に巨額に上ると。然るに山東の農民は自から作る所の野菜を食せず、遠く外國より輸入せる昆布を喫して副食物となすといふ。蓋し野菜は之を養るに鹽醬油等を要し、且つ大にその數量を減すれども昆布は然らず、且つ數日の貯藏に堪へて、大にその手数を省くことを得ればなり。山東は支那に於て、人口の最も稠密なる所、隨つてその生計の困難なるにも依るべしと雖も、彼等が儉吝の情また憫むべからずや。  
 支那の官吏が賄賂を貪り、租税を私することは、人のみな知る所なり。之れその薄給なるに依るといふと雖も、彼等の性質に於て既に利慾心あり、盜心あり、之を制裁して、その弊風を一掃することは、蓋し到底爲し難きの事に屬せん。何と

なれば、彼等は既にその生活に些の困難を感せざるのみか、奢侈を極むるまでに、人民の膏血を絞り取りたる上に、更に金錢を貪りて、毫も飽くことを知らざるなり。聞く、袁世凱のその地位を危うせんとするの懼れあるや、時の首相榮祿に銀六萬元を贈りて、その鞏固ならんことを求め、慶親王の如きも最も賄賂を愛好するの人なり。榮祿の死するや、家に八百萬兩の餘財ありて、現にその五百萬兩は露清銀行に預けあり、蓋しては北清戰役以來僅かに二三年にして貯へ得たるものなりとぞ。榮祿はもと卑賤の出、その貨を好むは當然なりとも云ひつべし。慶親王が皇族たるの身を以て、一國の重きを負擔しながら、なほ此の事ありと聞くに至つては、實に言語同斷の極といはざる可からず。而かも之れ支那人の特質なりといは、毫も怪むに足らざるなり。

支那に、民地にもあらず、官有にもあらず、所有者の不定なる土地あり。而かもその不定なるは所有者なきに非ずして、地券なきが故に不定なるなり。現に所有者ありて、或は自から耕作し、或は人に耕作せしめつゝあるも、政府は地券なきが故に之に課税すること能はず、その自由に任かせつゝあるなり。つまるところは、



人民の側には確定せる所有者あるも、政府の側に於てその地所あることを知らず、その所有者の何人なるやを知らず、之を放擲して顧みざるなり。一たび聞かば不思議の思を爲すべしと雖も、毫も怪むに足らざるなり。蓋し内國の騒亂又は外國との戦争等ありて、混雜にまぎれ、一地方もしくは一部の地券臺帳を紛失することあらんか、政府は官吏を派して、之が調査整理を爲さしむ。官吏命を受けて、その地方に出張すれば、特更に時日を遷延して、旅費日當を貪り、官金を浪費し、土地調査の費用は、數十年の地租を以てするも、之を償ふこと能はざるに至る。是を以て、政府は遂に之を放擲して顧みざるなり。支那官吏の貪慾にして、公義の心なき斯の如くなるも、毫も之を制裁するの道なきは、大官小官みな同じ心に、して、また之を如何ともすること能はざるのみ。

大官小官の  
心同じ貪慾

更に一例

更に一例を擧げて、支那官吏の貪慾なるを證せんか。此處に官衙其他公共の建物の壞頽せるものありて、一支那官吏に向ひ、外人の之が修繕を勸むるものありとせよ。彼は甚だ之を憚びざるべし。されど、説くに全然改築すべきことを以てすれば、彼は欣然として之に従はん。之れその故何ぞや。蓋し修繕には官

金を支出すること少くして、己が懐の暖まることも自から少なく、改築には多くの官金を支出するを以て、その利得も従つてまた多きが故なりといふ。其の他砲臺の建築、大砲の備付、軍艦の購入等、苟も官金を支出するの仕事には、必ず曖昧なる、而かも巨額なるコンミッションの附隨せるものありて、政府損、官吏得となるなり。之れわが輩に於ては實に驚くべきことなりと雖も、支那に於ては通常の事にして敢て怪むに足らざるなり。

支那官吏社  
會の痼疾

賄賂の公行、官金の私消、因襲の久しき既に、支那官吏社會の痼疾となりて、之を改むることは、逆も爲し難からん。たとひ嚴酷なる刑罰のありて、之が制裁を爲すが如くなるも、それは唯だ表面のことにして、毫も實際に適用せらるゝことなく、今日否な今後とも、殆んど黙許の有様なり。もし嚴密に支那官吏の收賄罪、官金私消罪を糺明せば、支那全國を擧げて、みな其の官を失ひ、刑法に觸れざるを得ざるに至らん。稀には收賄もしくは官金横取の故を以て、刑に處せらるゝものありと雖も、それは極めて不埒なる官吏にして、貪慾飽くことなきの、甚しきもの、而かもまた吝嗇にして、其の利を他の官吏に分つことを爲さざりしものに過ぎず。



一種の受負  
仕事

有利の官吏

支那の官吏は政府に對して一種の受負仕事を爲しつゝあるなり。而かもその仕事は勞少なくして利極めて多きものなり。彼の所謂讀書人なる一階級が終生兀々として考試に及第せんことを求むるも唯だ此の有利の官吏たらんが爲めに外ならず。北清戰役の後各國公使の談判に依りて科擧の法は既に廢せられたりと思ふこと勿れ。彼等は唯だ北京に於てのみ試験を爲すことを得ざるものと解釋して、去年の秋は擧人の試験を、今年の春は進士の試験を、河南開封府に於て執行したり。清國政府が條約面の文字を得手勝手に解釋して、正當に之が履行を爲さざるは問はずもがな。蓋し清國人民に取りて、科擧の法は實に何よりも有難きもの、今遽かに之を廢せば、如何なる暴動を爲すやも計られず。何となれば、科擧の法は彼等が依て以て有利の仕事に有附く階梯にして、之なければ他に安樂にして金儲けを爲すの道なければなり。今や北京大學を始めとして、諸種の學校追々に各地方に設立せられ、もしくは設立せられんとしつゝあるも、それは尙ほ極めて少數のものにして、未だ多數の讀書人を收容し、彼等に考試に代ゆべき前途の好望を與ふるに足らざるなり。

學問に熱心  
なる讀書人

わが輩は日本に在りて曾て聞きぬ支那の所謂讀書人なるものは極めて學問に熱心なるものなり、その科擧の試験に應ずるや、六十歳、七十歳もしくは八十歳にして毫も恥づる所なく、祖父と孫と同時に同一の試験場裏に現はるゝことも、敢て珍らしきことに非ず。今や來りてその實際を見るに、曾て聞きし所は事實にして、寸毫も虚構の話に非ず。現にわが輩が教へつゝある學生に四十三歳のものあり、父と子と相携へて共に同一の教場に出づるものあり、而かも何れも熱心に日本語英語を勉強しつゝあるなり。去年十月服部博士と岩谷博士は北京大學に於て、その入學試験を舉行せられたり。試験終了の後、服部博士がわが輩に語り聞かせたる試験場裏の當日の有様こそ、實に一奇觀なりしならめと想像せらるれ。受験者五百有餘名の内には、十歳を最年少者とし、六十二歳のものを最年長者として、四十年代、五十年代の者も、其の數頗る多く、白髮雪の如き老人と、紅顔花の如き少年と相交りて、共に試験を受け、中には八十二歳にして入學願書を差出したるものもありしかど、それはあまりに老年なればとて、願書を却下したりといふ。且つ試験は從來の習慣に従つて、時間の制限を置かざりしかば、夜



に入りて點燈の下に、なほ熱心答案を認めたるものも多かりしといふ。彼等が科擧の試験に對する熱心も、以て想像することを得べきに非ずや。而かもその熱心は、單に學問を愛好するが故に然るか、高尚なる眞理を發見せんが爲めにし、て然るかもしくは、又た及第の名譽を得んが爲めにし、て然るか、擧人進士の學位を得て世に誇らんが爲めにし、て然るか。

聞く、從來北京に於て三年毎に科擧の試験の擧行せらるゝや、その及第して進士の最高學位を授與せらるゝは、僅かに二百名と限られたるに係らず、四方之に赴くもの一萬有餘人の多きに及びしといふ。本年の春の試験の如きもまた一萬を超ゆる數百名の受験者にして、開封府は爲めに雑踏を極めたりといふ。また盛なりといはざる可からず。而して各自彼の穴の如き試験室内に幽閉せられ、數日の間寸歩も外出を許されず、日夜兀々として對策を作り、幸にして及第の榮譽を擔ふに至れば、彼等の得意は實に非常なるものにして、その郷里に歸るや、盛んなる儀式ありて、長く連なる行列を整へ、意氣揚々として郷門に入りしといふ。且また試験官が及第者の中より撰拔したる十名の優等者は、恐多くも皇帝

陛下の御前に咫尺して、更に親しく皇帝の策問に答へ、而して十名の中より皇帝の更に撰みたまへる三人は、最大の名譽を得たるものとして、平生は閉されて、何人も通行する能はざる宮城の正門を開き、正陽門の正門を開き、宮城内より直ちに盛大の儀式を備へて、一直線に歸り去ることを得たりと云ふ。その名譽や實に數十萬讀書人の垂涎して見る所、羨望して聞く所。彼等は此の名譽を得んが爲めに、終生兀々死の至らんとするを知らざるまでに熱心なるか。曰く否な。彼等は此の名譽よりも更に大に欲する所あるなり。而してそは唯だ利是なり。彼等が此の最高の名譽を得んとするも、つまる所は利の爲めなり。何となれば、支那に於て名譽の在る所は、即ち利の最も多くを有する所なればなり。蓋し名譽を好むは人間の常情なり、特に自大自尊の念を以て、化成せられたる支那人が、名譽を愛重して、以て人に誇り、人に高ぶるの具と爲さんとするは、固よりいふまでもなきことなり。然かも利の伴はざる徒爾の名譽は、今世支那人の敢て大に愛重する所に非ず。利は支那人の理想の神なり、黄金は支那人の守本尊なり、彼等の頭腦は利得の考を以て満たさる利のなき所は、即ち支那人なきなり。

利は支那人の理想の神



既に秀才舉人乃至進士の試験に及第するや、利は彼等を迎へて門に待てり。彼等は喜んでその門に入る。賄賂忽ち飛んで、彼等の懐中に入り、官金潛かに來りてその袖に隠る。彼等は之を愛子の如くに愛育して、成長發達せしむることを怠らず。されば見よ、今日支那商人が内地の商賣に、外國との貿易に、巨額の資本を運轉して、商界に覇を振へるは、支那官吏の出資その多きに居るといふに非ずや。また以て支那官吏が如何に貪慾に、如何に蓄財に熱心なるかを見るべきなり。

利を好み、黄金を愛することの極みは、遂に人の物を盗むに至る。泥棒根性の支那人に盛なる、また何ぞ怪むに足らんや。支那の港に入りて暫く碇泊をなしたるものは必ず知らん。船中に入込み來りて、煩さく上陸を勸むる舟子や、荷揚の爲めに多數入り來る苦力などが、船員船客の目を掠めては、何物をか竊み去らんとすることを。彼等は他の所有物を盗むことを以て、惡徳の甚しきものとは思ひをらぬかのやうなり。北京に來れば、更に竊盜強盜の多きに驚かざるを得ず。北京街上至る處、夜を籠めて拍子木ならぬ木魚の聲の節面白く聞ゆるは、盜

賊に備ふる夜番の巡廻するものなりと云ふに非ずや。而して彼方此方に夜間時々砲聲を耳にするは、わが家には銃砲の備へあり、我家の守り此の如し、泥棒の來る何かあらんと、豫め盜賊を威嚇するものなりといふに非ずや。北京の金融機關は、爐房銀號、錢舖、當舖の四つに分たれ、爐房は銀錢の鑄造を主とし、兼て預金又は支拂を爲すもの、銀號は銀行の大なるもの、錢舖はその小なるものにして、兼て兩替を業とする者、當舖は先づ質店と見て可ならんか。而して北京市中に於ける爐房は二十三戸、銀號は十七戸、錢舖は百八十戸、當舖は二百餘戸あり。夜間街上を通行すれば、此等の銀行質店等は固く戸を鎖して、戸前には必ず兵勇の立番して夜を守るあり。他の商店の如きも夜間多くは戸を閉して、賣買を爲すものは僅かに某々街に限らるゝといふの有様なり。また以て盜賊の徘徊する甚しきを證すべからずや。賤民の盜を爲す恕すべきこともあらん。彼の讀書人なるものにて、なほ油斷のならぬものなりといふに至つては、實に言語同斷の話に非ずや。北京に日本人の設立に係る學校あり、校内に出入する支那學生に對しては、兼て嚴重の豫防を爲すに非ざれば、書籍物品の紛失を免れず。學生



利を好むものには隣人なし

國民の中堅

相互の間に於ても互に相警戒して暫くもわが所有品の注意を怠らず。運動場に於て體操の練習を爲す時に於てさへその所持品を携帶し來るといふ。如何にも困り果てたる人民に非ずや。

利を好むものには隣人なし。唯だ己れあるのみ。豈に國家あらんや。國民あらんや。わが輩が支那に國家なしといふは之に外ならず。利を以て集るものは、また利を以て散す。他日外人四方より來り、十八省を分割してその有となさんとき、彼等は散じて利の在る處に就き、敢て其の國土を顧みるものなきに至らん。わが輩の眼を以て見れば、國敗れて唯だ山河を存する悲惨の状態を現すべきが如しと雖も、彼等は左まで深くは感ずる所なかるべし。國家の存否は彼等の問ふ處に非ず、唯だ利存すれば彼等は十分に満足することを得べければなり。

今の時に當りて、支那國民の中堅ともなり、支那國民を奮起せしめ、支那の國家を改革して、東洋の天地に大帝國を建設すべきは、彼の讀書人ならざる可からず。而かも彼等の腦中、唯だ利存するのみにして、毫も愛國の大精神、愛民の至情なきこと、彼が如くなるを見れば、わが輩が大聲疾呼して、支那亡國を喝破するも、徒ら

亡國の哀音

支那人頑夢

に、大言壯語して人の耳目を聳動するものに非ることを知らん。

否な音に之のみに非るなり。杜鵑の聲の悲しく、鳴き過ぐるが如く、支那亡國の前兆を示して、我輩の眼前にその幻像を書き、支那亡國の哀音を鳴いて、我輩の耳朶を掠め去るものは、支那人の遲鈍なる神經、是れなり、支那人の懶惰なる是れなり、支那人の腐敗、是れなり。乞ふ、我輩をして更に説く所あらしめよ。

支那が西洋各國と接觸し、西洋の艦船を迎へ、西洋の文明と逢着したるは、事實に於て日本と同時もしくは以前に非ずや。而してその西洋の文明を感知し、之を輸入し、之を利用するの點に於て、支那は確に三十年を遅れたり。人は支那今日の形勢を推想して、曾て我國が經過したる維新當時の徑路を經過しつゝありとなす。その外觀に於ては稍似たるものありと雖も、その真相を觀じ來れば、大に然らざるものあり。わが輩の見る所を以てすれば、支那人の頑夢は頑乎として、なほ覺めず。その全く醒覺して、内自己を覺り、外世界文明の眞意を知得するに至るを得るや否やも、尙ほ未知數なり。何となれば、保守的文明の中に保育せられて、數千年の久しき時間を經過し來りたる支那人の腦髓は、既に保守的に固



結化石して、その神經極めて遲鈍容易に他の刺撃を知覺し能はざればなり。從來各地に續起する宣教師虐殺の如き外歴を感知する敵愾神經の敏銳なるを證するが加くなるも其の實は決して然らず。彼等はみな常業なき無賴の徒に非れば恒産なき赤貧の賤民擾亂に乗じて衣食を得んとするか迷信に驅られて夏蟲の自から火に入らんとするもののみ。適々以てその頑迷を證し無知を證するに過ぎず。

或著者が支那人の特點を擧げたる中に柔順にて人に抗せざるを以てその一となせり。蓋し柔順は一種の美德なり而して或る種の支那人は慥かに之を有す。而かも彼等の柔順は意氣地なき餘りの柔順にして毫も美德とするに足らず。彼の苦力を見よ手以て之を擲ぐれば微笑を以て迎へ而かもその働くや遅々として牛の如し。彼の車夫を見よ快鞭一撃すれば走ること馬の如く而して更に怒る處なし。彼等が神經の遲なること斯の如し。之をして美德と稱すべくんば孰れをか美德といふべからざらん。

或る種類の支那人はまた之に反して傲慢自尊徒らに邊幅を修飾して以て自

から高うし以て人に跨らんとす。蓋し解釋の仕様によりては自尊もまた人間の美德なり。内自から省みて心靈の至大至尊なるを思ひ眞性の天に似たるものあるを思ふ時人は自から高うせざるを得ず。而かも支那人の自尊はその心靈の奥より湧き出でたるものに非ず。唯だ虚榮を喜び傲慢を喜ぶ心靈の病的現象にして今は早やその痼疾となり靈的神經萎靡し盡して容易に他に高尚なる精神を受容すること能はざるものとなり了れり。彼の所謂高位大官なるものを見よ。

北京宣武門外の大街を南に五六町行き當りたる丁字街を菜市口といふ。斬首の刑を執行する處なり。囚人の罪既に定まりて將に斬首せられんとするや、六人七人もしくは十人二十人必ず此の街上に引出され衆人看視の中に於て首刎ねらる。特に親殺し夫殺しなど罪の甚しきものは先づ乳を殺ぎ婦人ならば次に双手を斷ち双脚を切り而る後に首を斬るなど其の刑極めて慘酷にして實に見るに忍びざるものありと雖も支那人の之を見るもの何等の感をも起さざるかの如く刑終りて流血の淋漓たる跡には直ちに灰を散じ砂を撒いて野菜を



街上の屠殺

賣り、菓物を商ふなど、極めて平氣なるものなり。刑の斯く白日衆人の中に於て執行せらるゝは、もと衆多の民人を警戒するの意に出づるなるべしと雖も、それは唯だ名のみ、神經の既に固結せる支那人に對しては、毫もその實効なきを如何にせん。昔しは君子は庖厨を遠ざくといひけん支那人も、今は白日、至る處の街上に、羊を殺し、豚を殺して、毫も意とする所なく、而して皮を剥ぎたる儘の羊豚を、店頭並べ、吊して賣買しをるに非ずや。果して仁慈の心の彼等の中に存するや否やを疑ふ。

憐憫の情なし

罪人に對し、獸畜に對しては、聊か恕すべき所もあらん。彼の憐むべき無告の民に對して、些の憐憫の情なきかの如くなるを見るに及びては、如何にもその無頓着の甚しきに驚かざるを得ず。わが輩曾て所用ありて只ある街を過ぐ、老婆あり、倒れて街上の中央に横はる、急病の爲めに苦んで遂に死に至れるか、もしくは又餓えて死にたるか、其の原因は知るに由なかりしと雖も、兎にも角にも、憐れなる最後を遂げたるなり。死に至るまでの間に於て之を救ふの方法はなかりしか、よしや死は天命と定まりたりとするも、之を介抱し、之に藥を與へて、その

最後を快くせしむるものはなかりしか。否な、支那人の仁愛心は自己の外に及ぼす程に、左様に大なるものには非るなり。見よ、眞晝中に憫むべき老婆の死して街上に横はるあるも、之を顧みるものさへなきに非ずや、馬車、人力車は之を避けて走り去るに非ずや。わが友某氏、某學堂に教習たり。曾て支那學生の毒を仰いで、自から死なんとしたるものあり、某氏は驚いて之に藥を與へ、之を介抱し、漸くにして之を蘇生せしめたるに、一事務員の支那人なるものあり、人に語つて云ふやう、日本人は何故に自から死なんとするものを介抱などして、之を甦らしむるや、われ其の意を解せず、如何にも不思議の至なりと、而してその同胞なる瀕死の學生に對するもまた極めて無頓着なりきとぞ。無頓着もまた甚しからずや。毎年嚴寒の北京を襲ひ來るや、市上に彷徨する非人乞食乃至貧民の、餓る且つ凍えて行倒れたるもの中々に多く、街上の往來に、その死骸に出會すこと敢て少からぬ次第なるが、早くも一週間を経過するに非れば、之を取片付くるものもななく、犬などのその肉を食ひ去るに任かせたり。支那人民の慈悲心なきは既にいふ處の如し。さらば、支那に人民保護の政府ありや、あらばその無頓着もまた甚



し、いはざる可からず。

支那が外國と衝突して、其の打撃を受けたること幾回ぞ。北の方露國と衝突しては、黒龍江以北の地を失ひ、彼をして遂に浦港に割據することを得しめ、英佛同盟の軍と戦ひては、廣東に敗れ、白河に敗れ、天津に敗れ、國都北京を敵軍に荒らされて、皇帝遠く北の方熱河に逃れたまひ、百萬の償金、不當の要求も止むことを得ずして之を容れ、更に臺灣に於て日本と事を生じ、南清に於て佛國と戦ひ、清國に取りては皆な、その自尊の頭を下げ、傲慢の氣を屈して、大に覺醒すべき動機に非ざるはなかりき。而かも彼等は容易にその頑夢より覺むること能はず、遂に日清戦役に於て大敗を取り、大打撃を蒙るに至れり。日清戦役の局を結ぶや、李爺潜かに以爲らく、われ戦争に於て敗ると雖も、外交の術に於て勝てり、わが外交の術を見よと。而かも彼れ馬關條約を締結し、その自尊の頭を揚げて國に歸るや、機乗すべしと兼て待構へたる反對黨の反抗甚しく、彼を以て賣國の奴となしたりしかば、彼は西太后の袖に縋りて漸くその攻撃を避け、露國に往きて、その皇帝の戴冠式に列し、僅かに一身を全うすることを得たり。既にして西太后の勢

力北京朝廷に重きを爲さざるを見るや、彼は露國の勢力に依りて、その地位を保たんとしたりしかば、露國の勢力は潮の如く北京朝廷を壓し來れり。されば露國が旅順大連を租借否な貰ひ受くるや、實に易々たる者なりき。その滿洲鐵道の敷設權を獲得したるも、實に難作もなきことなりき。尋いで獨逸は膠洲灣を強奪して、潜かに山東を窺ひ、英國威海衛を譲り受けて、兩國の野心を阻害せんとし、清國は黃海及び東海に出るの道を失ふのみか、佛國は南方より雲南、兩廣に迫り、尋いで楊子江岸の不割讓、福建の不割讓となりて、李爺が曩日の得意なる外交も、是に至りて滅茶々になり了れり。而かも彼等の頑鈍なる更に覺醒する所なく、徒らに政權の爭奪に骨を折り、地位の維持に心を勞して、外歴の岩の如く迫り來るを知らず、遂に又券匪の亂、北清を騒がしめて、再び北京を外國兵に蹂躪せられ、皇帝西の方西安に行幸せさせたまひぬ。和議成りて後、皇帝都に歸らせたまへば、清國の故郷なる滿洲三省は殆んど露國の所有の如く然り。之をして憤慨する能はずんば、何を憤慨すといはんや。而かも彼等の愛國的神經は、些の鋭敏を加へざるなり。



近時支那が頻りに外國の教師を雇ひ、外國の技師を聘して、學校を起し、兵制を改革し、警察制度を設け、工業、農業を振起するが如くなるは、一見清國の覺醒を意味するが如く、人皆な以て支那の啓發得て期すべしと爲すものゝ如し。而かも來りて清國を見よ、支那人民を見よ。慷慨國事を談ずるものを何處に求むべきか。誠心誠意家國の憂を以てわが憂となすものを何の處にか尋ねん。彼等の所謂改革なるものは極めて暢氣なるものなり。之を稱して大國民の氣風といはんか。此の大國民はその改革の事業の半ばならざるに、數多の屬國民となり了らん。見よ、昔に二回、三回のみならんや、五六七回の大打撃を受けながら、彼等の頑夢は頑として醒めざるなり。如何にも無神經極まる人民に非ずや。世界に文明の大潮流あり、今やその物質的なるを、精神的なるを問はず、世界を横流し來りて、東亞の海岸に高く渦紋を書きつゝあり。わが日本帝國が嘗て此の潮流に接觸するや、直ちに之を汲み、之を注いで國家を一洗し、今やその潮流に乗じ、順風滿帆、前途の好望を抱いて、世界の舞臺に突進しつゝあるなり。隣國の支那は如何。前既に述ぶるが如く、その知覺神經は、文明の大潮流を感知する

程に鋭敏ならざるなり。彼等は阿片煙の如く、有毒なる支那固有の保守劑を飲んで、今に頑夢を樂みつゝあるなり。凡そ文明の潮流の洗ふ所之に逆へば海嘯の如く、その國を覆へし之に乗ずれば滿帆の船の如く、その國を伴ふて文明の道を走らしむ。目今の支那を見て、遂に文明の潮流に乗ずるに至れりとなすものあらば、その極めて皮相の見たるを免れず。見よ、彼等が早晚文明の海嘯に覆さるゝ時あるべきを。

國の將に亡滅せんとするを知るや知らずや、よし知りたりとて、損得の外には多くの痛痒を感せず、高尚なる心靈の知覺を萎廢せしめたる支那人は、平々然として遊惰逸樂に耽り、徒らに肉慾を貪りつゝあるなり。誰か支那人を勤勉の人民なりといふ。彼等が長き煙管を携へ、長き豚尾髪をふら下げて、悠々然として行歩する様を見よ、懶惰の相はその眉目の間に現はれをるに非ずや。その歩行の慢々たるに看取し得べきにあらずや。彼等は之に利を示す時、勤勉なるが如く見ゆるなり。鞭韃その頭に加はる時、忍耐力あるが如くに見ゆるなり。更に彼の中等社會が、悠々安閑として日を消し、適々讀書研學、新智識を求めんとす



る者あるも半ば遊び仕事の如く心得て急がず、迫らす悠々安閑たるに至つては賞めなば根氣強しとも稱することを得ん。而かも國家の存亡を眼前に控へたる國民に非ずや。

男女間の腐敗

更にわが輩をして氣の毒の思に堪へざらしむるものは男女間の腐敗是なり。男女七歳にして席を同うせずとはその古聖賢哲の教へなり。而して現今の支那もまた男女の區別甚だ嚴重なり。試みに支那人を訪問せよ、その家内に於て婦人に會合すること殆んど絶無に非ずや。街上に於ても婦人に出會すること極めて少なく、彼等の外出するものは男子に比して、恐くは百以下ならん。往いて演劇場内を看一看せよ、婦人は全く跡を絶ちて、見物人は唯だ男兒のみなり。否な全く女兒なきに非ず、稀に女兒を見ることがありと雖も、それは七八歳乃至十二三歳の少女のみなり。斯の如く男女の區別極めて嚴重なるはその反面に於て却て淫靡の風の甚しきを證するものなり。見よ、善妾は彼等の得意として人に誇る所にあらずや。年尚ほ二十五歳の青年にして妾を蓄ふるものあるはわが知る所なり。年三十と二歳にして已が年の數よりも多くの兒女を有するもの

不品行なる病人

あるもまたわが知る所なり。北京城外の羅馬市や韓家兒胡同に、二千の男娼を蓄へたる娼家の繁榮はわが輩の耳にする所なり。滿州八旗といへば、猶ほ徳川幕府の旗本の如きものなり。而るに彼等の父母がその兒女を勸めて、外國人に淫を賣らしむるものありと聞くに至つては、實に言語同斷といはざる可からず。見よ、更に驚くべきものあり、北京城の内外を漫歩するものは、必ず數多の廣告の到る處の壁上に帖附せられたるを見ん。而してその最も多きものは墮胎劑の廣告なり。さて又その種類の多きことよ、わが輩の友人某氏曾て半日を費して、その種類を數へたるに、行く道すがら手帳に記し得たるもの三十二種を得たりといふ。なほ微細に點檢せば、更に數種を得るや必定なり。斯く罪惡を人に勸むる藥劑を公然と廣告するさへ既に異とすべきに、その種類の斯の如く多く、その廣告の斯の如く盛なるを見る時は、わが輩は實に慄然として寒心せざるを得ざるなり。西人曾て支那人を評して不品行なる病人といへり。わが輩の見るところもまた之に異ならず。病に次ぐに不品行を以てす、その治し難きや當然のことといふべきなり。



支那人もまた人間なり

然らば則ち支那啓發のことは全然望を屬すべからざるか。曰く否な。支那人もまた人間なり。至仁至愛なる皆天の深意に依れば彼等もまた其の兒孫に外ならず。彼等の精神腐爛したりといふと雖も何れの處にか人間本來の眞を存せざることあらんや。もし世界を同胞とする至大博愛の心を以て忍耐努力に教へ之を導かば恒久の時間は彼等を伴ふて世界と共に文明の大道を歩むに至らしめんか。然かも外歴の力の極めて急迫なるを如何せんや。彼等の頑夢漸く覺め彼等の眼始めて開けて四方を觀望せん時四圍の光景の全く變換せるに驚きて涙潜々たるものあらんも時既に遅かるべきなり。

一四四

清國訓化の最好期

されば支那人民を精神的に啓發して世界文明の好伴侶たらしめんとする教育家、宗教家、卿等心する所あれ。清國に於て大に訓化の爲めに力を盡さんば困難と雖も今の時を以て最好の時となす。今の時に於て出来る限りの廣き範圍に其の心力を注がずんば他日各國の國旗の東西南北に翻翻たらん時遂にその力を盡すべき道なきに至らん。

更にわが輩はわが國の政治家、實業家、その他諸般の事業を經營して大に支那

清國經營の急務

に於ける我國の利權を獲得せんとする人々に向つて告ぐる所あらん。もし我輩の論ずる所をして大に謬る所なからしめばわが國民が支那に向つて大に活動すべきは今の時を以て最も急なりとなす。露、獨、佛の三國が各々その方面に於て拮据その經營を怠らざるはわが國民が知れるよりも更に大なるものありて存するなり。もし今にして支那に於ける我國の經營を怠り利權を失墜するに至らば必ず國家百年の憂を殘さん。よしや財政の窮乏は大にわが國民の活動を制限する處のものありとするも上下一致心を此處に注ぎ力を此處に戮せ大に國民の對外心を奮起せしめて共に與に鞠躬努力する處あらば國民精神の集注する所敢て何事か成らざる事のあるべき。その學校設立の如き、宗教傳道の如き、滿洲移民の如き、鐵道敷設の如き、鑛山開掘の如き、製造所設立の如き、航海運搬業の擴張の如き、日清銀行設立の如き、その他諸般の經營の如きは、今此處に詳論するの暇なし。わが輩は、我國民が支那經營の事業の如何にも手續きを見てもとかしさに堪へざるなり。



北清見聞錄終

明治三十七年六月二十四日印刷  
明治三十七年六月二十七日發行

著作者

高瀨敏德

發行者兼印刷者

金港堂書籍株式會社  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

右社長  
原亮一郎  
東京市下谷區祖泉寺町四百十四番地

印刷所

會社  
東京國文社  
東京市京橋區宗十郎町十五番地

賣捌所

各府縣特約販賣所



不許複製

北清見聞錄  
定價金四拾五錢



福本誠氏著◎愛國本義

定全價金壹參拾錢冊

矢野雲龍氏著◎成功策

定全價金七拾錢冊

池邊藤園氏著◎美姬遺蹟

定全價金壹貳圓冊

橋本忠夫氏著◎詩人ハイネ

定全價金四拾錢冊

齋藤甲花氏著◎荊萱集

定全價金四拾錢冊

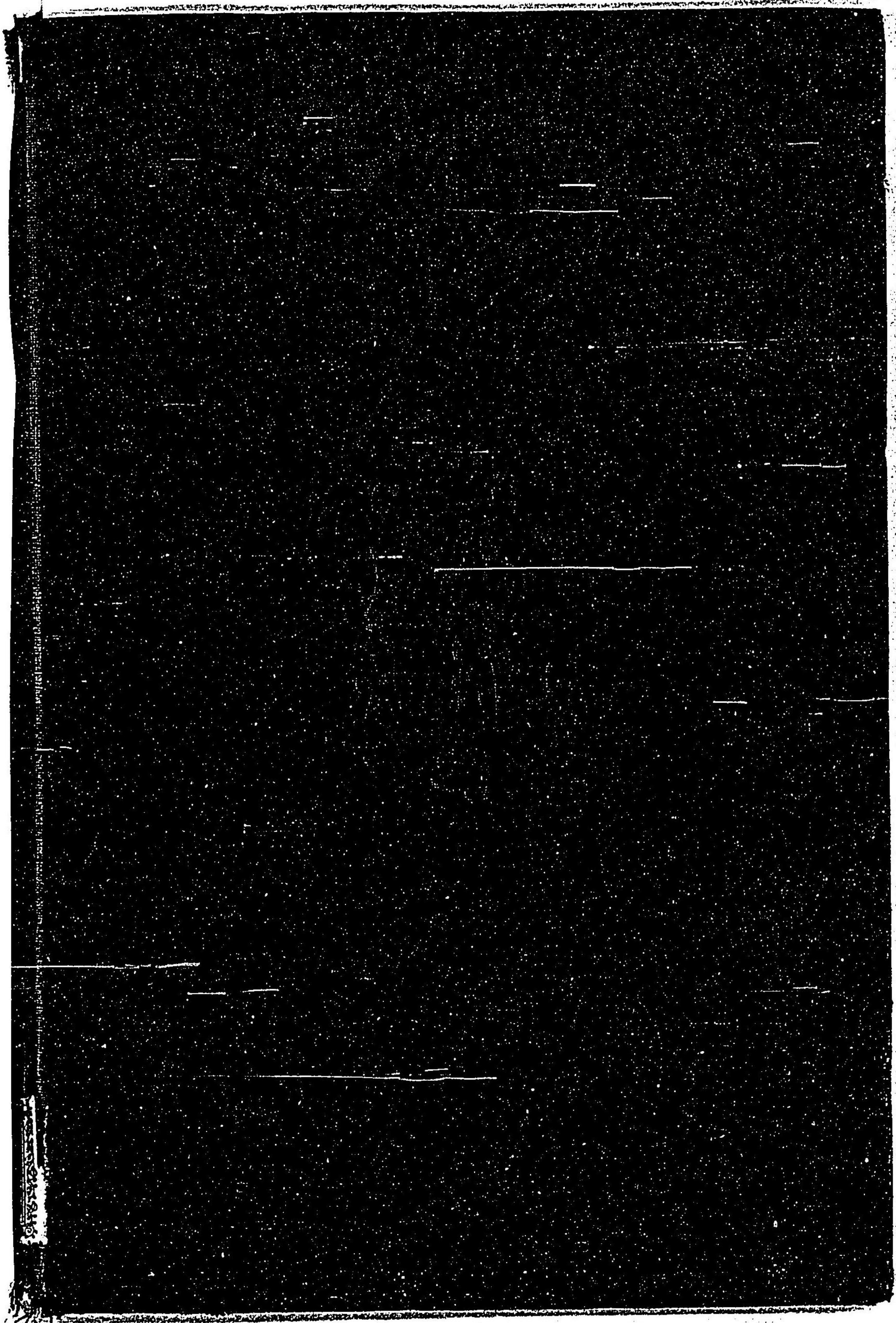
血達磨氏著◎陣中語

定全價金貳拾錢冊



45  
393







45  
393

002925-000-8

45-393

北清見聞録

高瀬 花陵(敏徳) / 著

M37

ACB-6498





